

金融環境の現状評価

(概 況)

資金仲介活動をみると、民間銀行は、基本的には慎重な融資スタンスを維持しているものの、大手行などでは貸出を増加させようとする姿勢を続けている。また、社債、CP市場など資本市場も好環境を維持している。

一方、企業の資金需要面では、収益の回復に伴うキャッシュ・フローの増加などを背景に、実体経済活動の改善が外部資金需要に結びつきにくい状況が続いている。また、企業の借入金圧縮スタンスも維持されており、これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

以上を背景に、民間銀行貸出は、基調としては弱めの動きが続いている。この間、社債やCPの発行は、落ち着いた動きを続けている。

6月のマネーサプライの前年比伸び率は、前月に比べ低下した。

企業の資金調達コストをみると、貸出約定平均金利は概ね横這い圏内で推移している。また、社債発行金利も、低水準で推移している。CPの発行金利は、引き続き低水準ながら、7月中旬にかけてやや上昇した後、足許弱含んでいる。

こうした環境のもとで、企業からみた金融機関の貸出態度は厳しさが後退しており、企業金融には緩和感が広がりつつある。

1. 貸出・資本市場調達

民間銀行貸出の動向をみると（図表2）、7月は、預金保険機構向け貸出の増加などから、前月に比べマイナス幅が小幅縮小した（償却要因等調整後前年比：4月-1.8%→5月-2.2%→6月-2.1%→7月-2.0%）。基調としては、弱めの動きが続いている。

この間、民間銀行借入以外のルートからの資金調達は（図表3、4）、総じて落ち着いた動きが続いている。

—— 7月の社債発行（普通社債+転換社債+ワラント債<除く銀行普通社債>）は、前月から大きく減少した。これは、発行（ローンチベース）が月後半に集中し、これらの払込みが8月にずれ込んだことによるものである。そごうの民事再生法適用申請をきっかけとした起債の延期・見送りといった動きは、今のところ見られていない。この結果、社債発行残高前年比は、4ヶ月連続で低下した。この間、CP発行残高は、比較的高めの水準で推移している。

2. 量的金融指標

(1) マネタリーベースの動向

7月のマネタリーベース前年比は（図表6）、銀行券の伸び率鈍化を主因に、前月に比べ伸び率が低下した（4月+11.7%→5月+7.6%→6月+6.4%→7月+5.8%）。

(2) マネーサプライの動向

6月（注）のマネーサプライ（M2+CD）は（図表7）、前年比プラス幅が縮小した（4月+2.9%→5月+2.2%→6月+1.9%）。

（注）7月の計数は9日に公表の予定。

3. 企業の資金調達コスト

貸出金利の動向をみると、貸出約定平均金利（新規実行分）は（図表11）、概ね横這い圏内で推移している。

—— 6月の約定平均金利（短期）は、ほぼ横這いとなった。一方、同（長期）は、5月の特殊要因（信託銀行の整理回収機構向け低利大口貸出）の剥落等から、上昇した。

—— この間、スプレッド貸出のスプレッドは（図表12）、短期においてこのところやや拡大傾向にある。これは、中小企業向けのウエイトが増加するといった要因が背景にあると考えられる。一方、長期は振れを伴いながらも横這い圏内で推移している。

CP発行金利は、引き続き低水準ながら、ゼロ金利政策解除観測の高まりを受けて7月中旬にかけてやや上昇した後、足許弱含んでいる。社債発行金利は、低水準で推移している。スワップ・レート対比でのスプレッドは、6月に若干拡大した後、7月は、AA格では縮小した（図表10）。ただし、これは、相対的に信用力の高い一部都銀の発行が大きかったためであり、基調的な変化を示唆するものとは考えられない。流通市場の一部に見られる信用スプレッドの小幅拡大の動きは、起債市場では今のところ観察されていない。

4. 企業金融の動向

資金需要面では、企業収益の回復に伴い、企業のキャッシュ・フローが増加していることなどから、設備投資の増加にみられるような実体経済活動の改善が、外部資金需要に結びつきにくい状況が続いている（図表15）。また、企業の借入金圧縮スタンスも維持されており、これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

—— ちなみに、主要銀行貸出動向アンケート調査（7月実施）をみると、7～9月の企業向け資金需要については、「横這い」とみる先が多い。もっとも、4～6月の実績は、前回調査（4月実施）の見通しに比べて、かなり下振れており、7～9月見通しについてもやや割り引いてみる必要がある。

▽ 資金需要動向の先行き見通し

—— 上段は7～9月見通し、
 () 内は4～6月実績、
 <>内は前回調査（4月）時点の4～6月見通し

	増加⑤	やや増加④	横這い③	やや減少④	減少⑤	合計	平均値
企業向け	0 (0) < 0 >	6 (2) < 10 >	40 (32) < 37 >	3 (13) < 3 >	1 (3) < 0 >	50 (50) < 50 >	3.02 (2.66) < 3.14 >
地公体等向け	0 (0) < 1 >	2 (10) < 4 >	44 (28) < 39 >	3 (8) < 5 >	1 (4) < 1 >	50 (50) < 50 >	2.94 (2.88) < 2.98 >
個人向け	1 (2) < 1 >	7 (4) < 8 >	37 (36) < 36 >	4 (7) < 4 >	0 (0) < 0 >	49 (49) < 49 >	3.10 (3.02) < 3.12 >

一方、資金供給面をみると、民間銀行は、基本的には慎重な融資スタンスを維持している。ただ、銀行自身の資金繰りや自己資本面での制約が緩和していることや、中期的な顧客基盤を確保するといった観点から、大手行などでは貸出を増加させようとする姿勢を強めている。

—— 先述のアンケート調査でも、金融機関は、中堅・中小企業向けを中心に貸出を増加させる姿勢を維持している。

▽ 貸出運営スタンス

—— 上段は7～9月見通し、

() 内は4～6月実績、

<>内は前回調査(4月)時点の4～6月見通し

	積極化<5>	やや積極化<5>	ほぼ不変<3>	やや慎重化<2>	慎重化<1>	合計	平均値
大企業向け	2 (1) <2>	9 (5) <8>	38 (42) <37>	0 (1) <3>	1 (1) <0>	50 (50) <50>	3.22 (3.08) <3.18>
中堅企業向け	11 (7) <8>	17 (13) <19>	21 (29) <23>	1 (1) <0>	0 (0) <0>	50 (50) <50>	3.76 (3.52) <3.70>
中小企業向け	17 (13) <17>	16 (13) <17>	17 (23) <16>	0 (1) <0>	0 (0) <0>	50 (50) <50>	4.00 (3.76) <4.02>

こうした状況のもとで、企業金融には緩和感が広がりつつある。ただ、全体としての資金需要が低迷を続ける中で、上述した銀行側の融資スタンスの変化は、貸出やマネーなどの量的指標の面には、なお明確には表れていない。

5. 企業倒産

6月の企業倒産件数は(図表18,19)、前月に比べ、わずかに増加した。

—— 内訳としては、引き続き小口倒産が中心となっているほか、このところ建設業のウエイトが高まってきている。

以 上

2000.8.8

企画室

「金融環境の現状評価」参考計表

- | | |
|----------------|-------------------------|
| (図表 1) | クレジット関連指標 |
| (図表 2) | 民間銀行貸出 |
| (図表 3) | 資本市場調達 |
| (図表 4) | 民間部門資金調達 |
| (図表 5) | マネー関連指標 |
| (図表 6) | マネタリーベース |
| (図表 7) | マネーサプライ |
| (図表 8) | M2 + CD 増減とバランスシート項目の対応 |
| (図表 9) | 信用乗数・マーシャルの k |
| (図表 10) | 金利関連指標 |
| (図表 11) | 貸出金利 |
| (図表 12) | スプレッド貸出のスプレッド |
| (図表 13) | MCI、FCI |
| (図表 14) | 企業金融関連指標 |
| (図表 15) | 企業の財務状況 |
| (図表 16) | 中小企業からみた金融機関の貸出態度 |
| (図表 17) | 信用保証制度の利用状況 |
| (図表 18) | 企業倒産関連指標 |
| (図表 19) | 企業倒産 |

クレジット関連指標

都銀・長信銀・信託銀の
個別系列は対外非公表

< 5業態貸出残高 >

— 前年比%

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	5月	6	7
5業態計	-1.7 [-5.9]	-1.9 [-5.7]	-2.3 [-6.1]	-2.0 [-4.5]	-2.2 [-4.7]	-2.1 [-4.6]	-2.0 [-4.5]
うち都銀	-2.6	-2.7	-2.4	-1.8	-2.1	-2.2	-2.2
長信銀	-6.1	-6.1	-5.8	-5.2	-5.2	-5.4	-5.5
信託銀	-0.7	0.3	-0.3	-1.1	-1.3	-1.6	-2.1
地銀	-0.4	-0.9	-1.5	0.0	-0.1	0.4	0.9
地銀Ⅱ	1.3	0.3	-2.7	-6.3	-6.3	-6.3	-6.0

(注) 平残ベース。償却・為替・流動化要因調整後。[]内の計数は調整前。

対外非公表

< 民間部門総資金調達 >

— 平残前年比%、前年比寄与度%ポイント

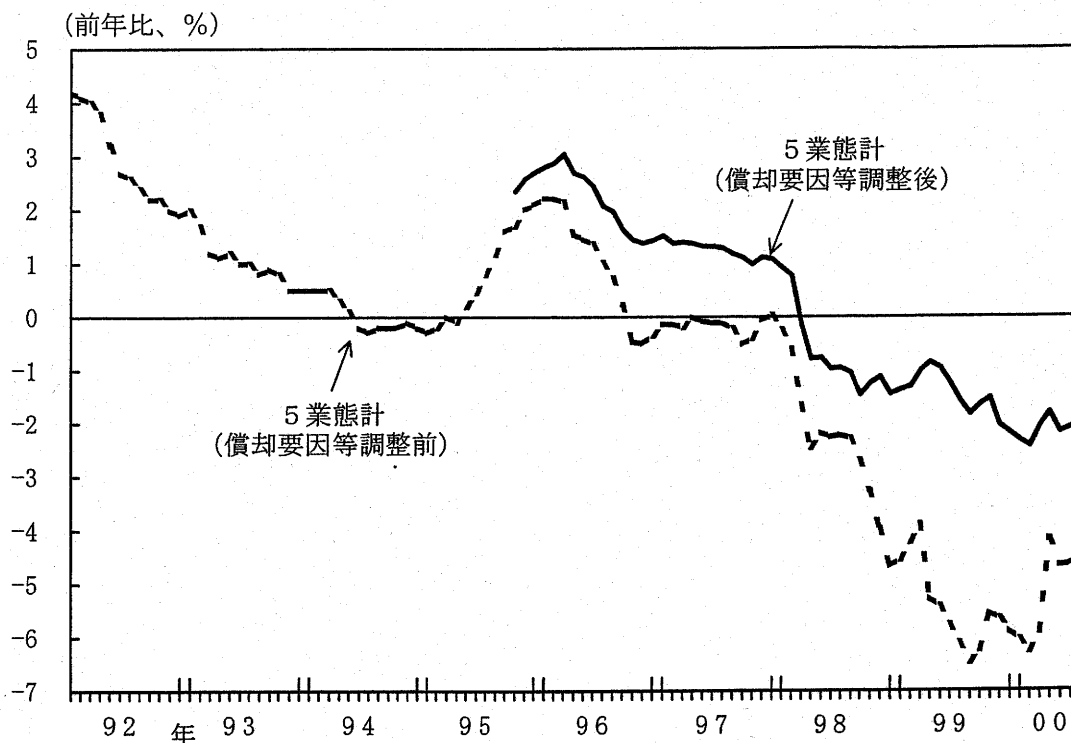
	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	5月	6	7
民間部門総資金調達	-0.2	-0.1	-1.0	-1.0	-1.1	-1.0	-1.1
7業態	-1.0	-1.1	-1.6	-1.6	-1.7	-1.7	-1.7
寄 大手生保5社	-0.2	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	-0.2
与 政府系	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2
度 3公庫	0.2	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
住宅公庫	0.1	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
直接市場調達	0.7	0.9	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6
CP	0.3	0.5	0.2	0.2	0.3	0.4	0.3
社債	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.3	0.2

- (注) 1. 償却・為替・流動化要因調整後。
 2. 7業態は、都銀、地銀、第2地銀、長信銀、信託、外銀、信金。
 3. 当月の計数を把握できない場合には、前年比伸び率を前月比横這いと置いている。
 4. 住宅公庫の当月の計数については、業務局財政収支Gの予測値を用いている。
 5. CPは、貸出債権ABC Pと銀行CPを除くベース。
 6. 社債残高は一部アイ・エヌ情報センターのデータを用いて推計。
 7. CP、社債は前当月末の平均を平残としている。

民間銀行貸出

98/9月以前の
「償却要因等調整後」
計数は対外非公表

(1) 主要5業態の貸出実績



(注) 1. 総貸出平残ベース。

2. 償却要因等調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構への承継分を調整したものである。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持ってみる必要がある。

対外非公表

(2) 主要3業態の貸出実績・計画

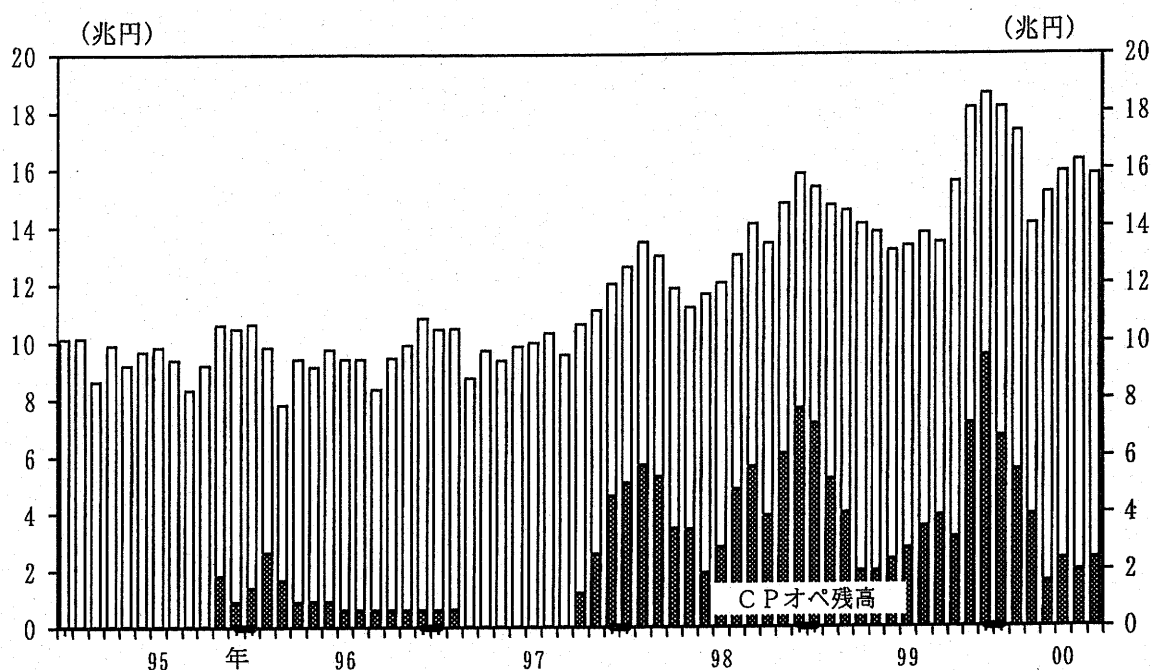
(前年比、%)

99/	12月	2000/	5月	6月	7月	2000/9月
9月	実績	3月	実績	実績	実績	6月時点
実績	実績	実績	実績	実績	実績	計画
▲ 1.8	▲ 2.2	▲ 1.7	▲ 2.0	▲ 2.2	▲ 2.3	▲ 0.9
[▲ 6.5]	[▲ 5.5]	[▲ 4.9]	[▲ 3.2]	[▲ 3.5]	[▲ 3.6]	[▲ 2.2]
				3月時点計画 ▲ 0.0		

- (注) 1. 都銀、長信銀、信託の総貸出月中平残。ただし、長銀、日債銀、日本信託を含まないほか中央信託が拓銀から譲り受けた額を控除している。
2. 山一特融を除くベース。
3. 償却・為替・流動化要因調整後。[]内の計数は調整前。

資本市場調達

(1) CP発行残高(末残)

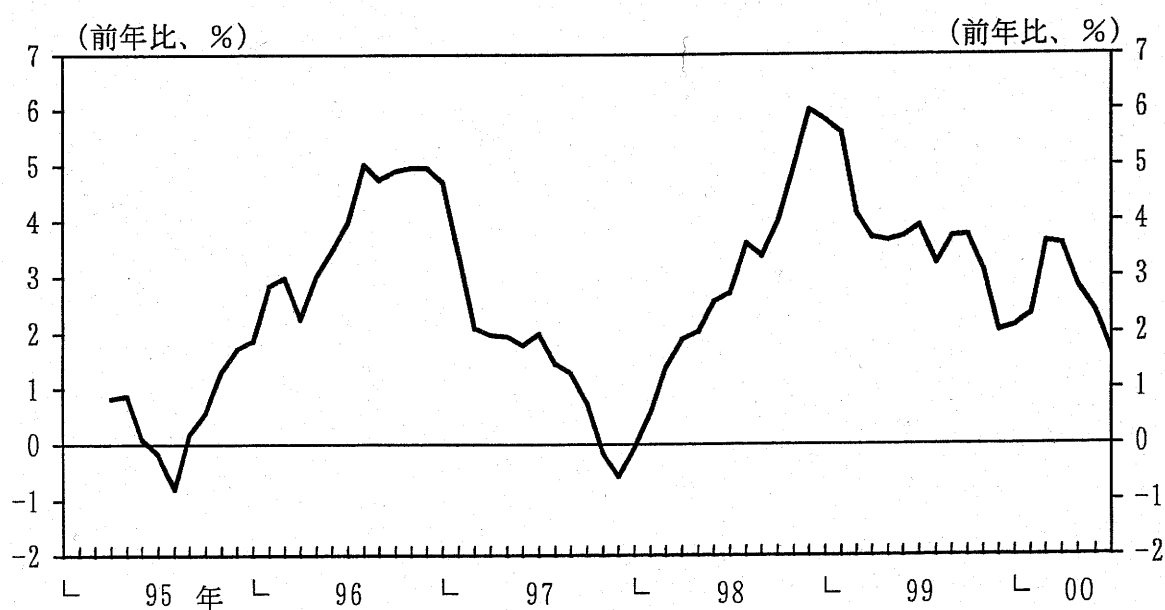


(注) 1. 日本銀行と当座取引のある銀行・証券会社の引受けによるもの。
2. 銀行CPを含まない。

(2) 社債発行額

	(億円)					
	2000/2月	3月	4月	5月	6月	7月
発行額	12,285	8,290	6,324	5,290	9,245	3,594
(前年)	(10,706)	(11,556)	(8,807)	(10,688)	(14,923)	(10,358)

(3) 社債発行残高(末残前年比)

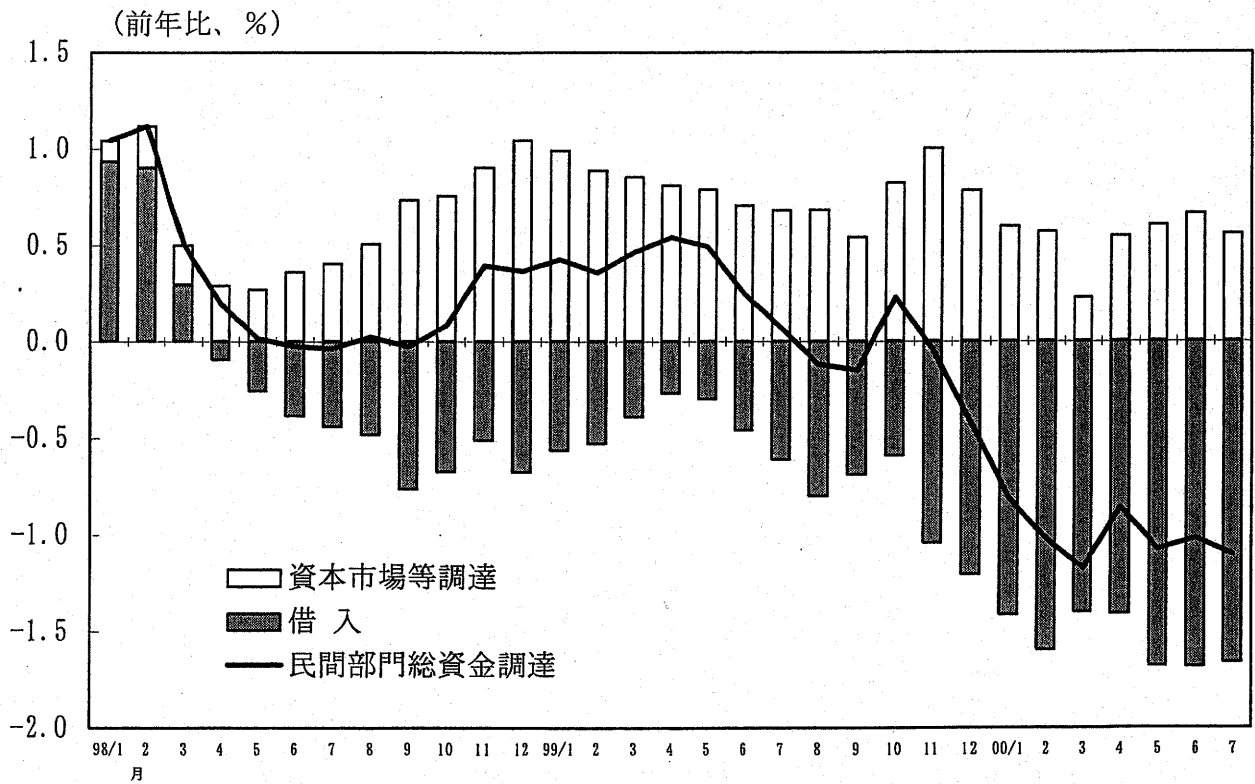


(注) 1. 普通社債、転換社債、ワラント債の合計。
2. 銀行普通社債を含まない。
3. アイ・エヌ情報センターのデータに基づき推計。

(図表 4)

対外非公表

民間部門資金調達



(注) 1. 民間部門総資金調達およびその内訳の定義については図表 1 参照。
2. 償却・為替・流動化要因調整後。

マネー関連指標

<マネタリーベース>

— 平残前年比、%；残高、兆円

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/5月	6	7	99年度平残
マネタリーベース	9.7	9.6	14.4	8.6	7.6	6.4	5.8	62
日本銀行券発行高	7.1	7.5	9.0	8.3	7.8	6.6	5.7	52
貨幣流通高	1.4	1.5	1.5	1.2	1.1	1.1	1.0	4
日銀当座預金	51.2	46.1	93.7	18.3	11.1	8.8	11.1	6

<マネーサプライ>

— 平残前年比、< >は季調済3か月前比年率、%；残高、兆円

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/5月	6	7	99年度平残
M2+CD	3.2	3.0	2.2	2.3	2.2	1.9		620
	—	—	—	—	<3.7>	<3.3>		
M1	11.8	12.4	11.7	10.2	9.9	9.0		219
現金通貨	6.2	5.9	7.5	7.7	7.1	6.2		51
預金通貨	13.7	14.6	13.1	11.0	10.7	9.9		168
準通貨	0.4	-0.1	-1.4	-1.4	-1.2	-1.5		384
CD	-24.0	-28.3	-22.9	-10.3	-15.7	-11.0		17
広義流動性	3.6	3.5	2.7	3.1	3.1	2.9		1,242
	—	—	—	—	<5.5>	<4.7>		

7月の株式投信・公社債投信の計数は8月10日午後3時まで対外非公表

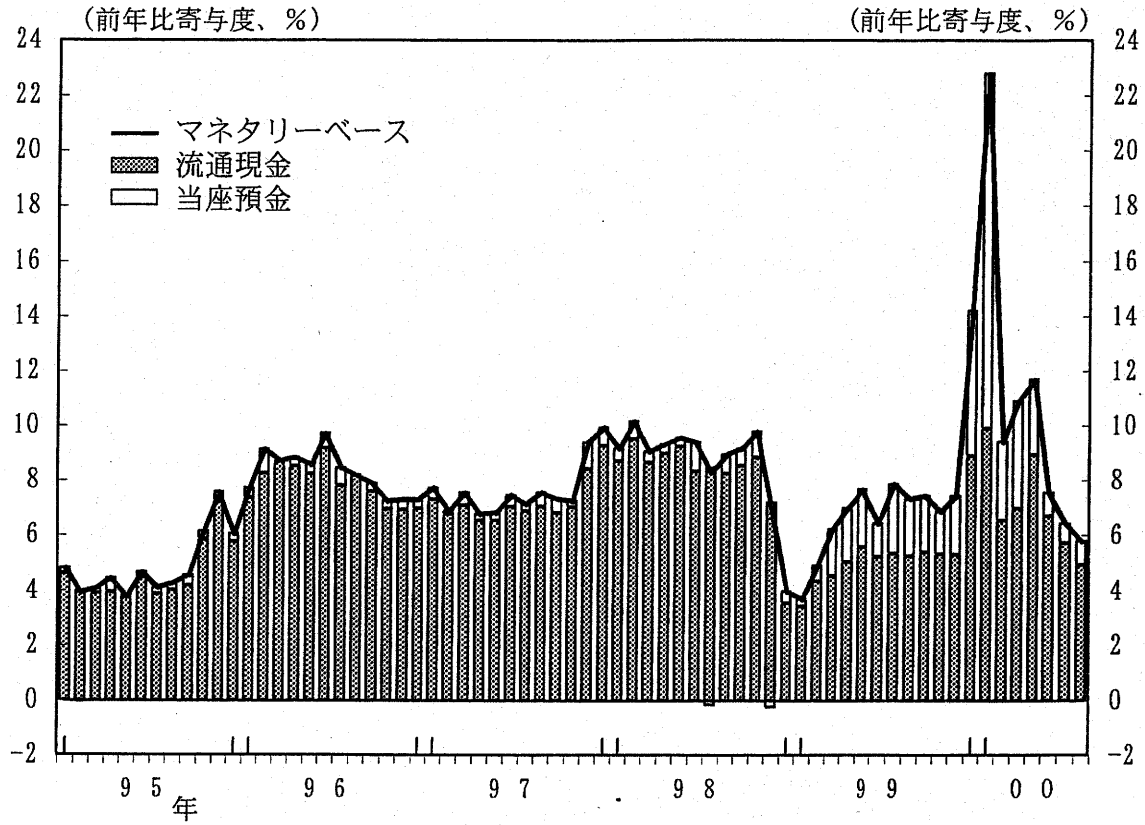
<各種金融商品の内訳（広義流動性ベース）>

— 平残前年比、%；残高、兆円

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/5月	6	7	99年度平残
郵便貯金	3.7	3.4	3.0	2.1	2.1	1.7		257
金銭信託	4.4	5.5	4.0	4.1	4.5	3.8		109
その他預貯金	1.0	1.3	1.0	1.1	1.3	1.0		105
国債・FB・債券現先	2.0	1.0	-5.2	5.3	6.9	11.0		51
投資信託	13.3	11.7	17.3	16.0	15.3	15.7		39
株式投信 ^(注)	(-1.7)	(-6.0)	(-1.0)	(13.0)	(12.3)	(17.3)	(20.4)	(16)
公社債投信 ^(注)	(18.2)	(16.8)	(26.5)	(16.9)	(16.7)	(17.6)	(15.0)	(38)
金融債	-2.2	1.4	2.9	1.1	1.3	0.6		30
外債	17.9	16.7	16.8	18.8	19.1	18.9		25
金銭信託以外の 金銭の信託	-2.0	1.1	-3.1	-3.1	-3.1	-4.4		5
金融機関発行CP	11.3	-5.5	-27.2	-68.8	-75.7	-89.9		2

(注) 投信の内訳を除き、Mベース（金融機関保有分は含まない）。投信の内訳は非Mベース。
また、同計数は末残の前年比（証券投資信託協会調べ）。

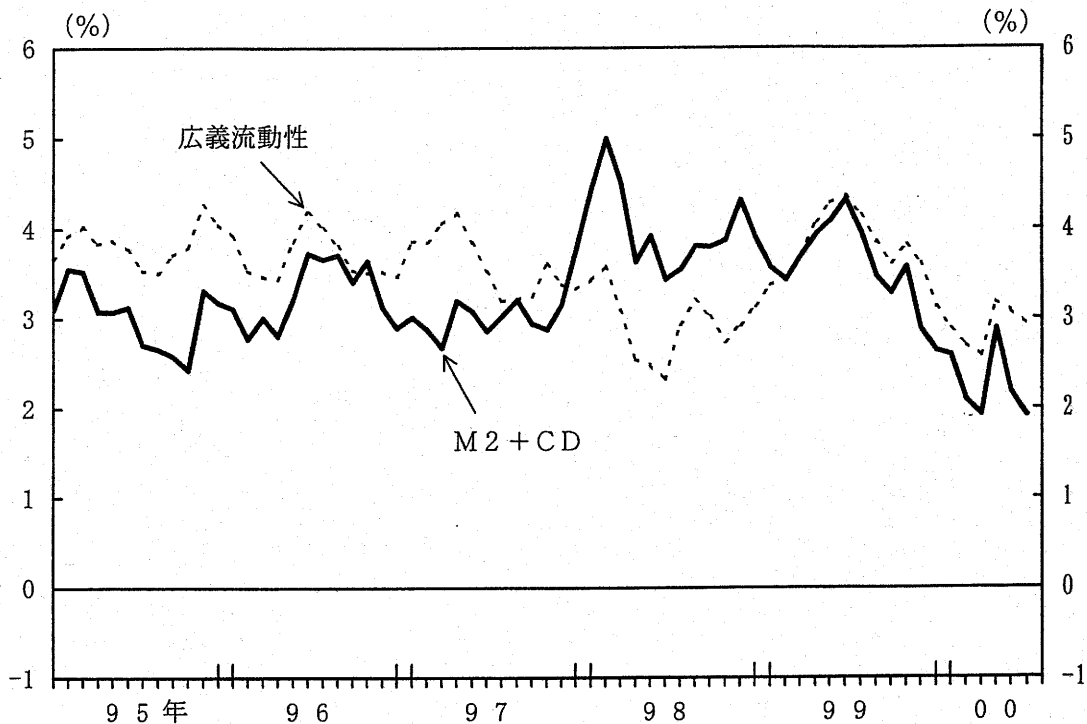
マネタリーベース



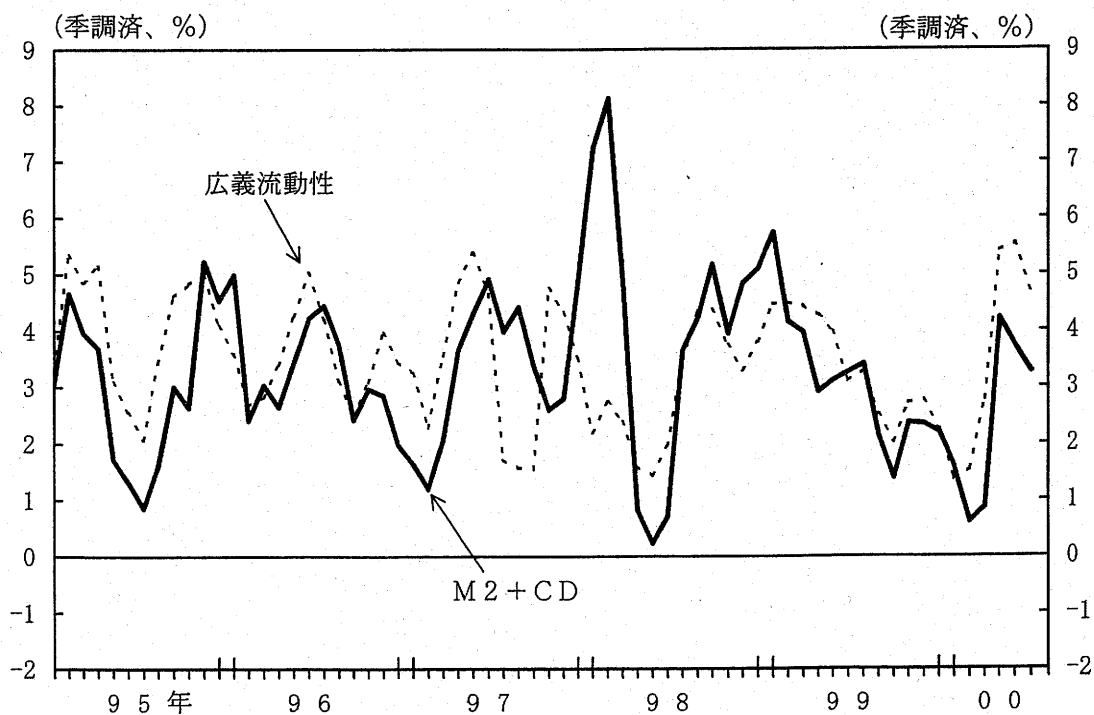
(注) マネタリーベース=流通現金(銀行券および貨幣<ともに金融機関保有分を含む>)+当座預金
なお、97年3月以前は、流通現金(銀行券および貨幣<ともに金融機関保有分を含む>)+準備預金

マネーサプライ (M2+CD、広義流動性)

(1) 前年比



(2) 3か月前比年率



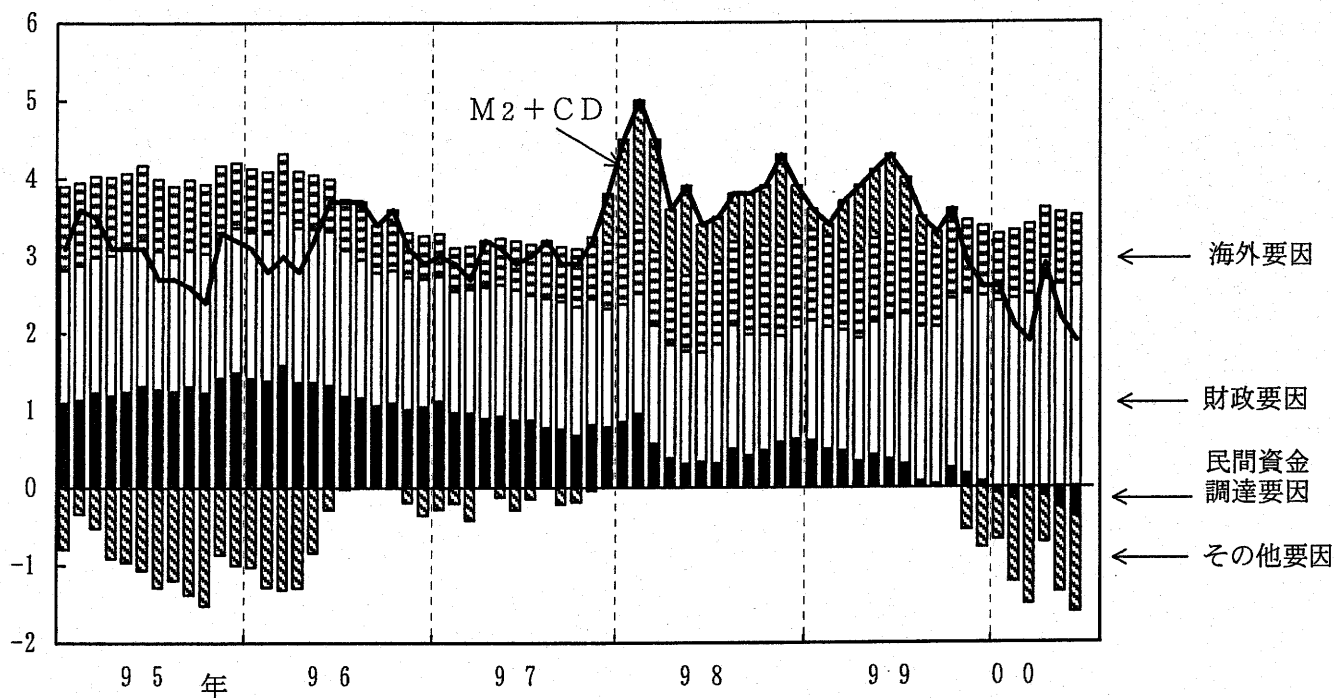
対外非公表

M2 + CD増減とバランスシート項目の対応

—— マネー保有主体（民間非金融部門・地公体）の
バランスシート・アプローチによる。

(1) M2 + CD前年比の要因分解

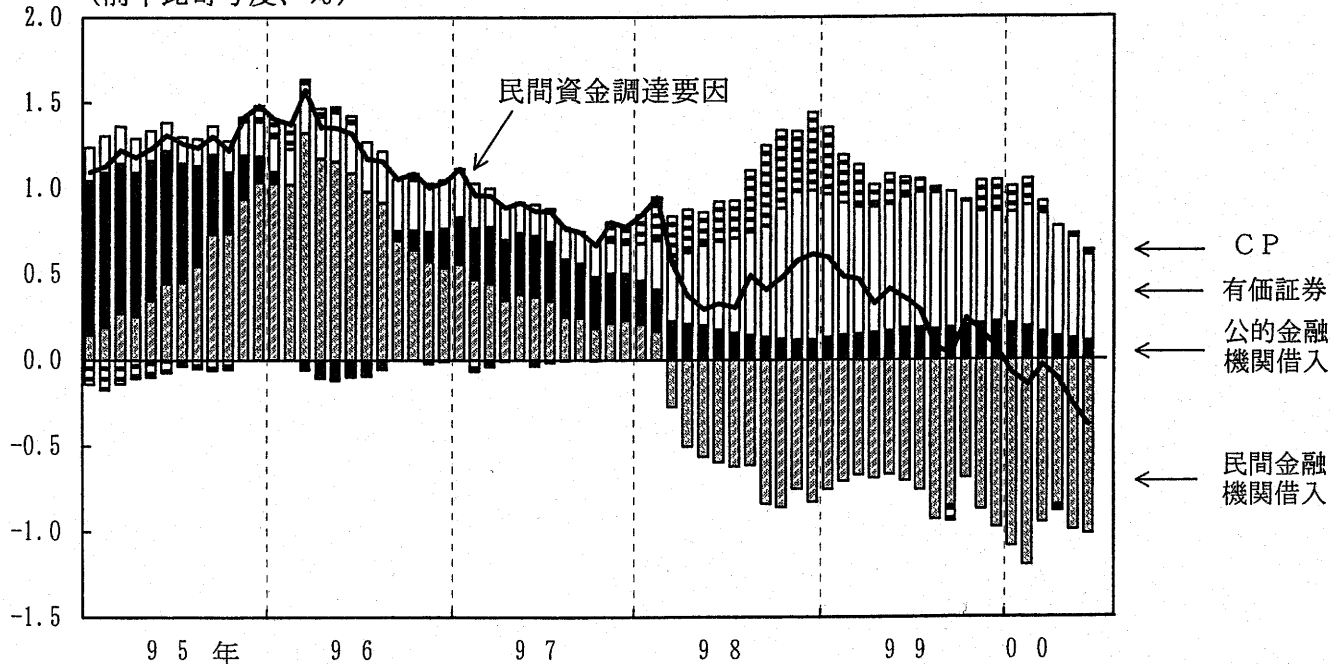
(前年比寄与度、%)



(注) 「その他」は金融資産間の資金シフト要因と残差。

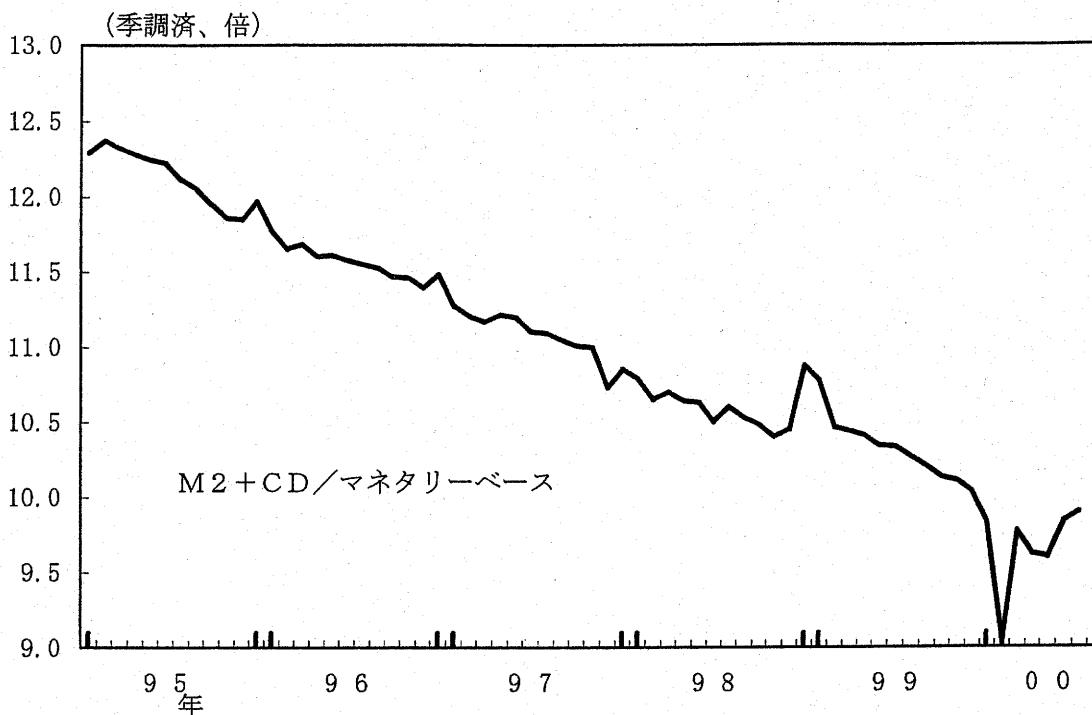
(2) 資金調達増減の寄与度分解

(前年比寄与度、%)

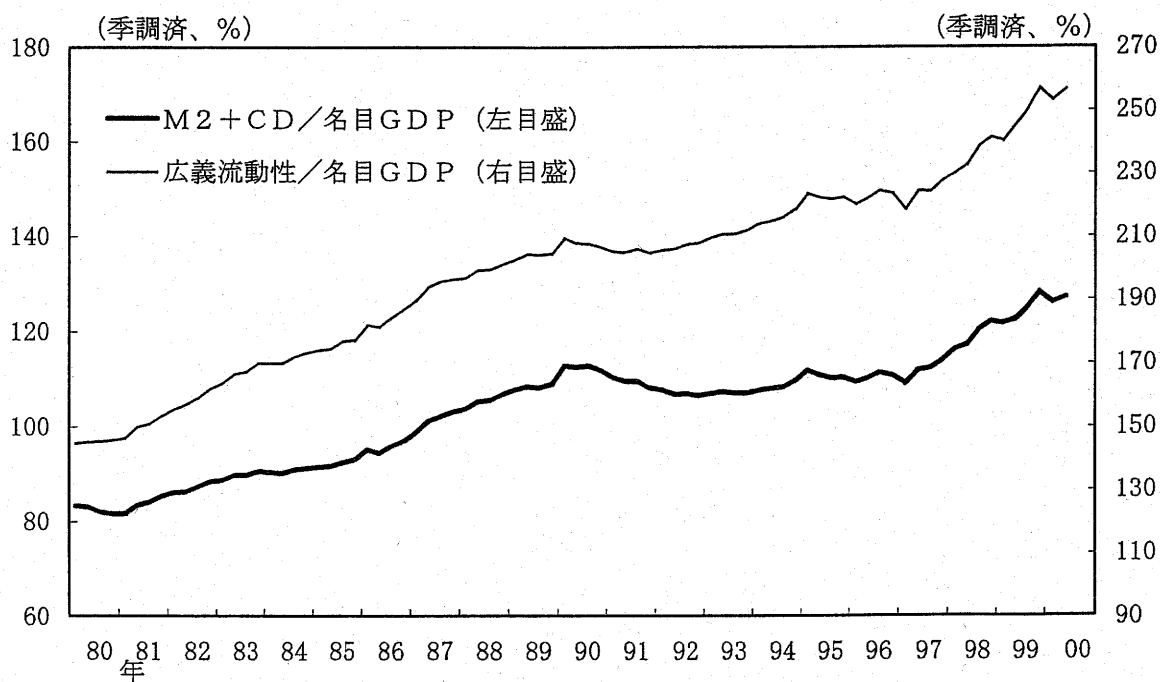


信用乗数・マーシャルのk

(1) 信用乗数 (=マネーサプライ/マネタリーベース)



(2) マーシャルのk (=マネーサプライ/名目GDP)



(注) 2000年2Qの名目GDPは2000年1Q比横這いと仮定。

金利関連指標

＜市場金利＞

	— %						
	99/6月末	9	12	00/3	00/6月末	7	8/8日
無担保コールレート (オバーナイト物)	0.03	0.05	0.05	0.04	0.03	0.02	0.02
CD発行レート (3か月物)	0.04	0.03	0.10	0.08	0.11	0.11	0.11
ユーロ円 TIBOR (3か月物)	0.14	0.28	0.20	0.14	0.23	0.22	0.21
国債流通利回り (10年新発債)	1.835	1.710	1.645	1.770	1.760	1.675	1.695

＜企業の資金調達コスト＞

CP発行レートは対外非公表

		— %						
		99/6月	9	12	00/3	00/6月	7	8/8日
短期プライムレート(末値)		1.375	1.375	1.375	1.375	1.375	1.375	1.375
長期プライムレート(末値)		1.9	2.3	2.2	2.2	2.15	2.15	2.15
貸出約定平均金利								
新規	短期	1.618	1.645	1.730	1.543	1.663		
	長期	1.949	2.002	2.020	1.889	1.885		
	総合	1.723	1.770	1.822	1.673	1.739		
ストック	短期	1.766	1.756	1.765	1.712	1.710		
	長期	2.445	2.413	2.383	2.343	2.318		
	総合	2.146	2.117	2.100	2.052	2.039		
3か月物CP発行レート (A-1格またはJ-1格以上)		0.05	0.09	0.44	0.09	0.13	0.25	
社債発行クーポン (AA格)		1.43	1.06	1.45	1.32	1.51	1.26	
スプレッド		+0.37	-0.22	+0.22	-0.05	+0.26	+0.02	

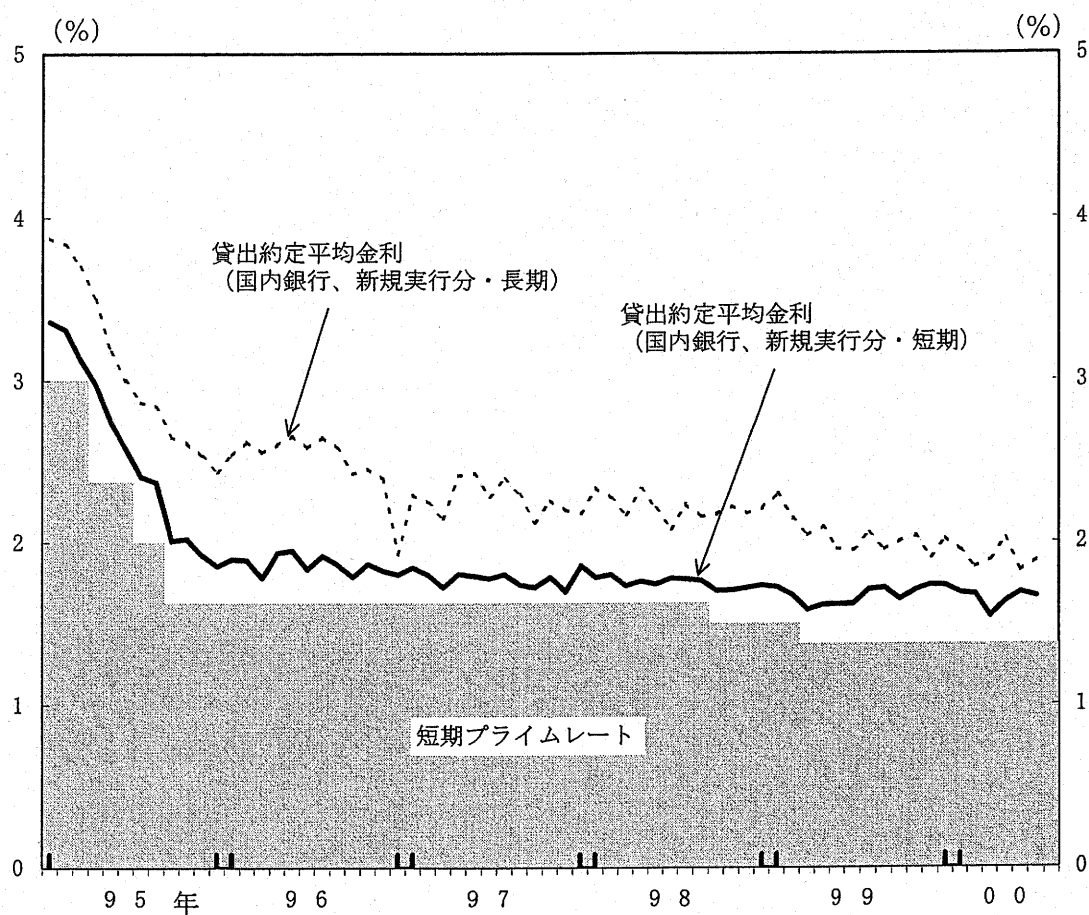
(注) 1. CP発行レートは、当該月の月中平均値 (オペ先 35社ベース)。

2. 社債発行クーポン = 5年物スワップ・レート + スプレッド。月中平均値。

＜参考＞

		99/6月末	9	12	00/3	00/6月末	7	8/8日
為替相場	円/ドル	120.87	105.66	102.08	105.29	105.40	109.52	108.63
	ユーロ/円	124.93	112.35	102.72	100.83	100.93	101.10	98.28
株式市場	日経平均株価 (円)	17,529	17,605	18,934	20,337	17,411	15,727	15,820
	TOPIX (ポイント)	1,416	1,506	1,722	1,705	1,591	1,453	1,468
	東証2部株価指数 (ポイント)	2,148	2,542	2,609	2,809	2,524	2,298	2,291
	日経店頭平均 (円)	1,488	1,954	2,279	2,267	1,787	1,549	1,599

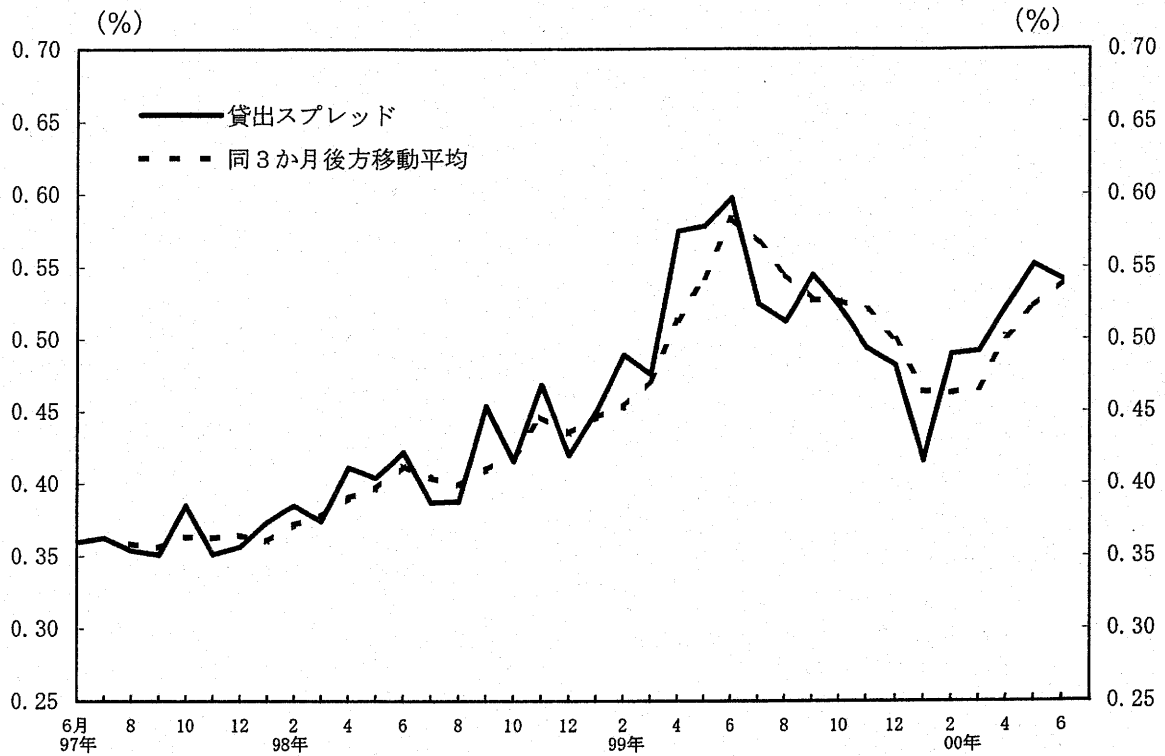
貸出金利



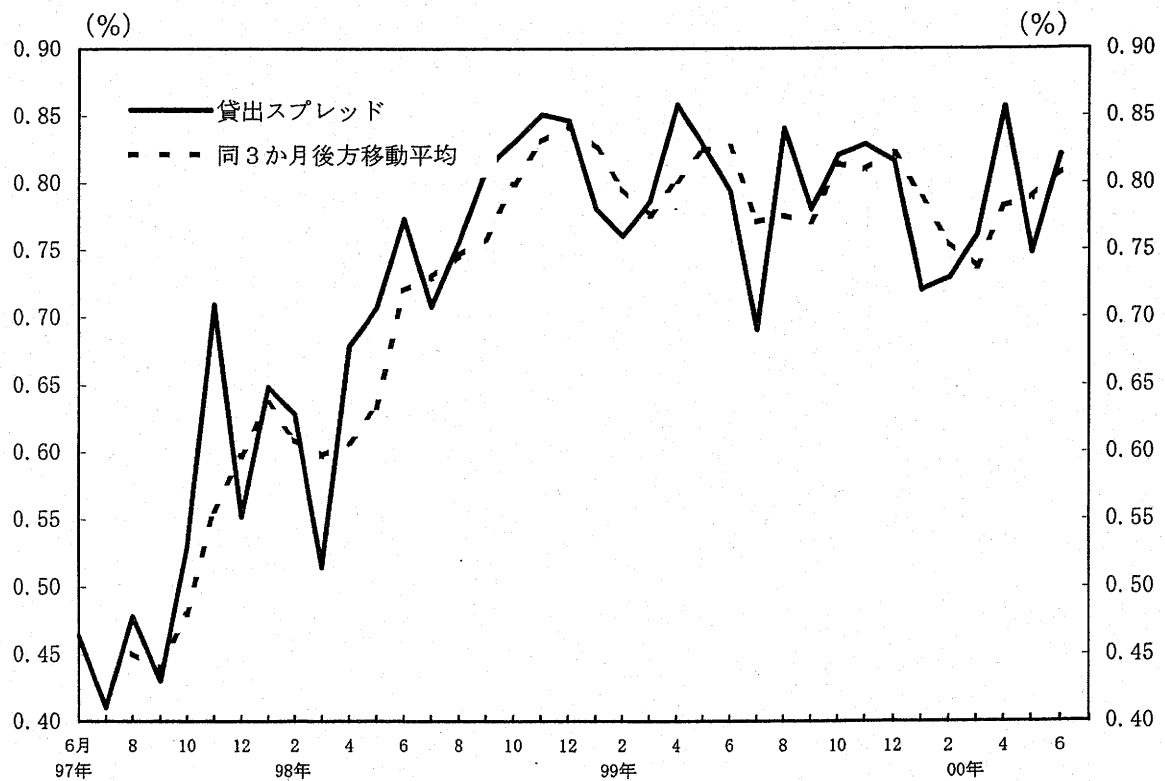
(注) 短期プライムレートは月末時点。

スプレッド貸出のスプレッド

(1) 短期



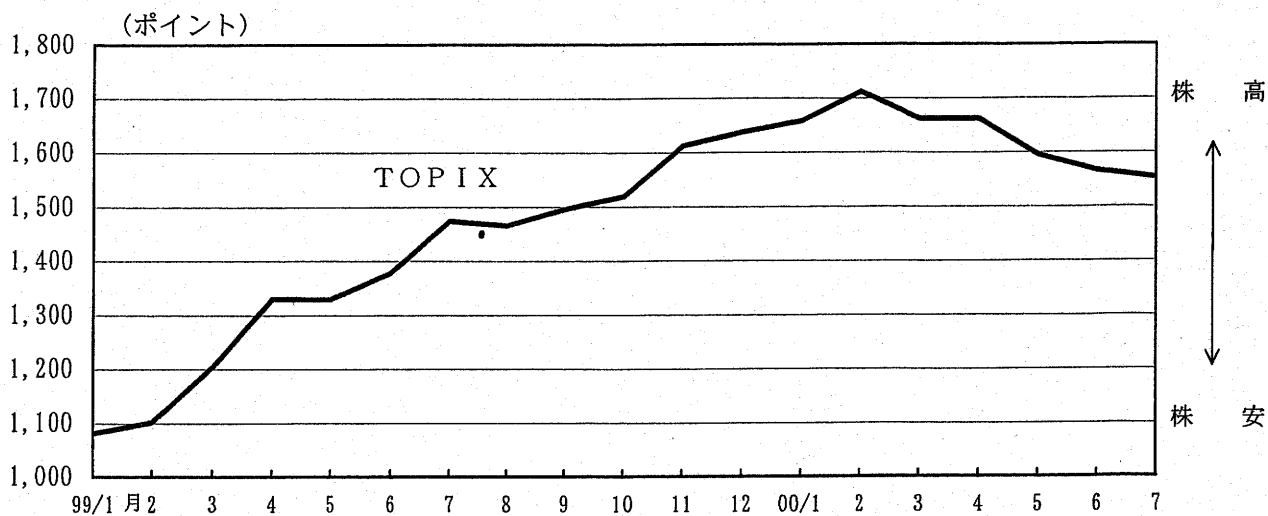
(2) 長期



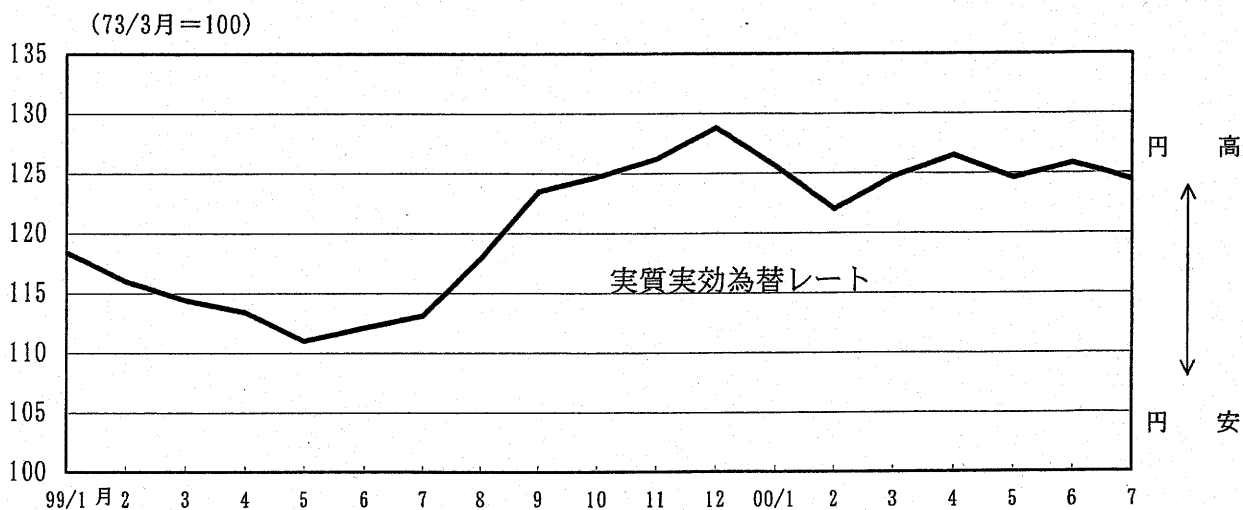
(注) 都銀主要行に対するヒアリングによる。

MCI、FCI

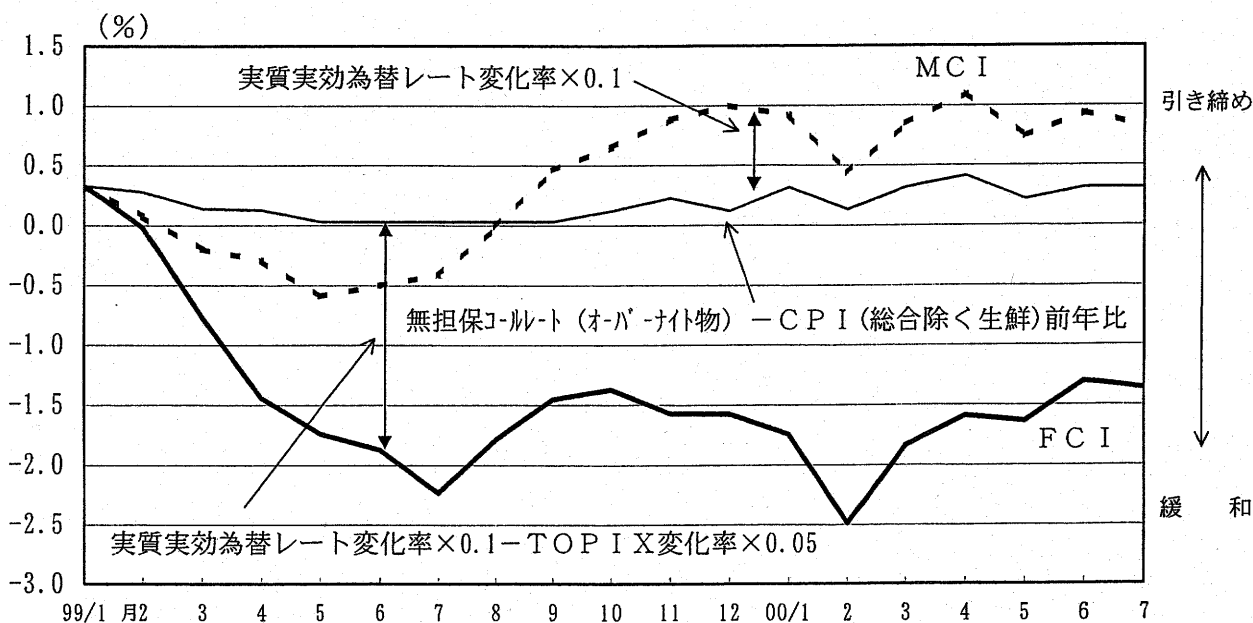
(1) 株価



(2) 為替レート



(3) MCI、FCI



(注) 1. MCI : Monetary Conditions Index、FCI : Financial Conditions Index
 2. 実質実効為替レートおよびTOPIXの変化率は、99/1月からの変化率。
 3. 7月のCPI(総合除く生鮮)前年比は、6月比横這いと置いている。

(図表 14)

企業金融関連指標

<資金繰り D. I. >

		— %ポイント					— %ポイント		
		99/4~6月	7~9	10~12	00/1~3	4~6	00/5月	6	7
全国短観 (全産業)	「楽である」 - 「苦しい」	-12	-11	-9	-8	-4			
大企業		7	8	9	11	16			
中堅企業		-12	-10	-8	-7	-4			
中小企業		-18	-17	-16	-14	-11			
中小企業金融公庫	「余裕」 - 「窮屈」	-21.5	-19.5	-19.6	-18.3	-15.6			
商工中金	「(前月比) 好転」 - 「(前月比) 悪化」	-6.9	-6.8	-5.5	-5.3	-3.5	-4.1	-4.8	-4.8
国民生活金融公庫	「(前期比) 好転」 - 「(前期比) 悪化」	-28.1	-32.9	-31.8	-34.5	-23.6			

(注) 中小企業金融公庫・商工中金の四半期データは、月次データの平均。

<貸出態度判断 D. I. >

		— %ポイント					— %ポイント		
		99/4~6月	7~9	10~12	00/1~3	4~6	00/5月	6	7
全国短観 (全産業)	「緩い」 - 「厳しい」	-10	-5	-3	0	2			
大企業		-1	6	10	13	16			
中堅企業		-11	-6	-3	1	3			
中小企業		-12	-9	-7	-5	-3			
中小企業金融公庫	「緩和」 - 「厳しい」	-1.9	4.4	7.8	13.4	16.8			
国民生活金融公庫	「(前期比) 容易」 - 「(前期比) 困難」	-17.2	-20.2	-20.3	-21.3	-17.9			

(注) 中小企業金融公庫の四半期データは、月次データの平均。

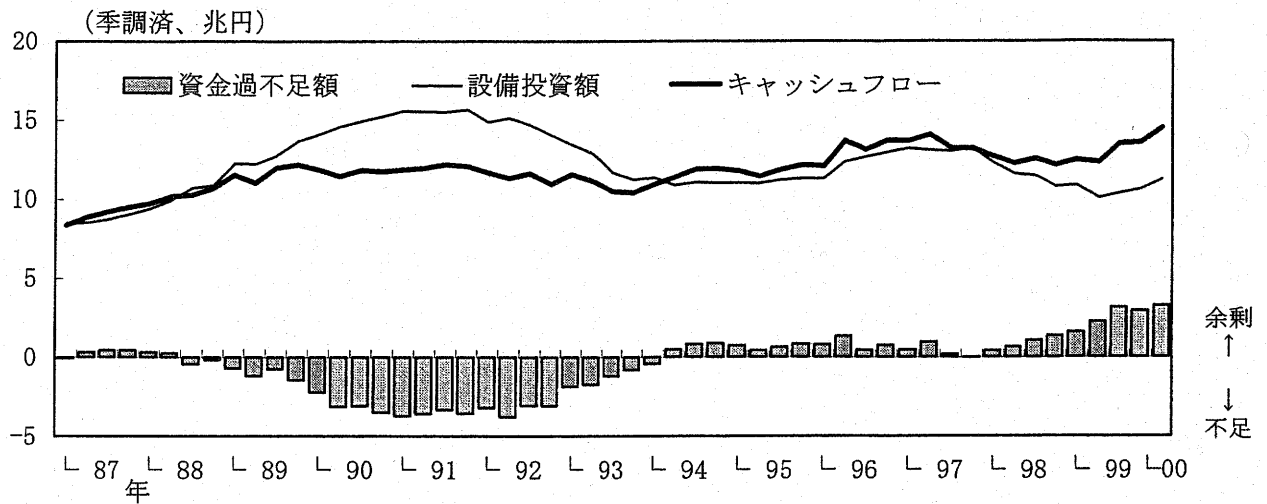
<企業の財務状況>

	— 季調済、兆円、倍						
	98/7~9月	10~12	99/1~3	4~6	7~9	10~12	2000/ 1~3
資金過不足額 (- : 不足)	1.08	1.35	1.59	2.24	3.14	2.94	3.26
借入金対売上高比率	5.15	5.16	5.21	5.16	5.18	5.12	5.10
手元流動性比率	1.48	1.53	1.56	1.49	1.52	1.52	1.49
インタレスト・カバレッジ・レシオ	2.85	2.74	2.91	2.95	3.29	3.51	3.93

- (注) 1. 資金過不足額 = キャッシュフロー - 設備投資額 (キャッシュフロー = 経常利益 / 2 + 減価償却費)
 2. 借入金対売上高比率 = 借入金 / 月平均売上高 (借入金 = 短期借入金 + 長期借入金 + 社債)
 3. 手元流動性比率 = (現預金 + 有価証券) / 月平均売上高
 4. インタレスト・カバレッジ・レシオ = (支払利息 + 経常利益) / 支払利息
 5. 資金過不足額は、除くその他サービス大企業。断層修正済。
 6. 借入金、手元流動性は、末残ベース。

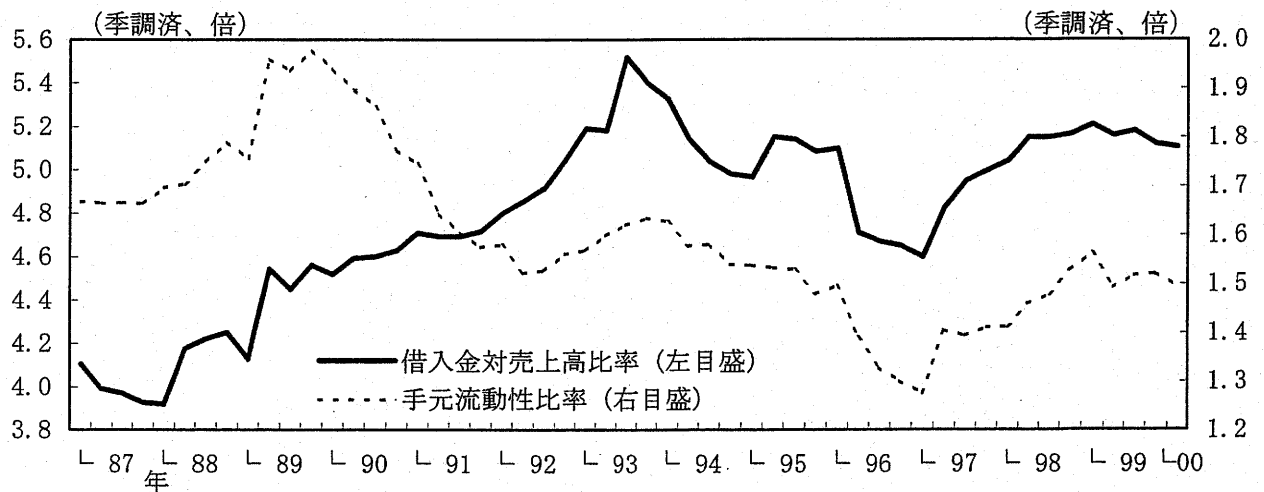
企業の財務状況

(1) 資金過不足額



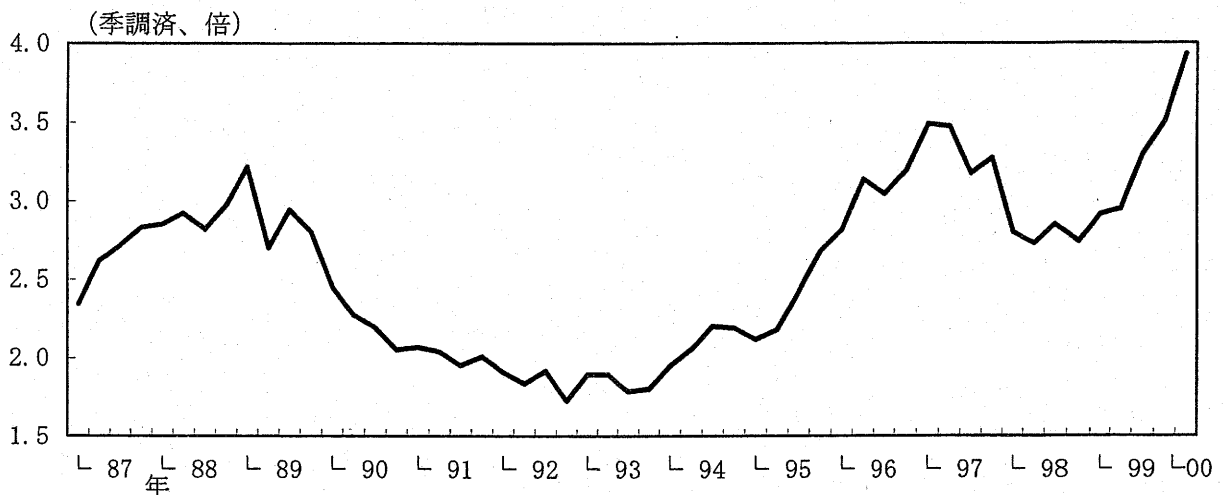
- (注) 1. 資金過不足額 = キャッシュフロー - 設備投資額 (キャッシュフロー = 経常利益 / 2 + 減価償却費)
 2. 除くその他サービス大企業。断層修正済。

(2) 借入金対売上高比率・手元流動性比率



- (注) 1. 借入金対売上高比率 = (長期借入金 + 短期借入金 + 社債) / 月平均売上高
 2. 手元流動性比率 = (現預金 + 有価証券) / 月平均売上高

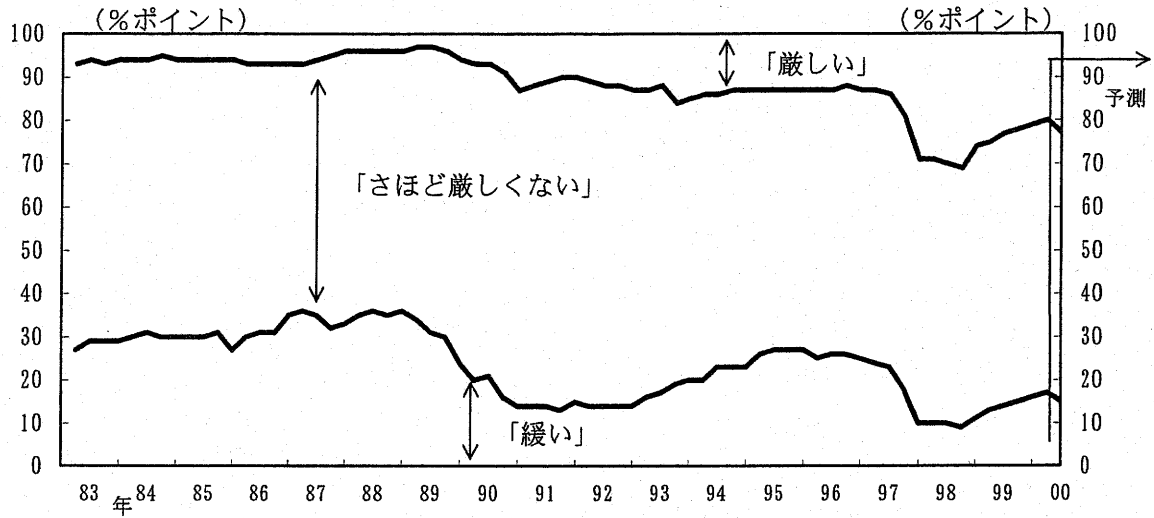
(3) インタレスト・カバレッジ・レシオ



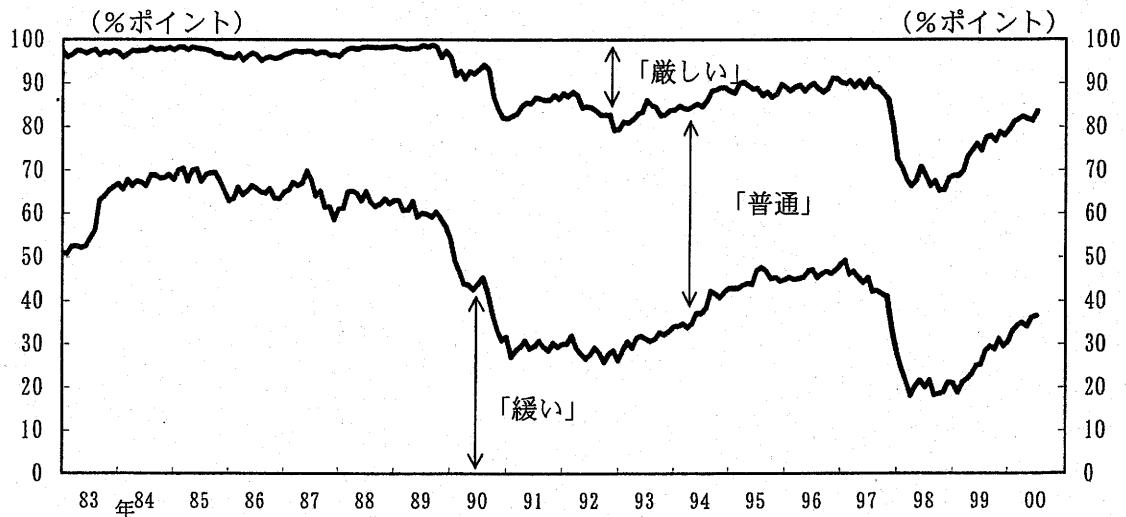
- (注) インタレスト・カバレッジ・レシオ = (支払利息 + 経常利益) / 支払利息

中小企業からみた金融機関の貸出態度

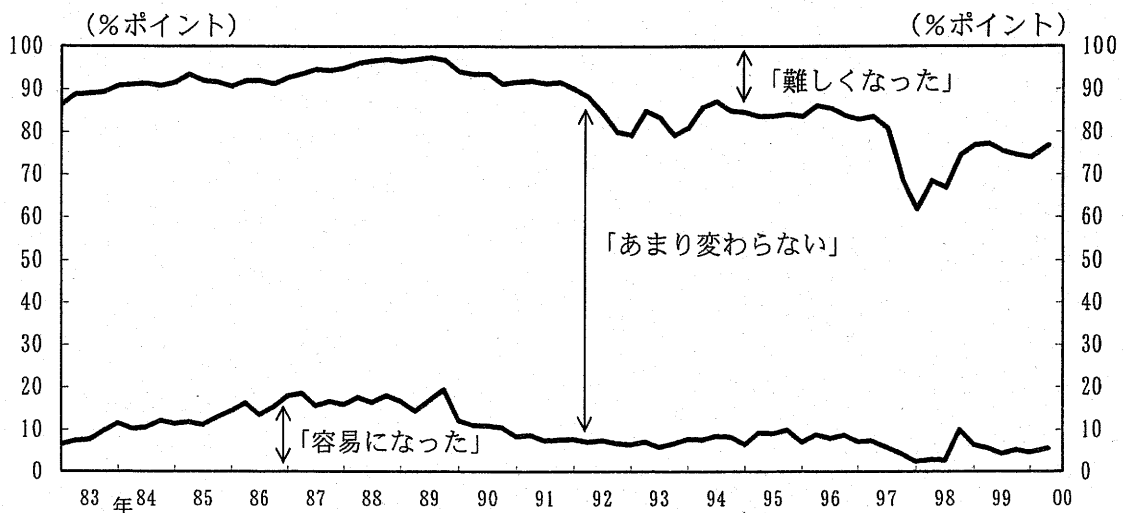
(1) 日本銀行・企業短期経済観測調査 (直近調査時点 6月)



(2) 中小公庫・中小企業景況調査 (直近調査時点 7月中旬)



(3) 国民公庫・全国小企業動向調査 (直近調査時点 6月中旬)



信用保証制度の利用状況

(1) 信用保証制度の利用状況

(単位：兆円、カッコ内は前年比%)

	99/3月	6月	9月	12月	00/3月	4月	5月	6月
保証承諾額	2.3 (26.7)	1.7 (6.8)	1.8 (17.4)	2.2 (-59.9)	2.2 (-3.8)	1.0 (-21.3)	1.2 (-0.5)	1.7 (-0.9)
保証債務残高	42.0 (42.1)	42.2 (43.1)	42.6 (42.6)	43.2 (9.2)	43.0 (2.4)	42.8 (1.4)	42.3 (0.6)	42.1 (-0.1)

(参考) 保証債務残高(2000/6月末)の業態別内訳

(単位：兆円、カッコ内は構成比%)

都 銀	地 銀	地銀Ⅱ	信 金	信 組	その他 とも計
()	()	()	()	()	()

(2) 「中小企業金融安定化特別保証制度」(98/10/1日開始)の利用状況

	単 位	2000/ 2月	3月	4月	5月	6月	7月	98/10月 以降累計
保証申込額	(億円)	6,870	9,949	3,229	4,171	5,936	—	260,557
保証承諾額	(億円)	5,328	8,794	2,765	3,343	4,814	4,211	224,382
保証承諾件数	(万件)	3.7	5.7	2.1	2.3	3.2	2.8	133.4
1件あたり 保証承諾額	(百万円)	14.5	15.4	13.3	14.3	15.1	15.2	16.8

(参考) 「中小企業金融安定化特別保証制度」(「貸し渋り対応特別保証」)

- ・対象：①貸し渋りを受けて資金調達に支障を来している中小企業
②取引金融機関の破綻等により金融取引に支障を来している中小企業
- ・保証限度額：2億5千万円(対象が②の場合は3億5千万円、組合等の場合は4億5千万円)
- ・保証期間：運転資金5年以内、設備資金7年以内
- ・信用保証料率：一般保証より0.15~0.20%程度低い保証料率を適用
- ・担保・保証人：無担保は5千万円まで、無担保無保証人は1千万円まで
- ・取扱期間：2001年3月末まで
- ・保証枠：承諾額累計で30兆円

企業倒産関連指標

＜倒産件数・負債総額＞

— 件/月、億円、()内は前年比、%

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/4月	5	6
倒産件数	1,395 (-3.1)	1,444 (+4.5)	1,513 (+44.1)	1,540 (+21.3)	1,562 (+28.8)	1,521 (+14.1)	1,538 (+21.9)
＜季調値＞	—	1,396	1,575	1,494	1,508	1,442	1,531
特別保証制度関連倒産	256	256	274	321	295	353	316
負債総額	9,407 (-25.4)	5,251 (-35.3)	7,905 (-49.6)	14,954 (+2.8)	9,679 (-4.7)	16,522 (+4.0)	18,660 (+6.0)
1件あたり負債額	6.7	3.6	5.2	9.7	6.2	10.9	12.1

＜資本金別内訳＞

— 件/月、[]内は構成比、%

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/4月	5	6
1億円以上	17 [1.2]	15 [1.1]	17 [1.1]	21 [1.4]	25 [1.6]	24 [1.6]	14 [0.9]
1千万円～1億円未満	682 [48.9]	693 [48.0]	732 [48.4]	757 [49.2]	753 [48.2]	769 [50.6]	750 [48.8]
1千万円未満	415 [29.7]	440 [30.4]	455 [30.1]	451 [29.3]	473 [30.3]	416 [27.4]	464 [30.2]
個人企業	281 [20.2]	296 [20.5]	309 [20.4]	311 [20.2]	311 [19.9]	312 [20.5]	310 [20.2]

＜業種別内訳＞

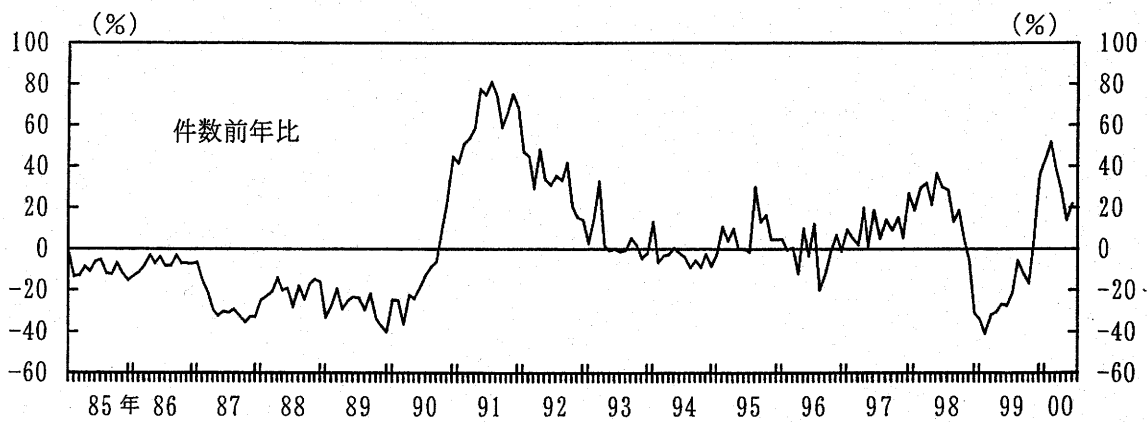
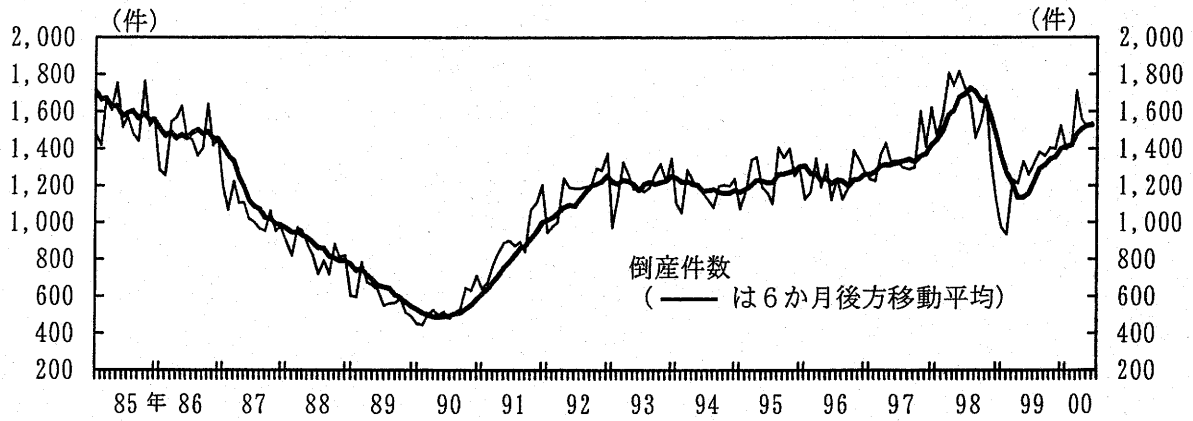
— 件/月、[]内は構成比、%

	99年度	99/ 10~12月	00/1~3	4~6	00/4月	5	6
建設業	434 [31.1]	451 [31.2]	481 [31.8]	516 [33.5]	493 [31.6]	515 [33.9]	539 [35.0]
製造業	266 [19.0]	269 [18.6]	301 [19.9]	284 [18.5]	288 [18.4]	294 [19.3]	271 [17.6]
卸売・小売業	405 [29.0]	423 [29.3]	441 [29.1]	426 [27.7]	467 [29.9]	411 [27.0]	400 [26.0]
金融・保険・不動産業	63 [4.5]	56 [3.9]	54 [3.5]	59 [3.8]	49 [3.1]	55 [3.6]	72 [4.7]
運輸・通信業	51 [3.7]	60 [4.1]	53 [3.5]	56 [3.7]	56 [3.6]	63 [4.1]	50 [3.3]
サービス業	165 [11.8]	176 [12.2]	173 [11.4]	186 [12.1]	188 [12.0]	171 [11.2]	198 [12.9]

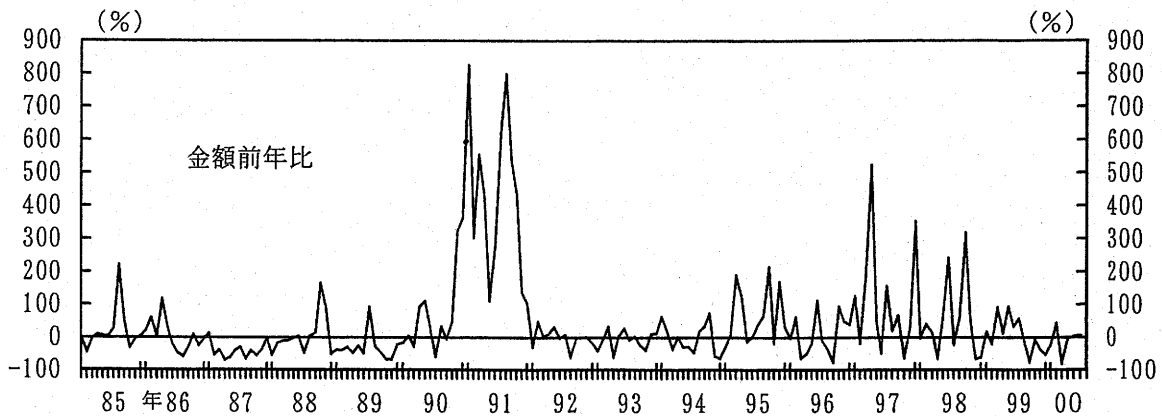
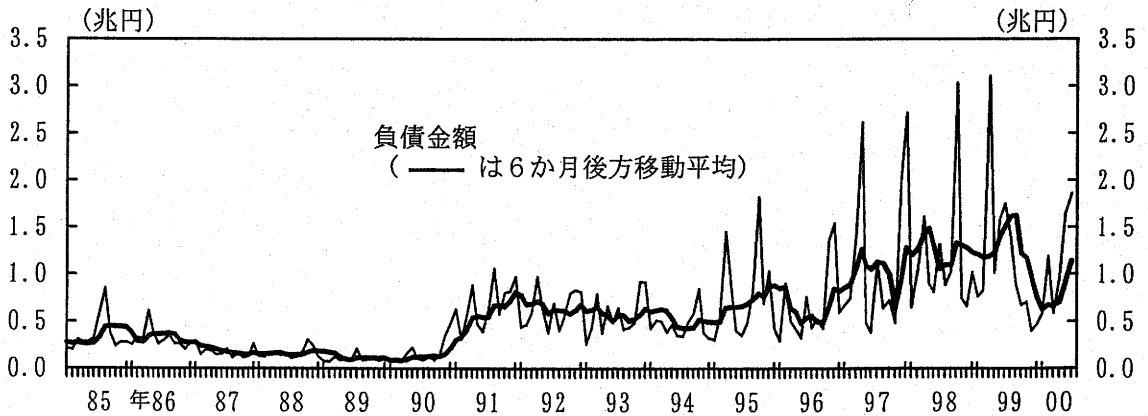
(注) 東京商工リサーチ調べ。

企業倒産

(1) 倒産件数 (東京商工リサーチ調べ)



(2) 倒産企業負債総額 (東京商工リサーチ調べ)



2000. 8. 8
企 画 室

当面の金融政策運営上の検討ポイント

1. 金融経済情勢に関する検討ポイント

- (1) 景気・物価の現状をどう判断するか。
- (2) 金融市況面から得られる情報をどのように解釈するか。
- (3) 量的金融指標の動きをどうみるか。
- (4) 景気の先行きについて、民間需要の自律的回復の道筋はみえてきたか。
- (5) 物価の先行きについては、「デフレ懸念の払拭が展望できるような情勢」に至ったか。
- (6) いわゆる「そごう問題」が市場心理などに与える影響をどうみるか。

2. 当面の金融政策運営方針

選択肢A

無担保コールレート（オーバーナイト物）の誘導目標を引き上げ、平均的にみて \quad %前後で推移するよう促す。（あわせて、公定歩合を \quad %引き上げ、 \quad %とする。）

（考え方）

わが国の景気は、緩やかに回復している。

輸出や公共投資の増加を反映して、生産が増加傾向を辿っている。企業収益は大幅に増加しており、業況感の改善も明確化している。こうしたもとの、設備投資は増加を続けている。また、家計部門では、個人消費がなお回復感に乏しい状態にあるが、その前提となる雇用・所得環境は、下げ止まりから改善への道筋が展望できるようになってきた。

このように、民間部門における生産・所得・支出を巡る前向きな循環メカニズムは着実に動き始めており、日本経済は、民間需要主導の自律的回復局面に入ったものと判断される。

物価面では、これまでの円高や技術革新・流通革命の進行などが物価を押し下げる方向で働いているものの、上記のような経済情勢を踏まえると、需要の弱さに由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退したとみられる。

以上を踏まえると、わが国経済は「デフレ懸念の払拭が展望できるような情勢」に至ったものと判断される。

また、いわゆる「そごう問題」が市場心理などに与える影響については、これまでのところ、金融システムに対する懸念の広がりや市場のセンチメントの累積的悪化といった事態は、みられない。

したがって、この際、ゼロ金利政策を解除することが適当である。

選択肢 B

現状の金融政策スタンスを維持する。

すなわち、無担保コールレート（オーバーナイト物）を、できるだけ低めに推移するよう促す。

（考え方）

わが国の景気は、緩やかに回復している。

輸出や公共投資の増加を反映して、生産が増加傾向を辿っている。企業収益は大幅に増加しており、業況感の改善も明確化している。こうしたもとの、設備投資は増加を続けている。また、個人消費はなお回復感に乏しい状態にあるが、その前提となる雇用者所得の減少傾向には歯止めがかかっている。

しかし、企業では、既存設備の過剰感がなお強く、借入金返済等による財務体質改善が引き続き意識されている。また、人件費抑制スタンスにも大きな変化がみられない。このため、雇用・所得環境を含めた情勢判断の最終的な詰めに誤りなきを期し、民間需要の自律的回復に向けた道筋を十分に確かめるには、なおもう少し時間が必要である。

物価は、概ね横ばいで推移するものとみられる。上記のような経済情勢を踏まえると、需要の弱さに由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退しているが、引き続き留意していく必要がある。

また、いわゆる「そごう問題」が市場心理などに与える影響については、これまでのところ、金融システムに対する懸念の広がりや市場のセンチメントの累積的悪化といった事態はみられていないが、最近の軟調な株式市場動向も含め、もう暫くの間、留意していく必要がある。

以上を踏まえると、ゼロ金利政策を継続することが適当である。

選択肢 C

金融市場調節方針をさらに一段と緩和する。

その具体的な方法は別途検討する。

(考え方)

わが国の景気は、現状、緩やかに回復している。

しかし、設備投資回復の持続性と広がり、はまだ不十分である。また、個人消費は、雇用・所得環境の目立った改善がみられないため回復感に乏しい状態にあり、その立ち直りには、なお時間を要する。

物価は概ね横ばいで推移するものとみられるが、需要の弱さに由来する潜在的な物価低下圧力は、まだ根強いものとみられる。

また、いわゆる「そごう問題」をきっかけに、株価が下落するなど、金融資本市場は不安定化している。

こうした情勢に鑑みると、日本経済は、米国金融・資本市場の変調や財政再建路線への転換といったマイナスのショックに対して、十分な抵抗力をもつには至っていない。

従って、景気の自律的回復を明確なものとし、デフレ懸念を早期に払拭するためには、現在のゼロ金利政策では不十分である。さらに思い切った金融緩和に踏み込んでいく必要がある。

以 上

<特定情報：有（種類：審議・検討）>

<配布先：金融政策決定会合参加者>

[中原委員案]

金融市場調節方針の決定に関する件

(案 件)

次回金融政策決定会合までの金融市場調節方針を下記のとおりとすること。

対外公表文は別途決定する。

記

中期的な物価安定目標として2002年10～12月期平均のCPI（除く生鮮）の前年同期比が0.5～2.0%となることを企図して、次回決定会合までの当座預金残高を平残ベースで7兆円程度にまで引上げ、その後も継続的に増額していくことにより、2001年1～3月期のマネタリーベース（平残）が前年同期比で15%程度に上昇するよう量的緩和（マネタリーベースの拡大）を図る。

なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記マネタリーベースの目標等にかかわらず、それに対応して十分な資金供給を行う。

以 上

一覽後廃棄

要 注 意

<特定情報：有（種類：審議・検討）>

<配 布 先：金融政策決定会合参加者>

[議 長 案]

金 融 市 場 調 節 方 針 の 決 定 に 関 す る 件

(案 件)

次回金融政策決定会合までの金融市場調節方針を下記のとおりとすること。対外公表文は別途決定する。

記

無担保コールレート(オーバーナイト物)を、平均的にみて0.25%前後で推移するよう促す。

以 上

2000.8.11

(速水)

提 案 理 由

1. 日本経済は、「ゼロ金利政策」解除の要件である「デフレ懸念の払拭が展望できるような情勢」に至ったものと考えられる。
2. 「そごう問題」を契機に、金融システムに対する不安が拡大したり、市場心理が著しく悪化するような事態はみられていない。
3. 「ゼロ金利政策」は、昨年2月に景気の悪化に歯止めをかけるためのぎりぎりの措置として導入した措置である。日本経済がここまで改善している中で、このような極端な緩和政策を継続すると、いずれ経済・物価情勢の大きな変動をもたらしたり、より急激な金利調整が必要となるリスクが増大する。
4. 以上を踏まえると、「ゼロ金利政策」を解除することが適当である。
5. 「ゼロ金利政策」の解除は、経済の改善に応じて金融緩和の程度を微調整する措置である。
6. 「ゼロ金利政策」解除後もコールレートはきわめて低い水準にあり、金融が大幅に緩和され、景気回復を支援する役割を果たす状況は維持される。
7. また、今回の措置をひとつの契機として、国民が、日本経済は改善しているという明るい認識を持つことや、市場のダイナミズムが一段と発揮されることを期待する。

以 上

一覽後廃棄

要 注 意

<特定情報：有（種類：審議・検討）>

<配布先：金融政策決定会合参加者>

〔大蔵省村田総括政務次官、
経済企画庁河出調整局長提出分〕

日本銀行法第19条第2項の規定による議決の延期の求めに関する件

(案 件)

日本銀行法第19条第2項の規定に基づき、議長提出の「金融市場調節方針の決定に関する件」（平成12年8月11日付政委第117号）に係る政策委員会の議決を次回金融政策決定会合まで延期すること。

以 上

<特定情報：有（種類：審議・検討）>

<配布先：金融政策決定会合参加者>

平成12年8月11日
日 本 銀 行

金融市場調節方針の変更について

(1) 日本銀行は、本日、政策委員会・金融政策決定会合において、金融市場調節方針を以下のとおりとすることを決定した（賛成多数）。

無担保コールレート（オーバーナイト物）を、平均的にみて0.25%前後で推移するよう促す。

(2) 日本銀行は、昨年2月、先行きデフレ圧力が高まる可能性に対処し、景気の悪化に歯止めをかけるためのぎりぎりの措置として、内外に例のない「ゼロ金利政策」を導入した。その後、デフレ懸念の払拭が展望できるような情勢となるまで「ゼロ金利政策」を継続するとの方針のもとで、この姿勢を維持してきた。

(3) その後1年半が経過し、日本経済は、マクロ経済政策からの支援に加え、世界景気の回復、金融システム不安の後退、情報通信分野での技術革新の進展などを背景に、大きく改善した。現在では、景気は回復傾向が明確になってきており、今後も設備投資を中心に緩やかな回復が続く可能性が高い。そうした情勢のもとで、需要の弱さに由来する物価低下圧力は大きく後退した。

このため、日本経済は、かねてより「ゼロ金利政策」解除の条件としてきた「デフレ懸念の払拭が展望できるような情勢」に至ったものと考えられる。

(4) この間、7月央以降は、いわゆる「そごう問題」の影響にも注目して

きたが、これまでのところ、この問題を契機として、金融システムに対する懸念が広まったり、市場心理が大きく悪化するといった事態はみられていない。

- (5) 今回の措置は、経済の改善に応じて金融緩和の程度を微調整する措置であり、長い目でみて経済の持続的な発展に資するという観点から行うものである。

今回の措置実施後も、コールレートは0.25%というきわめて低い水準にあり、金融が大幅に緩和された状態は維持される。日本銀行としては、物価の安定を確保するもとの、こうした緩和スタンスを継続することにより、金融面から景気回復を支援していく方針である。

以 上

要注意

<特定情報：有（種類：マーケット関連情報）>
<配付先：金融政策決定会合関係者限り>

公表時間
8月15日(火) 8時50分

(案)

2000年8月15日
日 本 銀 行

金融経済月報

(2000年8月)

本稿は、8月11日に開催された政策委員会・金融政策決定会合の時点で利用可能であった情報をもとに記述されている。

【基本的見解¹】

わが国の景気は、企業収益が改善する中で、設備投資の増加が続くなど、緩やかに回復している。

最終需要面をみると、外生需要の面では、純輸出（実質輸出－実質輸入）が堅調な海外景気を背景に緩やかな増加傾向を辿っているほか、公共投資は補正予算の執行に伴い高水準で推移している。国内民間需要の面では、設備投資が増加を続けている。個人消費は、一部指標にやや明るさが窺われるものの、雇用・所得環境に目立った改善がみられない中で、全体としては回復感に乏しい状態が続いている。住宅投資は概ね横這いで推移している。

このような最終需要の動向のもとで、鉱工業生産は増加している。企業の収益や業況感も改善を続けており、成長性の高い分野を中心に、設備投資増額など積極的な行動に転じる企業が増えている。家計の所得環境は引き続き厳しい状況にあるが、企業活動の回復に伴って所定内・所定外給与や新規求人が増加するなどの動きが続き、雇用者所得の減少傾向には歯止めが掛かっている。

今後の経済情勢については、公共投資は遠からず減少に転じるとみられるものの、純輸出は海外景気の拡大を背景に緩やかな増加が続くと予想される。企業部門では、既存設備の過剰感がなお強く、借入金返済等による財務体質改善が引き続き意識されているが、企業収益の改善が続く中で、情報関連等の成長分野への設備投資は今後も増加する可能性が高い。また、企業収益の改善は家計所得の増加を通じて、個人消費にも好影響を及ぼしていくものと考えられる。

¹ 本「基本的見解」は、8月11日に開催された政策委員会・金融政策決定会合において、金融政策判断の基礎となる経済及び金融の情勢に関する基本的見解として決定されたものである。

もっとも、企業の雇用過剰感がなお強く人件費抑制スタンスに大きな変化がみられないだけに、家計所得の改善テンポは当面緩慢なものとなろう。以上を全体としてみれば、景気は、海外経済等の外部環境に大きな変化がなければ、今後も設備投資を中心に緩やかな回復が続く可能性が高いとみられる。なお、日本銀行による金融緩和措置などによる良好な金融環境も、引き続き下支え効果を発揮していくものと期待される。

物価面をみると、輸入物価は、4月以降の原油等国際商品市況の上昇等を反映して、上昇している。国内卸売物価は、原油価格上昇を受け石油製品は上昇したものの、電気機器等の下落が続いていることから、ほぼ横這いの動きとなっている。消費者物価は、民間サービス価格がやや弱含んでいるほか、これまでの円高から輸入製品価格が低下しているため、幾分弱含みで推移している。企業向けサービス価格は、小幅の下落が続いている。

物価の先行きについてみると、緩やかな景気回復の持続が展望されるもとの、需要の弱さに由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退している。また、原油価格上昇分の転嫁が、物価に対し一時的に上昇方向に作用するとみられる。他方、技術進歩を背景とする機械類の趨勢的な下落に加え、これまでの円高や流通合理化に伴う消費財価格の低下が下落方向に作用することから、総じてみれば物価は横這いしないしやや弱含みで推移するものと考えられる。

金融面をみると、短期金融市場では、オーバーナイト物金利は、ゼロ%に近い水準で推移しており、オーバーナイト資金の確保に対する懸念は払拭された状況が続いている。この間、コール市場残高は、若干減少している。

ターム物金利は、7月中旬以降、ゼロ金利政策の解除観測が後退したことを受けて低下している。ジャパン・プレミアムは、ほぼ解消された状態が続いて

いる。

長期国債流通利回りは、7月末にかけて若干低下し、最近では1.6%台後半で推移している。この間、国債と民間債（金融債、社債）の流通利回りスプレッドは、総じてみれば、ほぼ横這い圏内で推移している。

株価は、7月中旬以降、大手小売業者の民事再生法適用申請や米国株価の軟調等を受けて下落している。

円の対米ドル相場は、7月末にかけて緩やかな円安傾向となり、最近では概ね108～109円台で推移している。

金融の量的側面をみると、民間銀行は、基本的に慎重な融資姿勢を維持している。ただ、民間銀行自身を巡る資金繰り面や自己資本面からの制約は緩和されており、大手行などでは、融資先の信用力などを見きわめつつ、融資を回復させようとする姿勢を続けている。

しかし、資金需要面では、収益回復に伴うキャッシュ・フローの増加などを背景に企業の外部資金調達ニーズは乏しく、实体经济活動の改善が資金需要に結びつきにくい状況が続いている。また、企業はバランスシート調整の一環として、借入金を圧縮していくスタンスを維持している。これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

こうした中で、民間銀行貸出は、基調としては弱めの動きが続いている。社債やCPの発行も、落ち着いた動きとなっている。

6月のマネーサプライ（ $M_2 + CD$ ）の伸び率は、前月に比べ低下した。

以上のような環境のもとで、企業からみた金融機関の貸出姿勢は厳しさが後退しており、企業金融には緩和感が広がりつつある。

【背景説明】

1. 実体経済

実体経済の動向を最終需要面からみると、公共投資は高水準で推移している（図表2）。発注の動きを示す公共工事請負金額は、3月に補正予算の執行が集中した反動から、4～6月は前期比-25.3%と大きく減少したが、工事進捗ベースでは、これまでの発注を反映して、高水準で推移しているとみられる。先行きについては、公共投資は遠からず減少に転じると見込まれる。

実質輸出は（図表3～5）、情報関連財や米国向け自動車を中心に引き続き増加傾向を辿っている。実質輸入も、情報関連財や消費財等を中心に増加している。

以上のような輸出入の動きを反映して、実質貿易収支²でみた純輸出（実質輸出－実質輸入）は緩やかな増加傾向にある。

今後の輸出入を取り巻く環境をみると、円の実質実効為替レートは、このところ概ね横這いの動きが続いている（図表6(1)）。海外経済は、米国が堅調を維持し、欧州諸国やNIEs、ASEAN諸国でも回復の動きが明確化しているなど、高めの成長を維持している（図表6(2)）。こうした状況を背景に、純輸出は当面緩やかな増加傾向を辿る可能性が高い。しかし、依然としてインフレ懸念が残る米国経済の動向を含めて、海外経済の先行きについては引き続き注意深くみていく必要がある。

設備投資は増加を続けている。各種設備投資関連指標をみると、機械投資と

² 図表3(2)に記載されている実質貿易収支は、厳密には純輸出とは異なるが（実質貿易収支は、所有権移転ベースではなく通関ベースであることや、サービス収支を含まないなどの点で、純輸出と相違）、その推移は純輸出に概ね等しい。

ほぼ同時に動くと思われる資本財（除く輸送機械）の出荷は、「コンピュータ—2000年問題」に伴う買い控え後の反動増要因から1～3月に前期比+7.5%と大幅に増加した後、4～6月はその剥落から1～3月対比で-1.9%の減少となった。先行指標の動きをみると、機械受注（船舶・電力を除く民需）は、1～3月に前期比+4.9%と増加した後、4～6月も、1～3月対比で+3.1%と増加を続けている（図表7(1)）。一方、非居住用建築着工床面積は、1～3月に、非製造業で大型の再開発案件がみられたこともあり、前期比+14.4%と大幅な増加となった後、4～6月は、1～3月対比で-1.9%と若干減少している（図表7(2)）。先行きについてみると、企業部門では既存設備の過剰感がなお強く、借入金返済等による財務体質改善が引き続き意識されているが、企業収益の改善が続く中で、情報関連等の成長分野への設備投資は今後も増加する可能性が高い。

個人消費の動向をみると、一部指標にやや明るさが窺われるものの、全体としては依然回復感に乏しい状態が続いている。各種売上指標をみると（図表8）、家電販売がパソコン、エアコンを中心に高水準を維持しているほか、旅行取扱高も堅調に推移している。乗用車販売は概ね横這いの動きとなっている。一方、百貨店売上高、チェーンストア売上高はともに低迷を続けている。先行きの個人消費は、消費者心理が比較的落ち着いた動きを辿る中で（図表9）、今後、雇用・所得環境の改善とともに増加していくとみられる。ただし、そのテンポは当面緩慢なものとなろう。

住宅投資をみると（図表10）、新設住宅着工戸数は、住宅金融公庫等の公的資金を利用した持家着工が減少する一方、それ以外の資金による持家着工が増加していることから、概ね横這いで推移している。先行きについても、住宅金

融公庫への借入れ申し込み状況³等からみて、住宅投資は概ね横這いの動きを続けるとみられる。

以上のような最終需要動向に加え、在庫調整が完了したとみられるもとで(図表 11)⁴、鉱工業生産は増加基調を続けており(図表 12)、先行きについても当面堅調に推移すると予想される⁵。

雇用・所得環境をみると、全体としては依然厳しい状況が続いているが、景気が緩やかに回復する中で、雇用者所得の減少傾向に歯止めが掛かっている(図表 13(1))。労働需給をみると、有効求人倍率が緩やかに上昇しているほか、完全失業率も改善傾向にある(図表 14)。雇用者所得の面では(図表 13(2))、常用労働者数(毎月勤労統計ベース、事業所規模5人以上)が引き続き前年をやや下回っている。しかし、1人当たり名目賃金は、所定内・所定外給与が緩やかに増加しているほか、夏季賞与も中小企業を中心に前年水準を若干上回る出足となったことから、前年比プラスで推移している。先行きについてみると、雇用者所得は、今後、生産活動にほぼ見合うかたちで増加していくと予想される。ただし、企業の人件費抑制スタンスに大きな変化がみられない中で、その増加テンポはごく緩やかなものにとどまるとみられる。

³ 住宅金融公庫への 2000 年度第 1 回借入れ申し込み(個人住宅建設)は 6.5 万戸と、ほぼ前年並みの水準となった。

⁴ 今回の在庫循環は、情報関連財とそれ以外の財で、局面が大きく異なっている。すなわち、情報関連以外の多くの先では在庫抑制姿勢を堅持しているが、需要が旺盛な情報関連の生産財では、出荷の増加に合わせて、ある程度在庫水準を引き上げる動きがみられる。

⁵ 鉱工業生産は、7、8月が予測指数通りとなり、9月が8月と同水準であれば、7～9月は前期比+2.9%と増加する見込みである。

2. 物価

物価情勢をみると、輸入物価（円ベース）は（図表 16）、4 月以降の原油等国際商品市況の上昇等を反映して、3 か月前と比べて上昇している。

国内卸売物価（図表 17）の前年比は、原油価格上昇を受けた石油・化学製品の上昇等から、若干のプラスで推移している。最近の動きを 3 か月前比（夏季電力料金調整後⁶）でみると、石油製品は上昇したものの、電気機器等が下落を続けていることから、ほぼ横這いの動きとなっている（3 か月前比、5 月 0.0% → 6 月 0.0% → 7 月 -0.1%）。

一方、企業向けサービス価格（国内需給要因）⁷は（図表 18）、リース・レンタルや通信・放送等の低下から、前年比、3 か月前比ともに、下落が続いている（3 か月前比、4 月 -0.3% → 5 月 -0.5% → 6 月 -0.4%）。

消費者物価（除く生鮮食品）は（図表 19）、前年との対比では、これまでの円高の影響を背景に輸入製品価格の低下が進んでいること等から、弱含んでいる⁸。これを 3 か月前比でみると、これまでの原油価格上昇を受け石油製品

⁶ 電力使用量が膨らむ 7～9 月期については、産業用・業務用の電力料金が通常の時期に比べ高めに設定されている。ここでは、国内卸売物価の基調的な動きをみるために、こうした季節的に大きな変動が生じる要因を取り除いたベースに調整している。

⁷ 企業向けサービス価格（国内需給要因）とは、月々の価格の動向が主に国内民間需要の動向を反映しているとみられる品目のみから構成される指数を指し、具体的には、企業向けサービス価格指数総平均から、①規制料金、②海外要因、③単月の振れが大きく、短期的な需給動向を反映しているとは必ずしも言い難い料金、を除いたものがこれに当たる。具体的な算出方法については、図表 18 の脚注参照。

なお、6 月の企業向けサービス価格指数の総平均を前年比でみると、国内需給要因以外の品目に大きな動きがみられなかったことから、国内需給要因と同じような動きとなっている（前年比、5 月 -0.5% → 6 月 -0.6%）。

⁸ 生鮮食品価格が前年を大幅に下回って推移しているため、消費者物価の前年比は、生鮮食品を含む消費者物価総合でみると、かなりのマイナスが続いている（前年比、5 月 -0.7%

が上昇している一方、輸入製品価格は下落を続けていることから、引き続き幾分弱含みで推移している（3か月前比、4月-0.2%→5月-0.1%→6月0.0%）。

今後の物価を取り巻く環境についてみると、緩やかな景気回復の持続が展望されるも、需要の弱さに由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退している。また、原油価格上昇分の転嫁が、物価に対し一時的に上昇方向に作用するとみられる。他方、技術進歩を背景とする機械類の趨勢的な下落に加え、これまでの円高や流通合理化に伴う消費財価格の低下が下落方向に作用することから、総じてみれば物価は横這いしないしやや弱含みで推移するものと考えられる。

3. 金融

(1) 金融市況

短期市場金利についてみると（図表 20(1)、21）、無担保コールレート（オーバーナイト物）は、概ね 0.02%と、ゼロ%に近い水準で推移しており、オーバーナイト資金の確保に対する懸念は払拭された状況が続いている。この間、コール市場残高は、若干減少している。

ターム物金利の動向をみると、ゼロ金利政策の解除観測が後退したことを受けて、3か月物ユーロ円金利（TIBOR）やTB・FBレートはいずれも低下している。ジャパン・プレミアムは（図表 23）、ほぼ解消された状態が続いている。

→6月-0.7%）。

長期国債の流通利回り（新発債、前掲図表 20(2)）は、7月末にかけて若干低下し、最近では 1.6%台後半で推移している。この間、民間債（金融債、社債）と国債との流通利回りスプレッド（図表 25、26）は、金融債や低格付の社債については幾分拡大しているものの、総じてみれば、ほぼ横這い圏内で推移している。

株価は（図表 27(1)）、7月中旬以降、大手小売業者の民事再生法適用申請をきっかけとした市場の不安感や、米国株価の軟調等を背景に下落している。

為替相場をみると（図表 28）、円の対米ドル相場は、7月末にかけて、日本国債の格下げを巡る思惑等から緩やかに円安が進み、最近では概ね 108~109 円台で推移している。

（2）量的金融指標と企業金融

マネーサプライの動向をみると（図表 29）、6月のM₂+CDの前年比は、前月に比べ伸び率が低下した（3月+1.9%→4月+2.9%→5月+2.2%→6月+1.9%）。

7月のマネタリーベース（流通現金+日銀当座預金）前年比は（図表 30）、前月に比べ伸び率が低下した。

この間、民間金融機関の融資態度をみると、基本的には慎重な融資姿勢が維持されている。しかし、金融機関自身の資金繰りや自己資本面での制約は緩和されており、大手行などでは、融資先の信用力などを見きわめつつ、融資を回復させようとする姿勢を続けている。

しかし、資金需要面では、収益回復に伴いキャッシュ・フローが増加しているうえ、まだ設備投資などの支出水準がこれを下回っているため、企業の外部資金調達ニーズは乏しく、実体経済活動の改善が資金需要に結びつきにくい状

況が続いている。また、企業はバランスシート調整の一環として、借入金を圧縮していくスタンスを維持している。これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

こうした中で、民間銀行貸出は（5業態・月中平均残高、特殊要因調整後⁹、図表 31）、基調としては弱めの動きが続いている（4月前年比-1.8%→5月-2.2%→6月-2.1%→7月-2.0%）。社債やCPの発行も（図表 33）、落ち着いた動きとなっている。

企業の資金調達コストをみると、新規貸出約定平均金利は（図表 35）、概ね横這い圏内で推移している。社債の発行金利も低水準で推移している。この間、CPの発行金利は、引き続き低水準ながら、7月中旬にかけてやや上昇した後、足許弱含んでいる。

6月の企業倒産件数は（図表 36）、前月に比べ、わずかに増加した。

以上のような環境のもとで、企業からみた金融機関の貸出姿勢は厳しさが後退しており、企業金融には緩和感が広がりつつある。

以 上

⁹ 「特殊要因調整後」とは、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、および③貸出債権の償却による変動分などを調整した計数である。

金融経済月報（2000年8月） 参考計表

(図表 1)	国内主要経済指標
(図表 2)	公共投資
(図表 3)	輸出入
(図表 4)	実質輸出の内訳
(図表 5)	実質輸入の内訳
(図表 6)	純輸出を取り巻く環境
(図表 7)	設備投資関連指標
(図表 8)	個人消費関連指標
(図表 9)	消費者コンフィデンスと消費性向
(図表 10)	住宅投資関連指標
(図表 11)	在庫循環
(図表 12)	鉱工業生産・出荷・在庫
(図表 13)	雇用者所得
(図表 14)	労働需給
(図表 15)	物価
(図表 16)	輸入物価と商品市況
(図表 17)	国内卸売物価
(図表 18)	企業向けサービス価格
(図表 19)	消費者物価
(図表 20)	市場金利等
(図表 21)	短期金融市場
(図表 22)	ユーロ円金利先物（3か月）
(図表 23)	ジャパン・プレミアム
(図表 24)	長期金利の期間別分解
(図表 25)	金融債流通利回り
(図表 26)	社債流通利回り
(図表 27)	株価
(図表 28)	為替レート
(図表 29)	マネーサプライ（M ₂ +CD、広義流動性）
(図表 30)	マネタリーベース
(図表 31)	民間銀行貸出
(図表 32)	中小企業からみた金融機関の貸出態度
(図表 33)	資本市場調達
(図表 34)	その他金融機関貸出
(図表 35)	貸出金利
(図表 36)	企業倒産

国内主要経済指標(1)

(指標名欄の〈〉内に指示されている場合を除き、季調済前期(月)比、%)

	99/10-12月	2000/1-3月	4-6月	2000/4月	5月	6月	7月
消費水準指数(全世帯)	-1.8	-0.2	p 3.8	5.9	0.4	p -2.5	n. a.
全国百貨店売上高	-0.2	0.1	p -2.0	-1.6	0.7	p -0.4	n. a.
チェーンストア売上高	-1.1	-1.9	-2.4	-3.5	1.5	0.7	n. a.
乗用車新車登録台数(除軽) 〈季調済年率換算、万台〉	〈287〉	〈298〉	〈304〉	〈312〉	〈293〉	〈308〉	〈284〉
家電販売額 (実質、NEBA統計)	4.3	7.6	3.7	-2.4	2.8	6.0	n. a.
旅行取扱額(主要50社)	-4.3	2.2	n. a.	4.4	-3.6	n. a.	n. a.
新設住宅着工戸数 〈季調済年率換算、万戸〉	〈117〉	〈127〉	〈124〉	〈124〉	〈121〉	〈127〉	〈n. a.〉
機械受注 (民需、除く船舶・電力)	8.7	4.9	3.1	-1.1	4.5	14.4	n. a.
製造業	7.9	4.5	11.2	9.3	3.0	11.6	n. a.
非製造業 (除く船舶・電力)	10.1	7.9	-5.0	-11.6	3.3	15.7	n. a.
建築着工床面積 (民間、非居住用)	10.8	14.4	-1.9	3.6	7.5	-7.9	n. a.
鋁工業	9.1	10.9	11.1	4.1	3.7	18.0	n. a.
非製造業	7.9	14.5	-2.6	7.6	3.3	-10.0	n. a.
公共工事請負金額	-4.5	23.7	-25.3	-53.6	39.0	-4.4	n. a.
実質輸出	2.5	4.9	3.2	0.7	-6.6	11.8	n. a.
実質輸入	5.2	0.4	6.3	-5.1	8.8	-1.7	n. a.
生産	1.4	0.8	p 1.6	-0.6	0.3	p 1.7	n. a.
出荷	2.0	0.5	p 1.7	-0.6	0.7	p 2.5	n. a.
在庫	-1.7	2.4	p -0.2	0.4	-0.5	p -0.1	n. a.
在庫率 〈季調済、95年=100〉	〈99.0〉	〈100.0〉	〈p 98.4〉	〈101.5〉	〈100.5〉	〈p 98.4〉	〈n. a.〉
実質GDP	-1.6	2.4	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.

国内主要経済指標 (2)

(指標名欄のく>内に指示されている場合を除き、前年比、%)

	99/10-12月	2000/1-3月	4-6月	2000/4月	5月	6月	7月
有効求人倍率 <季調済、倍>	<0.49>	<0.52>	<0.57>	<0.56>	<0.56>	<0.59>	<n.a.>
完全失業率 <季調済、%>	<4.63>	<4.82>	<4.70>	<4.84>	<4.56>	<4.69>	<n.a.>
所定外労働時間 (事業所規模5人以上)	1.4	3.5	p 4.0	4.2	3.3	p 4.4	n.a.
雇用者数(労働力調査)	-0.4	-0.4	0.4	-0.4	0.6	1.1	n.a.
常用労働者数(毎勤統計) (事業所規模5人以上)	-0.2	-0.2	p -0.3	-0.4	-0.3	p -0.2	n.a.
一人当り名目賃金 (事業所規模5人以上)	-1.2	0.7	p 0.8	0.6	0.7	p 1.0	n.a.
国内卸売物価 <夏季電力料金調整済、 前期(3か月前)比、%>	-0.7 <0.1>	-0.1 <0.1>	0.3 <0.0>	0.5 <0.2>	0.3 <0.0>	0.3 <0.0>	0.3 <-0.1>
全国消費者物価 (除く生鮮食品) <季調済前期(3か月前)比、%>	-0.2 <-0.1>	-0.2 <0.0>	-0.3 <-0.1>	-0.4 <-0.2>	-0.2 <-0.1>	-0.3 <0.0>	n.a. <n.a.>
企業向けサービス価格 (国内需給要因) <季調済前期(3か月前)比、%>	-0.9 <-0.2>	-0.8 <-0.1>	-0.9 <-0.4>	-0.9 <-0.3>	-0.8 <-0.5>	-0.8 <-0.4>	n.a. <n.a.>
マネーサプライ(M ₂ +CD) (平残)	3.0	p 2.2	p 2.3	p 2.9	p 2.2	p 1.9	n.a.
取引停止処分件数	3.3	55.4	16.1	26.8	5.9	17.0	n.a.

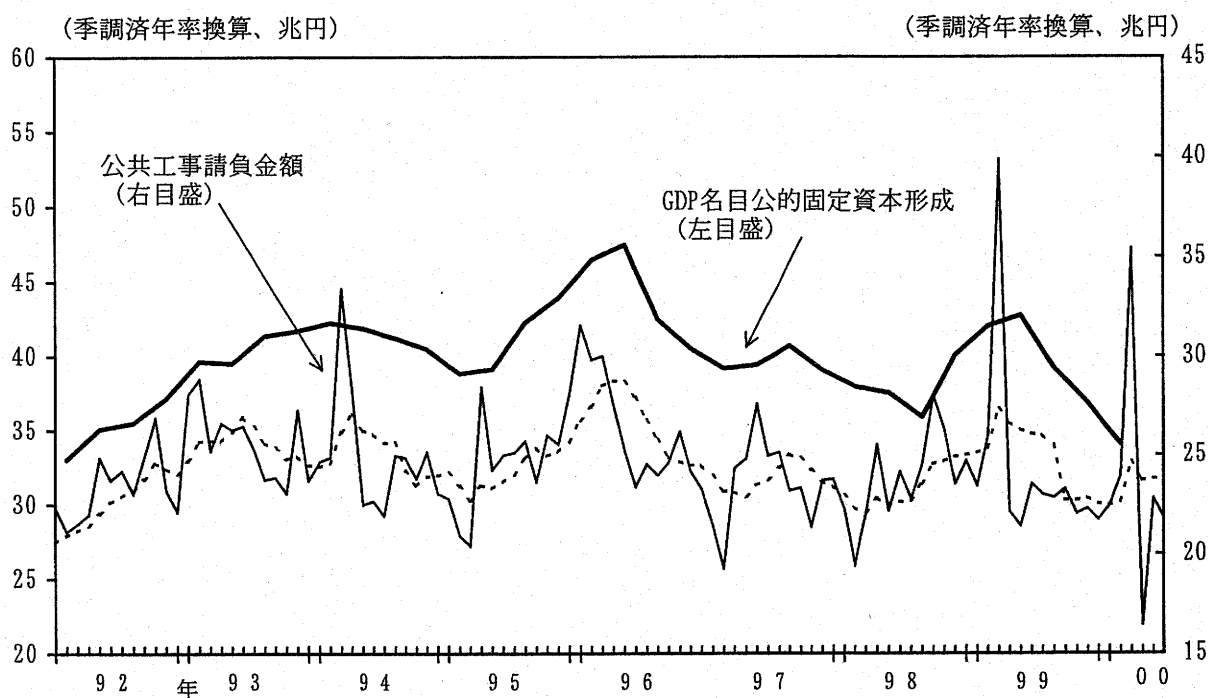
(注) 1. p は速報値。

2. 日本銀行が季節調整を施している指標の季節調整方法及び、日本銀行が作成・加工している指標の算出方法については、該当図表の脚注を参照。

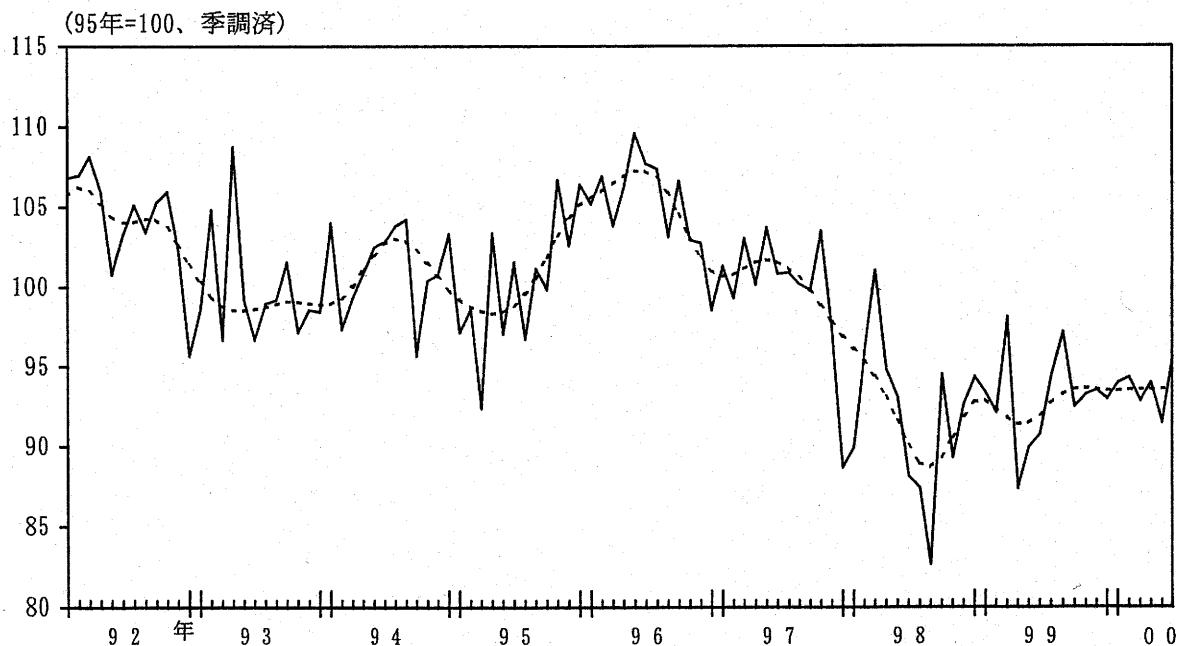
(資料) 総務庁「家計調査報告」「労働力調査」「消費者物価指数」、
 通商産業省「商業販売統計」「鉱工業指数統計」、
 日本チェーンストア協会「チェーンストア販売統計」、
 日本電気専門大型店協会(NEBA)「商品別売上高」、
 日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、運輸省「旅行取扱状況」、
 建設省「建設統計月報」、経済企画庁「機械受注統計」「国民所得統計」、
 保証事業会社協会「公共工事前払金保証統計」、
 大蔵省「外国貿易概況」、労働省「職業安定業務統計」「毎月勤労統計」、
 日本銀行「卸売物価指数」「企業向けサービス価格指数」「金融経済統計月報」、
 全国銀行協会連合会「全国取引停止処分者の状況」

公共投資

(1) 公共工事請負金額と名目公的固定資本形成



(2) 公共投資関連財出荷

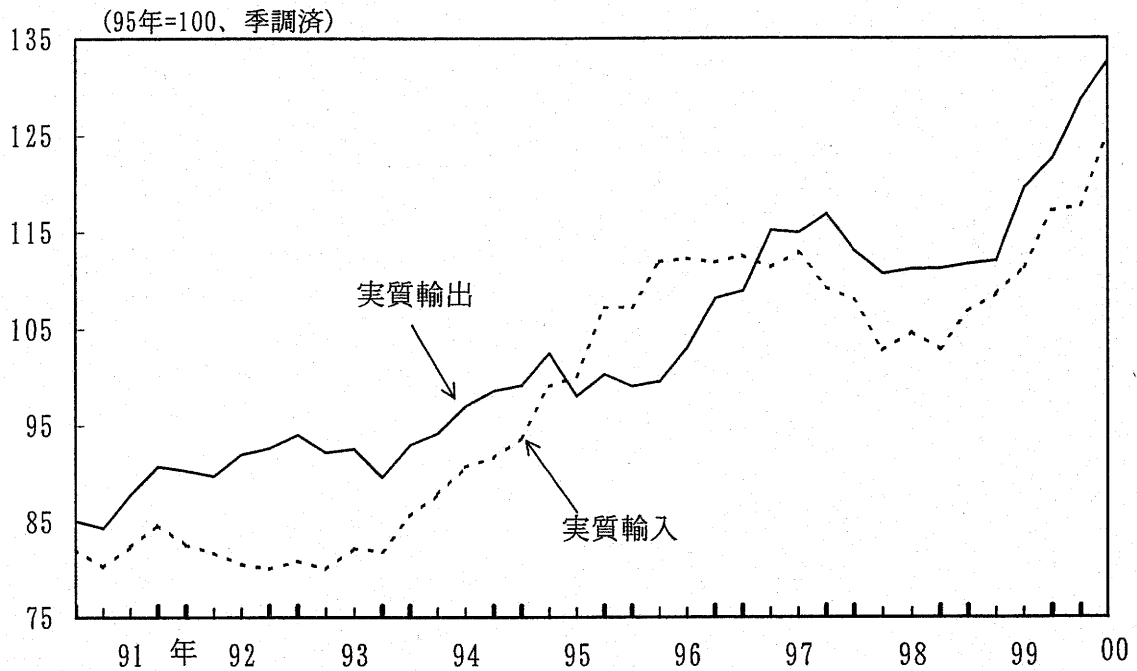


- (注) 1. 公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。
 2. 公共投資関連財出荷は、アスファルト、道路用コンクリート製品、橋梁、セメントをそれぞれの95年基準の出荷ウェイトで加重平均。
 3. 公共工事請負金額と公共投資関連財出荷は、X-12-ARIMA(β バージョン)による季節調整値。同計数は、毎月季節調整替えを行う関係から、過去に溯って毎月改訂される。点線は、公共工事請負金額については後方6か月移動平均値、公共投資関連財出荷については趨勢循環変動成分。
 4. 公共投資関連財出荷の2000/6月の値は速報値。

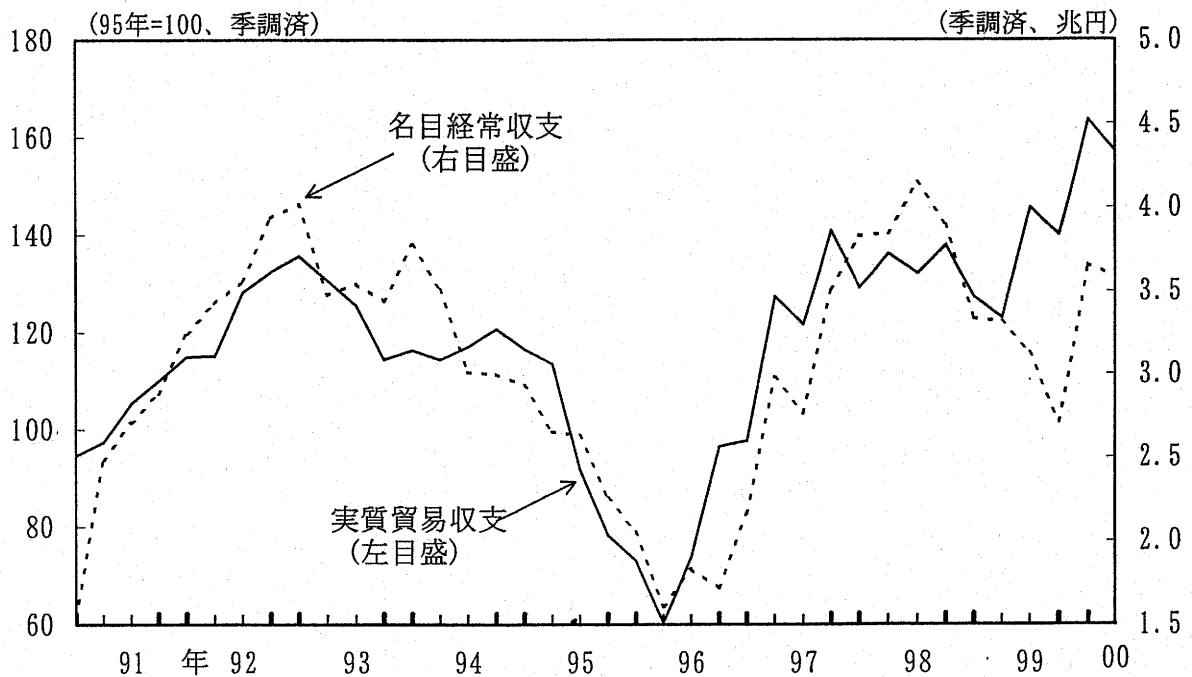
(資料) 経済企画庁「国民所得統計」、保証事業会社協会「公共工事前払金保証統計」、通商産業省「鉱工業指数統計」

輸出入

(1) 実質輸出入



(2) 実質貿易収支と名目経常収支



- (注) 1. 実質輸出(入)は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートしたうえ指数化したもの。
2. 実質貿易収支は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートし、その輸出入差を指数化したもの。
3. 実質輸出入及び実質貿易収支はX-11による季節調整値。
4. 2000/2Qの名目経常収支は、4-5月実績の四半期換算値。

(資料) 大蔵省「外国貿易概況」、日本銀行「卸売物価指数」「国際収支統計月報」

実質輸出の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 98年	99	99年 2Q	3Q	4Q	2000年 1Q	2Q	2000年 4月	5	6
米国	<30.7>	6.8	4.6	2.1	5.7	-0.1	3.6	3.6	2.8	-6.4	6.4
EU	<17.8>	15.6	0.9	-4.5	5.2	2.6	4.3	-0.6	-2.2	-10.6	14.2
東アジア	<35.8>	-18.1	12.0	3.9	7.8	2.3	12.6	5.9	1.6	-1.6	10.3
中国	<5.6>	0.5	12.3	-6.3	8.4	-7.7	19.4	6.3	-6.9	10.4	8.8
NIEs	<21.5>	-16.5	11.2	5.6	8.6	5.0	12.7	3.7	2.3	-3.6	9.2
台湾	<6.9>	-0.4	7.8	3.7	7.4	6.9	5.8	9.6	4.1	2.4	4.0
韓国	<5.5>	-35.3	43.9	4.4	12.1	9.4	18.8	-3.9	-4.1	-6.8	10.1
ASEAN4	<8.6>	-29.2	13.6	7.0	5.6	2.1	8.6	11.3	5.0	-3.3	13.8
タイ	<2.7>	-29.4	15.3	0.2	11.4	8.8	-2.0	5.5	12.4	-11.7	10.2
実質輸出計		-2.1	4.5	0.3	6.7	2.5	4.9	3.2	0.7	-6.6	11.8

- (注) 1. < >内は、99年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4は、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数ともX-11による季節調整値。

(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 98年	99	99年 2Q	3Q	4Q	2000年 1Q	2Q	2000年 4月	5	6
中間財	<14.2>	2.9	5.4	4.2	1.9	-2.3	2.8	2.5	-3.8	0.9	4.8
自動車関連	<21.5>	1.3	2.8	-3.0	8.4	1.7	-4.0	8.2	6.6	-8.1	5.4
消費財	<7.2>	5.0	5.0	-0.9	6.1	4.4	5.1	1.6	0.7	-1.3	10.8
情報関連	<17.6>	-7.0	6.4	3.2	7.3	2.3	14.7	4.1	-1.1	-6.8	14.5
資本財・部品	<28.4>	-5.4	1.8	-1.5	7.0	1.4	14.1	3.1	1.7	-7.4	16.0
実質輸出計		-2.1	4.5	0.3	6.7	2.5	4.9	3.2	0.7	-6.6	11.8

- (注) 1. < >内は、99年通関輸出額に占める各財のウェイト。
 2. 「消費財」は自動車を除く。
 3. 「情報関連」は、自動データ処理機械、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。
 5. 各計数ともX-11による季節調整値。

(資料) 大蔵省「外国貿易概況」、日本銀行「卸売物価指数」

実質輸入の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 98年	99	99年 2Q	3Q	4Q	2000年 1Q	2Q	2000年 4月	5	6
米国	<21.7>	-3.7	-2.9	-9.2	-0.3	8.8	-5.1	8.3	0.7	12.2	-2.4
EU	<13.8>	-6.5	5.8	-2.4	6.2	3.1	1.0	0.3	-4.3	3.6	-8.3
東アジア	<37.6>	-7.7	15.8	5.8	2.8	7.7	7.1	5.4	-9.9	9.2	2.3
中国	<13.8>	-4.4	11.9	4.7	0.4	7.3	12.6	5.6	-13.9	5.4	5.7
NIEs	<11.6>	-10.9	24.2	5.3	4.5	12.3	5.0	4.1	-9.4	8.9	4.2
台湾	<4.1>	-11.1	25.6	5.0	3.0	12.6	15.0	8.9	-6.0	5.9	8.9
韓国	<5.2>	-9.5	30.8	8.6	4.6	18.3	0.7	-0.3	-10.7	16.2	-1.0
ASEAN4	<12.1>	-8.1	12.6	7.5	3.7	4.0	3.4	6.3	-5.5	13.8	-3.0
タイ	<2.9>	-7.1	5.4	2.0	1.3	4.0	4.8	8.8	-1.0	9.6	-1.2
実質輸入計		-6.2	6.1	1.7	2.6	5.2	0.4	6.3	-5.1	8.8	-1.7

- (注) 1. < >内は、99年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数ともX-11による季節調整値。

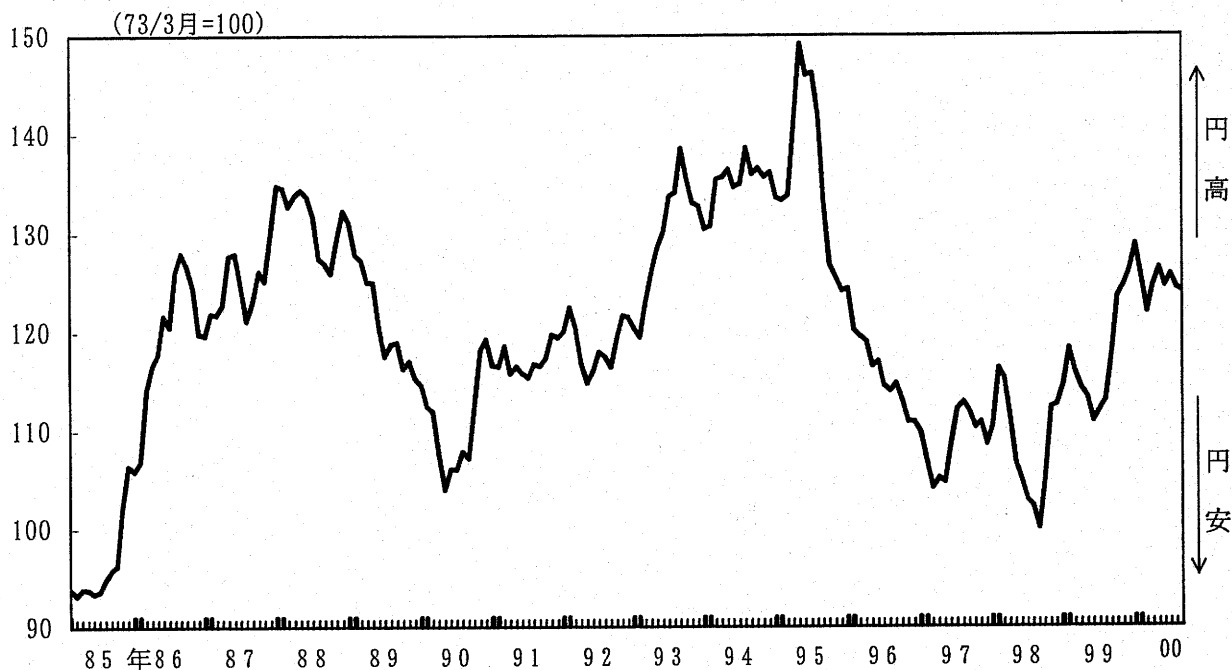
(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 98年	99	99年 2Q	3Q	4Q	2000年 1Q	2Q	2000年 4月	5	6
素原料	<23.2>	-6.0	2.7	1.4	0.1	1.8	-0.3	1.3	-8.3	4.6	-0.3
中間財	<13.5>	-7.1	3.6	1.7	4.1	1.1	0.6	4.3	-5.8	7.7	-2.6
食料品	<14.3>	-4.0	2.8	-0.3	0.3	2.9	4.1	-2.3	-6.7	5.0	-1.7
消費財	<10.8>	-13.8	8.1	10.2	0.5	6.5	4.1	7.8	-8.3	4.6	0.7
情報関連	<14.4>	-5.8	18.7	6.2	4.4	12.4	7.1	13.6	-1.7	13.9	-1.1
資本財・部品	<12.9>	2.7	5.1	-11.4	1.8	13.6	-5.9	5.1	-7.0	10.7	0.4
うち除く航空機		-2.4	4.4	0.0	8.1	3.9	5.0	3.0	-4.6	5.8	-2.3
実質輸入計		-6.2	6.1	1.7	2.6	5.2	0.4	6.3	-5.1	8.8	-1.7

- (注) 1. < >内は、99年通関輸入額に占める各財のウェイト。
 2. 「素原料」は原料品、鉱物性燃料。
 3. 「消費財」は、食料品を除く。
 4. 「情報関連」は、事務用機器、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。
 6. 各計数ともX-11による季節調整値。

純輸出を取り巻く環境

(1) 実質実効為替レート (月中平均)



- (注) 1. 日本銀行試算値。直近8月は8日までの平均値。
2. 主要輸出相手国通貨(25通貨)に対する為替相場(月中平均)を、当該国の物価指数で実質化したうえ、通関輸出金額ウェイトで加重平均したもの。

(2) 海外経済 — 実質GDP、()内は民間機関による見通し

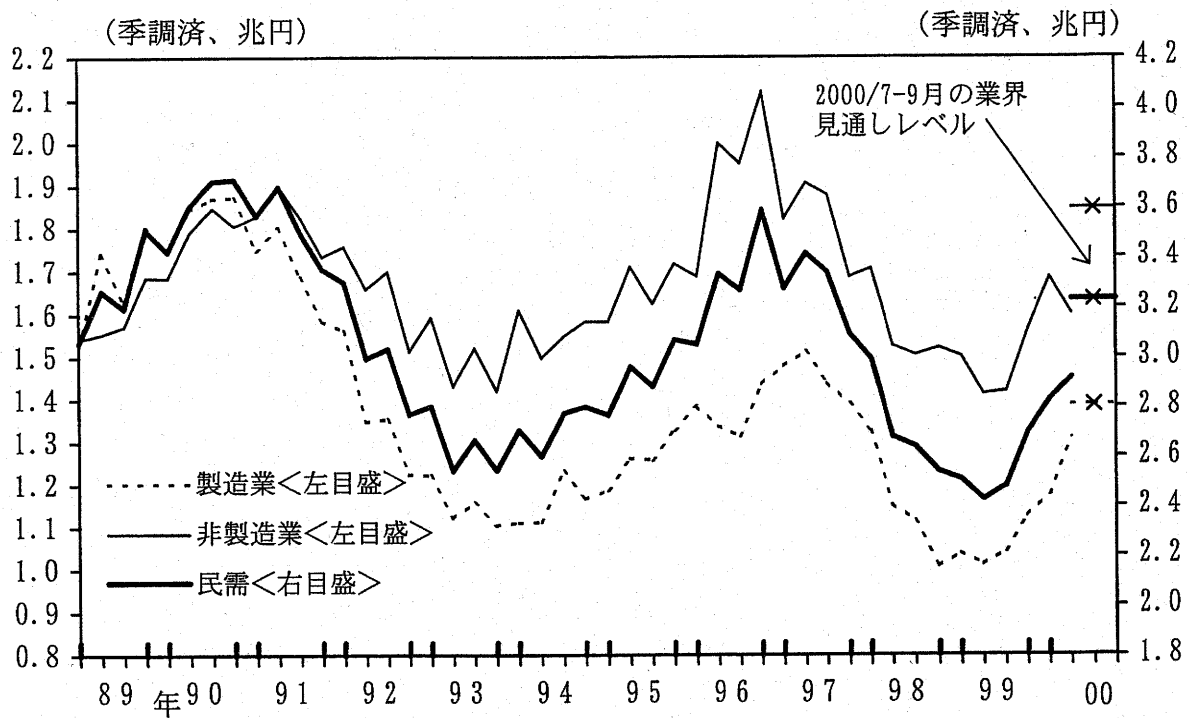
(欧米は前期比年率、東アジアは前年比、%)

		98年	99年	2000年	99年 3Q	4Q	2000年 1Q	2Q
米	国	4.4	4.2	(4.8)	5.7	8.3	4.8	5.2
欧 州	E U	2.7	2.4	(3.3)	4.0	3.4	3.3	n. a.
	ド イ ツ	2.2	1.5	(2.9)	3.1	2.9	2.7	n. a.
	フ ラ ン ス	3.2	2.9	(3.7)	3.9	3.5	2.9	n. a.
	英 国	2.6	2.1	(3.0)	4.1	2.8	2.0	3.6
東 ア ジ ア	中 国	7.8	7.1	(7.7)	(1~9月) 7.4	(1~12月) 7.1	8.1	(1~6月) 8.2
	N 韓 国	-6.7	10.7	(8.5)	12.8	13.0	12.8	n. a.
	I 台 湾	4.6	5.7	(6.8)	5.1	6.8	7.9	n. a.
	E 香 港	-5.1	3.0	(7.8)	4.4	9.2	14.3	n. a.
	s シンガポール	0.4	5.4	(6.9)	6.9	7.1	9.2	7.7
ア S E A N 4	タ イ	-10.2	4.2	(5.4)	7.8	6.5	5.2	n. a.
	インドネシア	-13.0	0.3	(3.8)	1.2	5.0	3.6	4.1
	マレーシア	-7.4	5.6	(7.7)	8.5	10.8	11.7	n. a.
	フィリピン	-0.5	3.3	(3.4)	3.8	4.9	3.4	n. a.

- (注) 1. 計数は、各国政府または中央銀行、欧州委員会による。
2. 米国の見通しは、「BLUE CHIP ECONOMIC INDICATORS (7/10日号)」(Aspen Publishers社)。欧州の見通しは、「CONSENSUS FORECASTS (7/10日号)」(Consensus Economics社)による。東アジアの見通しは、「ASIA PACIFIC CONSENSUS FORECASTS (7/10日号)」(Consensus Economics社)による。

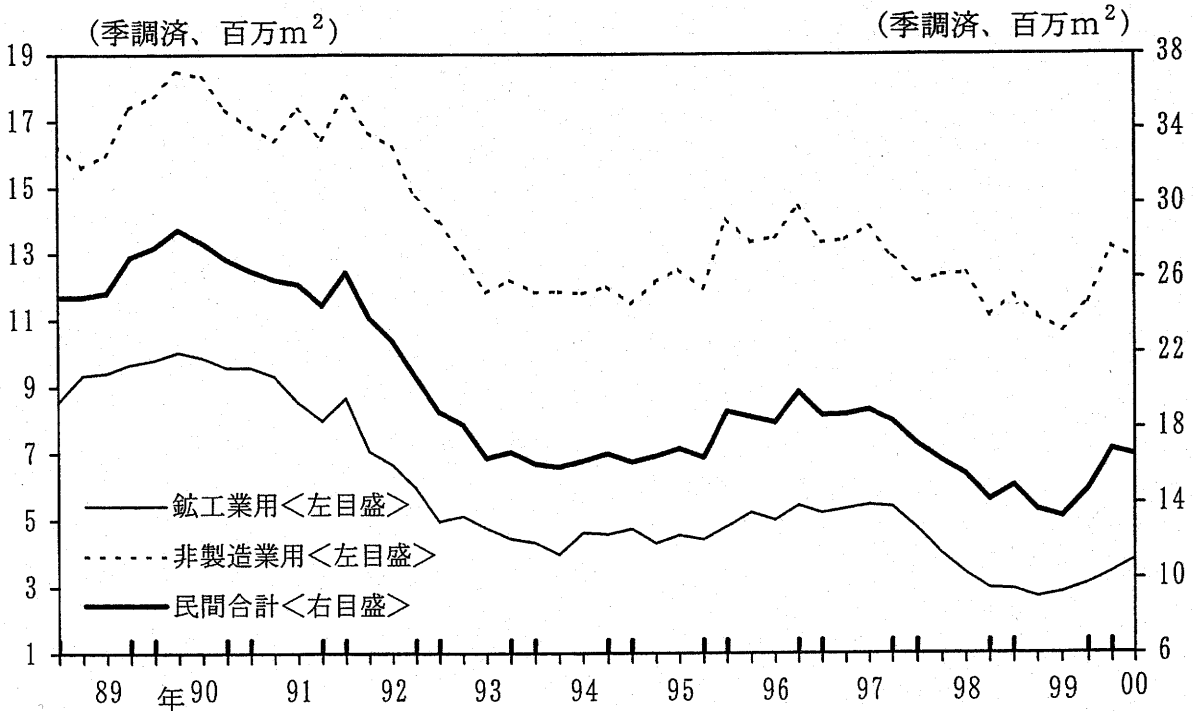
設備投資関連指標

(1) 機械受注



(注) 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。

(2) 建築着工床面積 (非居住用)

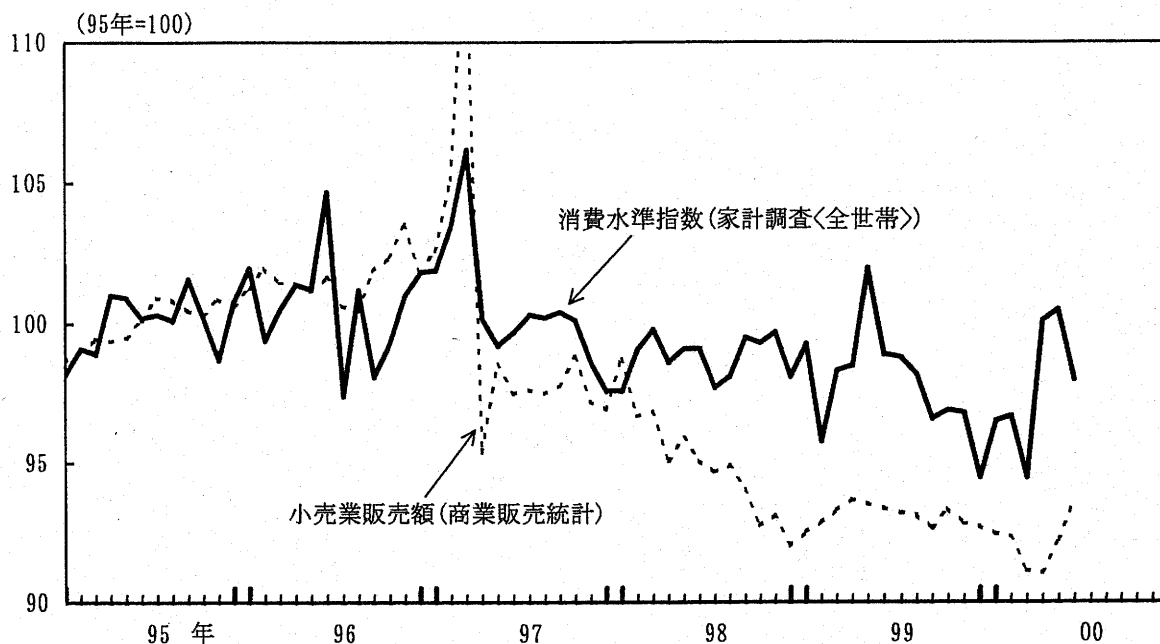


(注) X-11による季節調整値。

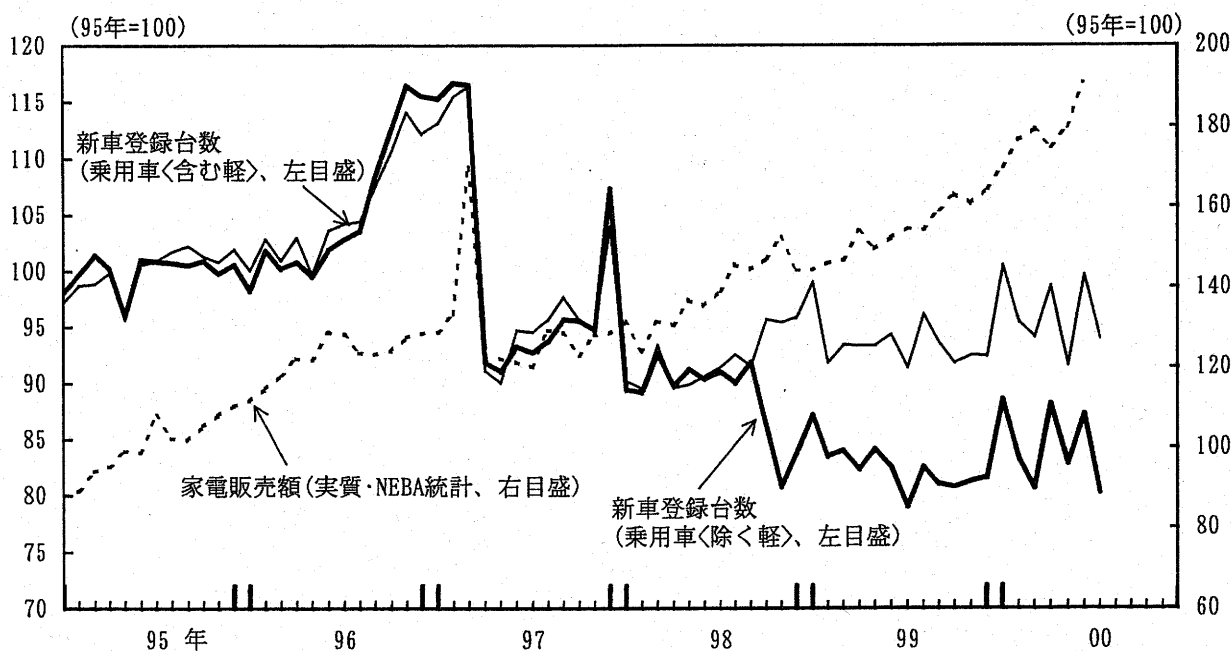
(資料) 経済企画庁「機械受注統計」、建設省「建築着工統計」

個人消費関連指標 (1)

(1) 家計調査・商業販売統計 (実質)



(2) 耐久消費財

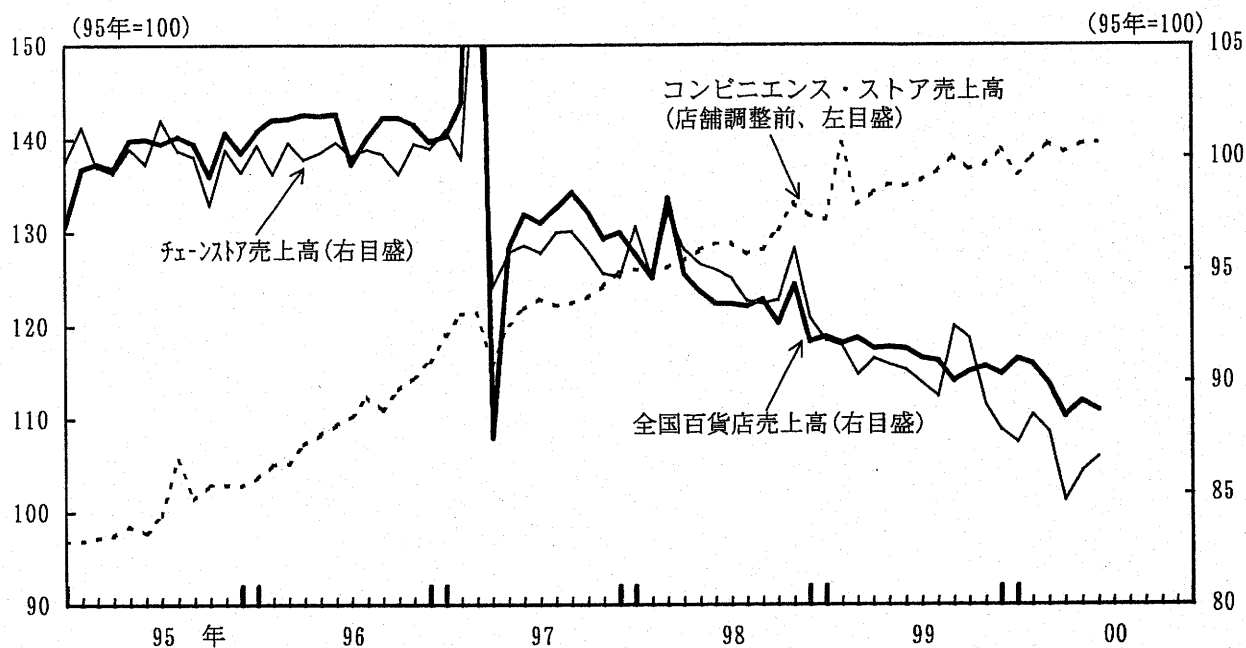


(注) 1. X-12-ARIMA(βバージョン)による季節調整値。ただし、消費水準指数は総務庁による季節調整値。
2. 小売業販売額は、日本銀行において、CPI(商品)で実質化。家電販売額は、各品目のCPI(但しパソコンはWPIで代用)を売上高ウェイトで加重平均し、実質化したもの。

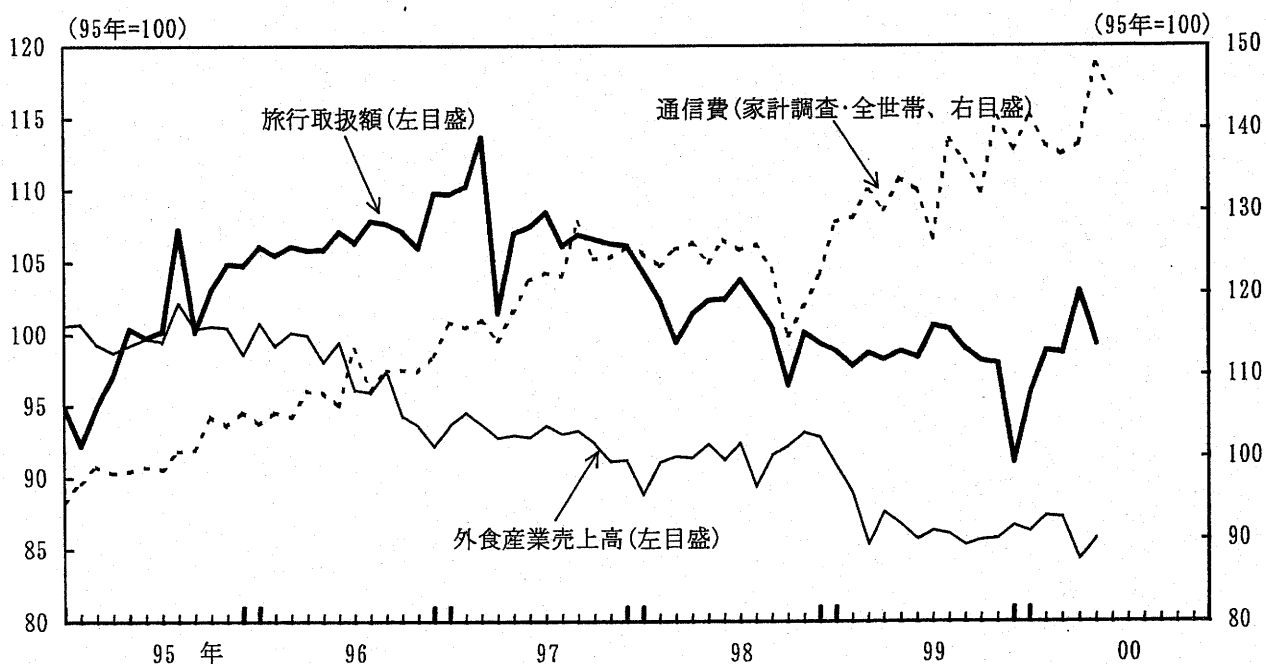
(資料) 総務庁「家計調査報告」「消費者物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、通商産業省「商業販売統計」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、日本電気専門大型店協会(NEBA)「商品別売上高」、日本銀行「卸売物価指数」

個人消費関連指標 (2)

(3) 小売店販売 (名目・除く消費税・店舗調整後)



(4) サービス消費 (名目)

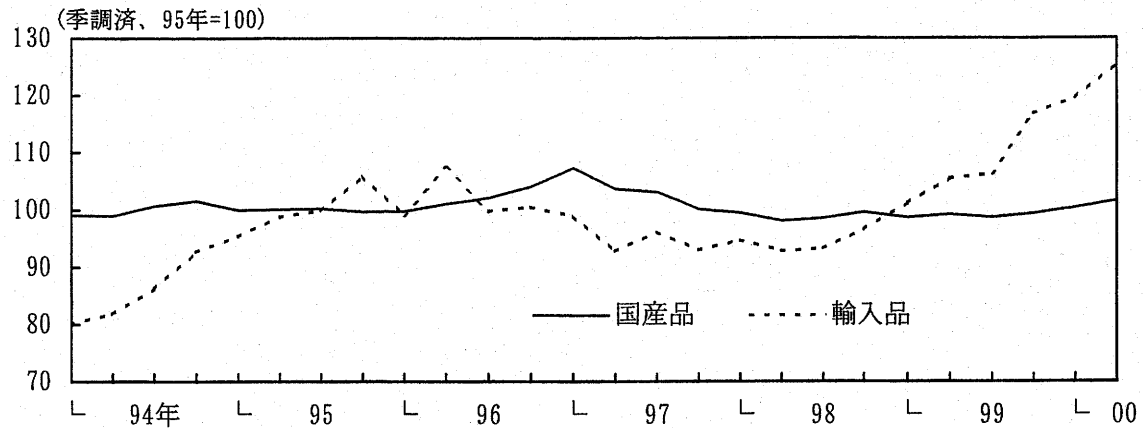


- (注) 1. X-12-ARIMA(β^h-シヨク)による季節調整値。
2. 全国百貨店売上高、旅行取扱額、外食産業売上高は、日本銀行において、消費税分を控除したもの。
3. コンビニエンス・ストア売上高は、日本銀行におけるヒアリング集計ベース。

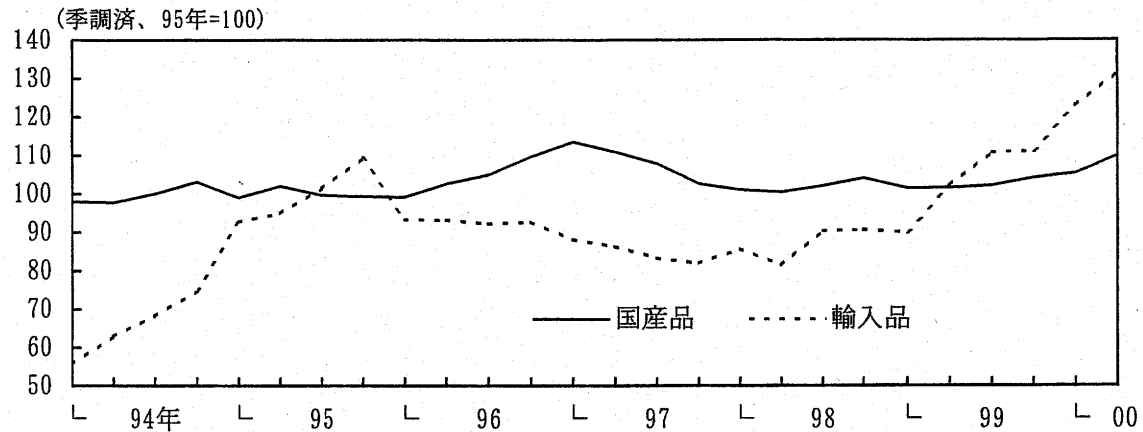
(資料) 日本チェーンストア協会「チェーンストア販売統計」、通商産業省「商業販売統計」、外食総研「月次売上動向調査」、運輸省「旅行取扱状況」、総務庁「家計調査報告」

個人消費関連指標 (3)

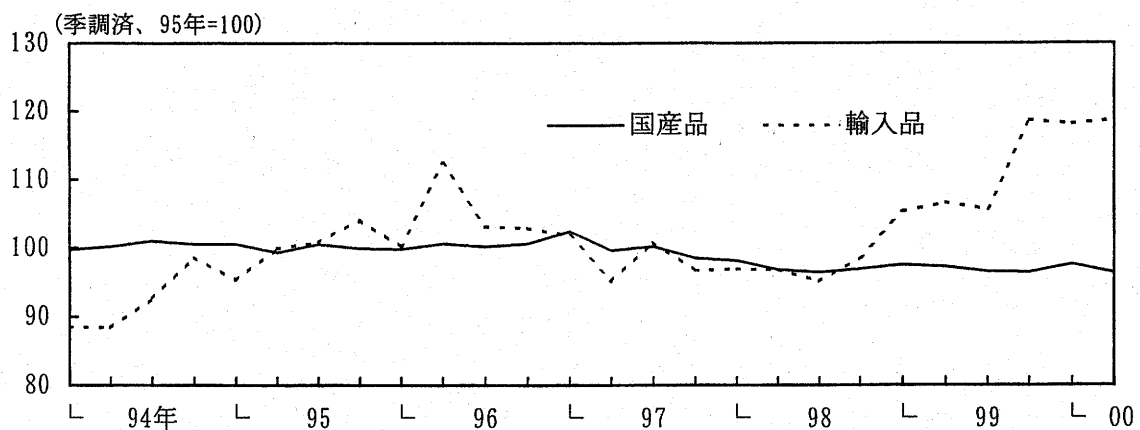
(1) 消費財総供給



(2) 耐久消費財総供給



(3) 非耐久消費財総供給

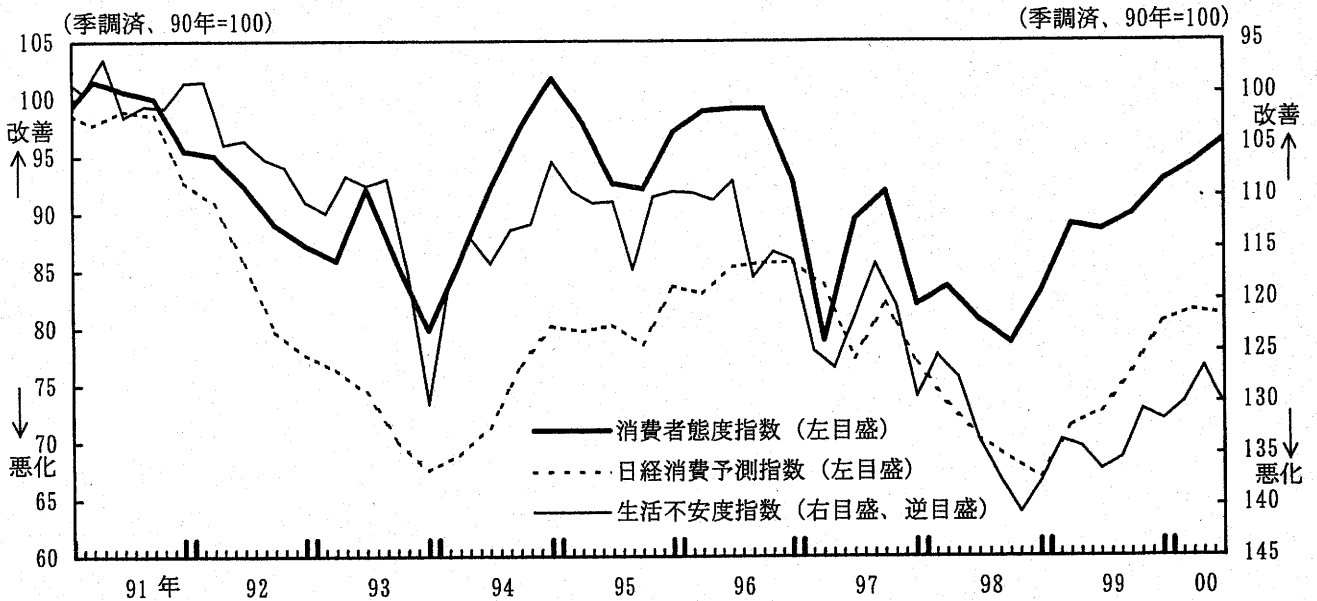


- (注) 1. 「国産品」、「輸入品」とともに鉱工業総供給表「消費財」の内訳項目（「消費財」の定義は鉱工業出荷指数と同一）。
2. 「国産品」の2000/2Qの値は、鉱工業出荷指数の4-6月伸び率から輸出寄与分を差し引いた伸び率を用いて試算したもの。
3. 「輸入品」の2000/2Qの値は、通関統計から作成した実質輸入の伸び率を用いて試算したもの。ただし、耐久消費財実質輸入は自動車、音響映像機器、事務用機器を合成し、非耐久消費財実質輸入は食料品と繊維製品を合成したもの。

(資料) 通商産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、大蔵省「外国貿易概況」、日本銀行「卸売物価指数」

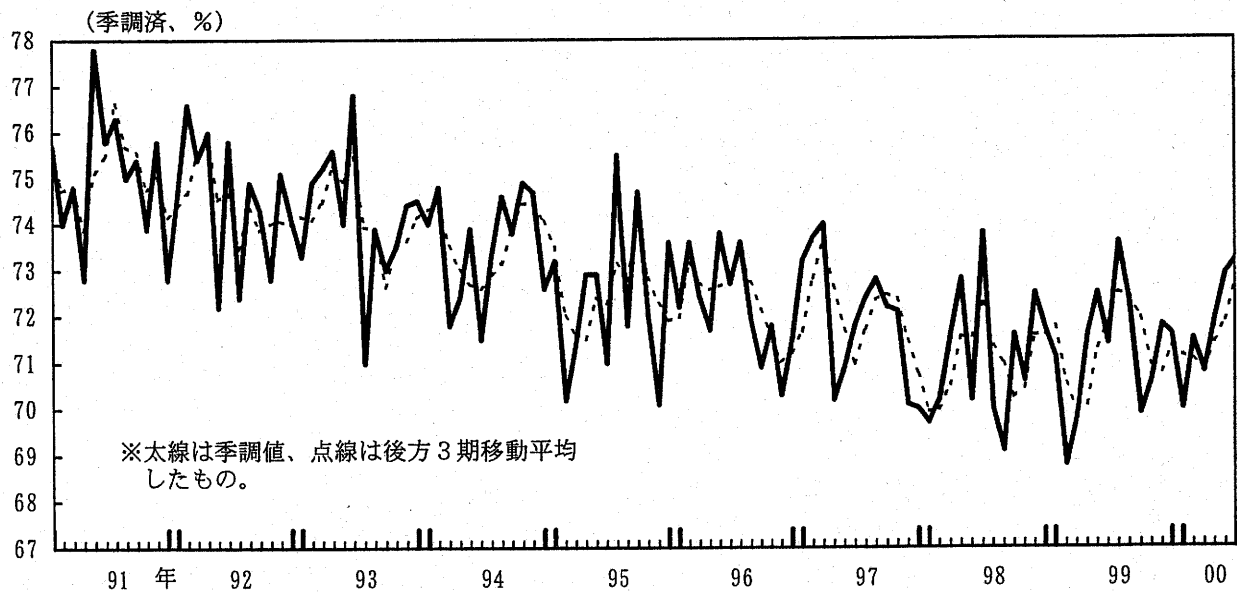
消費者コンフィデンスと消費性向

(1) 各種コンフィデンス指標



- (注) 1. X-11による季節調整値。ただし、消費者態度指数は、経済企画庁による季節調整値。
 2. 消費者態度指数 (調査対象全国 5,040世帯)、日経消費予測指数 (同首都圏 1,500人)、生活不安度指数 (同全国 2,000人) はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。
 3. 生活不安度指数とそれ以外とは調査月が異なるため、計数を各々の調査月にプロットした。
 4. 消費者態度指数は経済企画庁、日経消費予測指数は日経産業消費研究所、生活不安度指数は日本リサーチ総合研究所、による調査。

(2) 平均消費性向の推移 (家計調査)

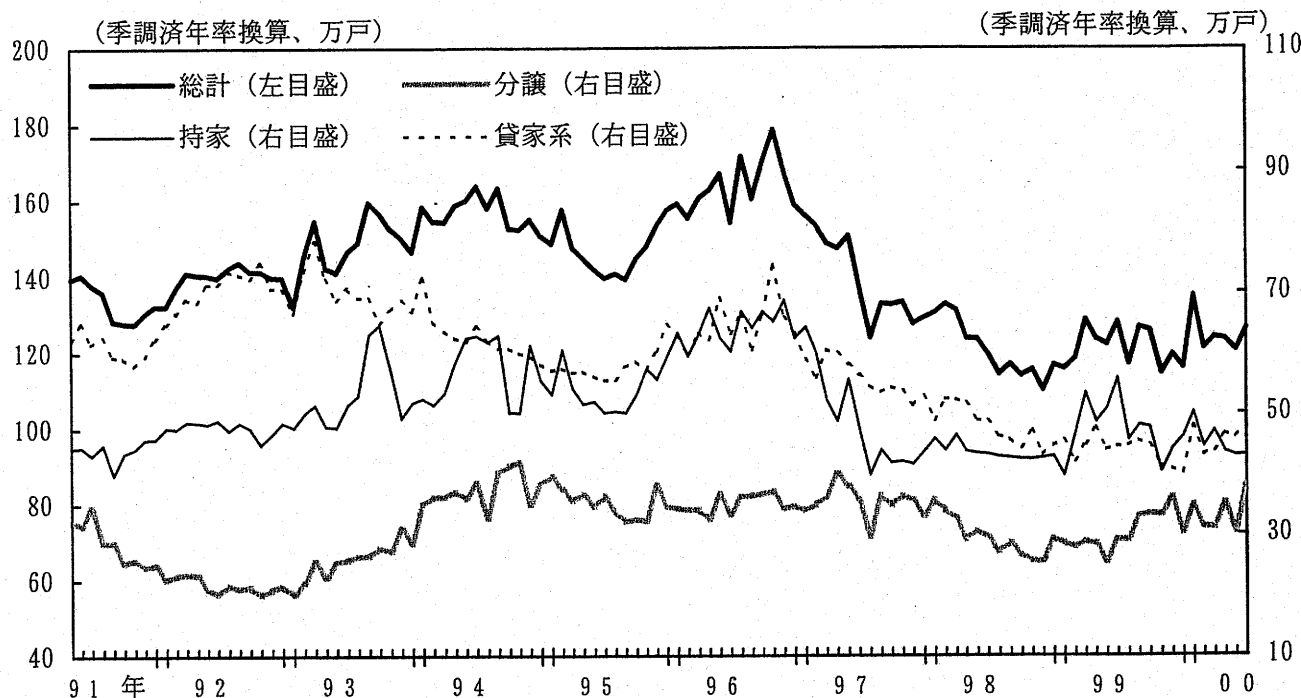


(注) 総務庁による季節調整値。

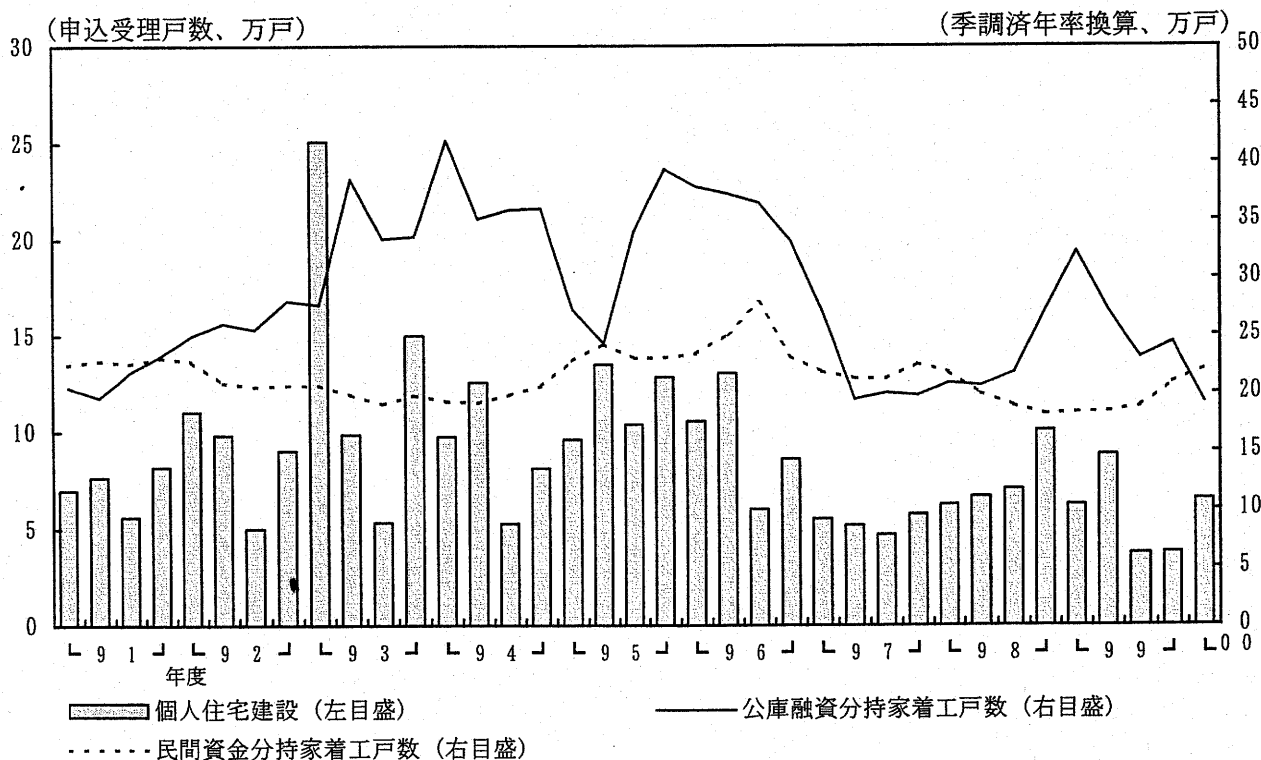
(資料) 経済企画庁「消費動向調査」、日経産業消費研究所「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」、総務庁「家計調査報告」

住宅投資関連指標

(1) 新設住宅着工戸数

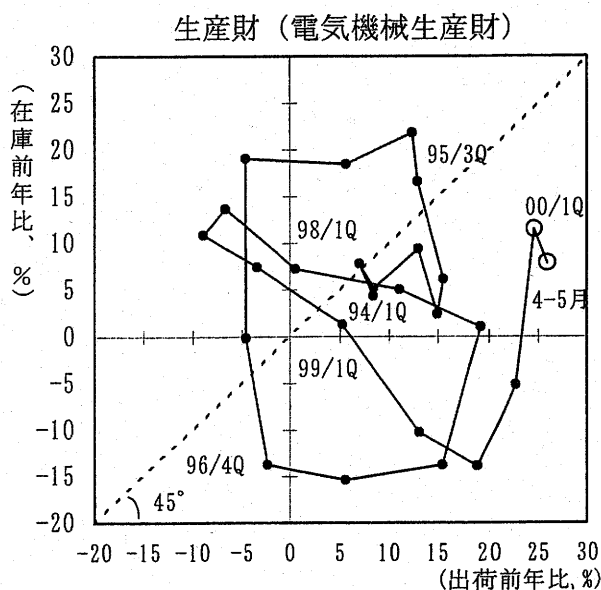
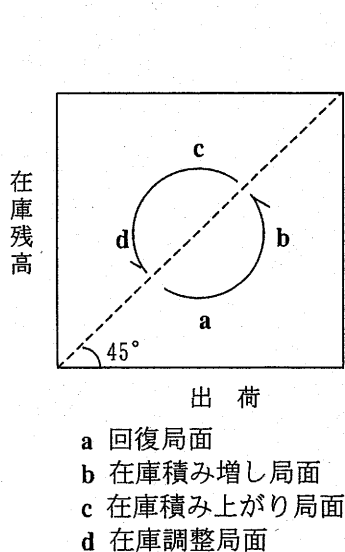
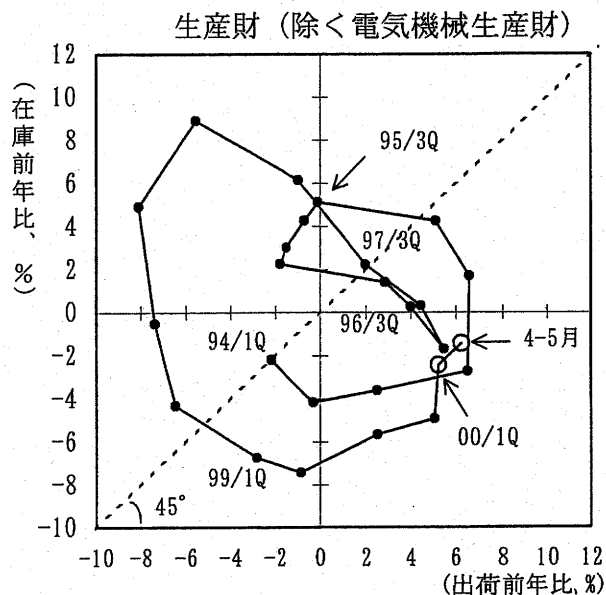
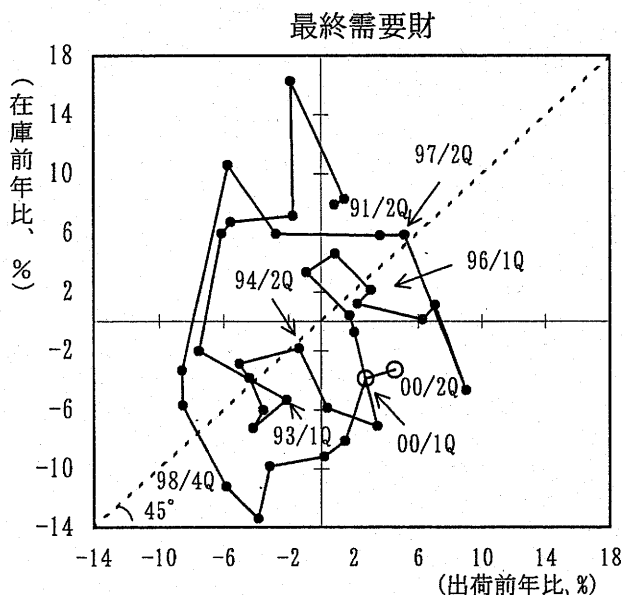
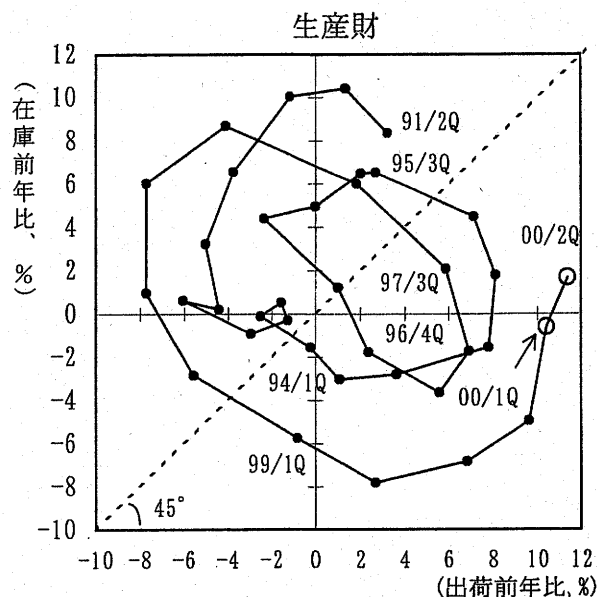
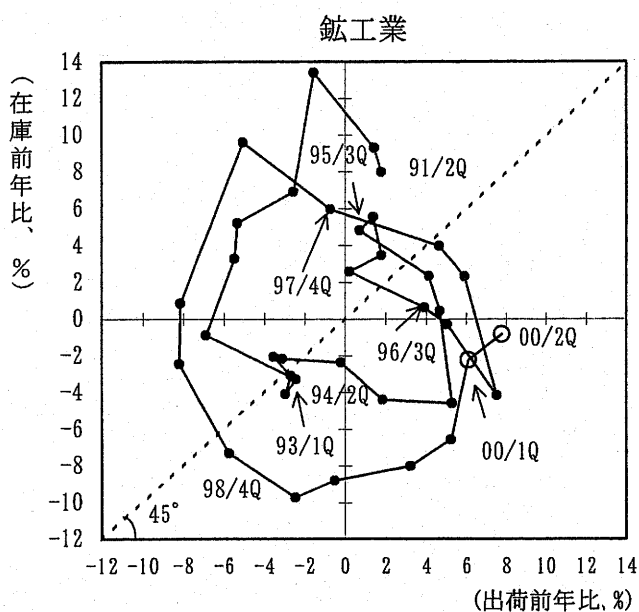


(2) 個人住宅建設向け融資申込受理戸数と持家着工



(資料) 建設省「建設統計月報」、住宅金融普及協会「月刊ハウジングデータ」

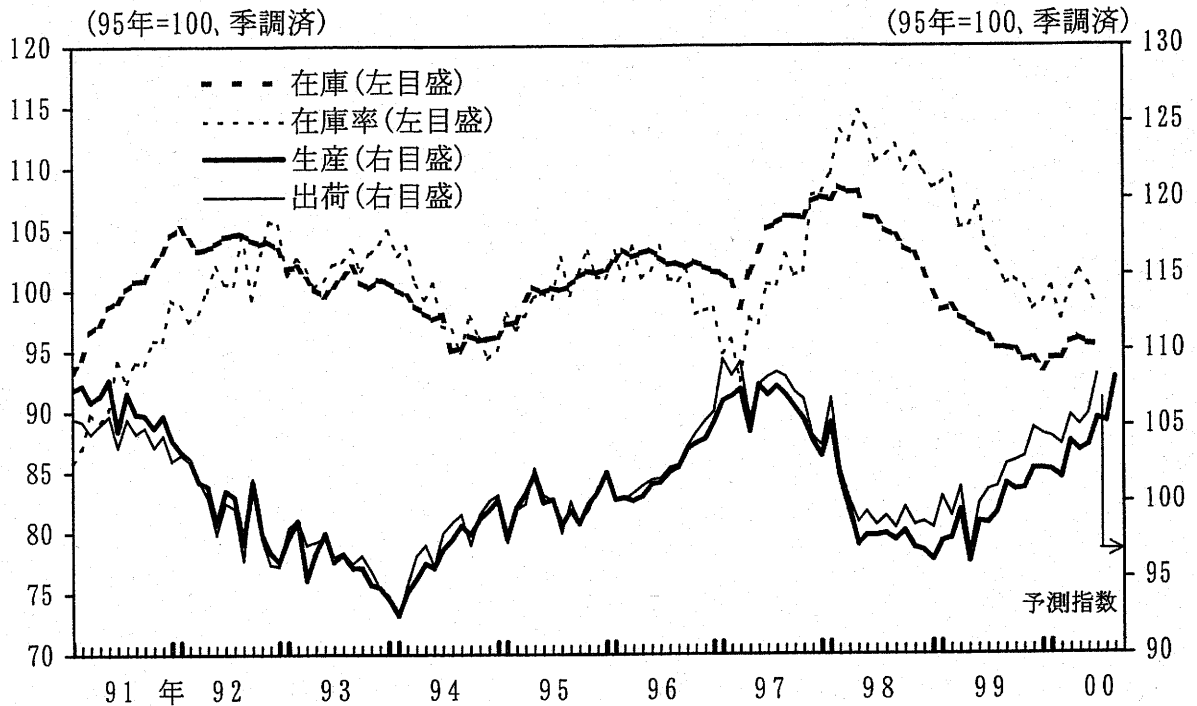
在庫循環



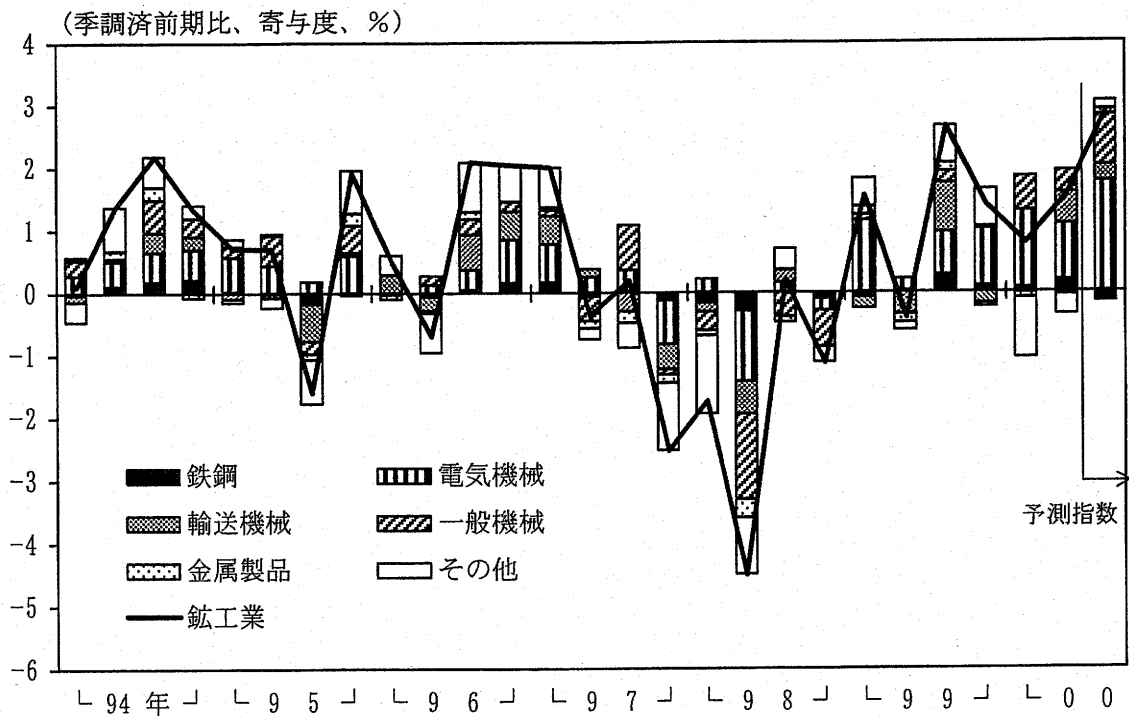
(資料) 通商産業省「鉱工業指数統計」

鋳工業生産・出荷・在庫

(1) 鋳工業生産・出荷・在庫



(2) 生産の業種別寄与度

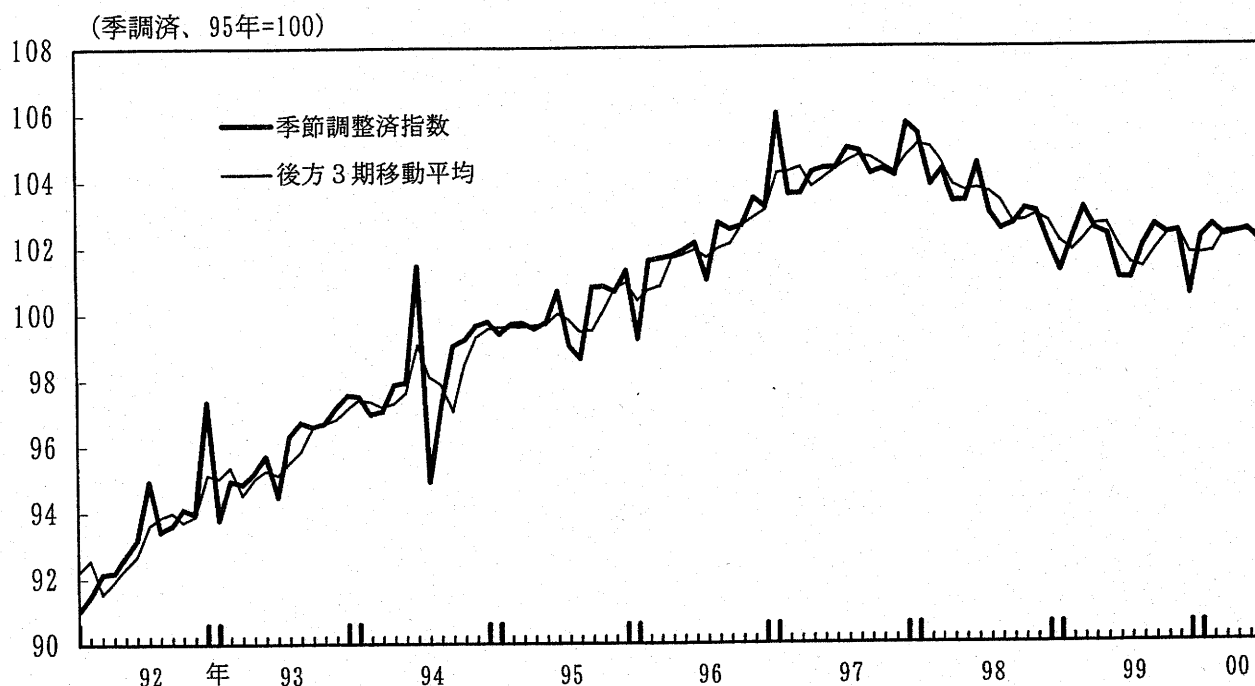


(注) 1. 輸送機械は船舶・鉄道車両を除く。
2. 2000/3Qは、2000/9月を8月と同水準と仮定。

(資料) 通商産業省「鋳工業指数統計」

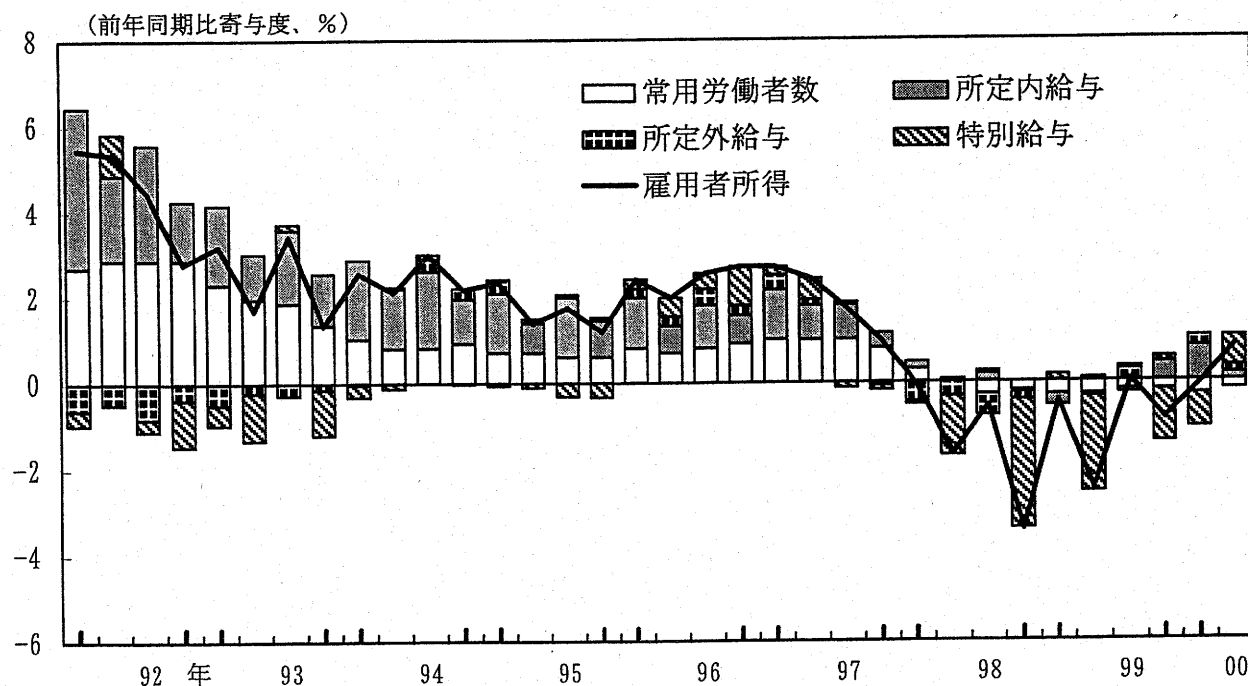
雇用者所得

(1) 所得の推移



- (注) 1. 賃金指数(現金給与総額)×常用雇用指数/100とし、日本銀行が算出。
2. X-12-ARIMA(βバージョン)による季節調整値。
3. 事業所規模5人以上。2000/6月の値は速報値(下の図表も同じ)。

(2) 所得の内訳

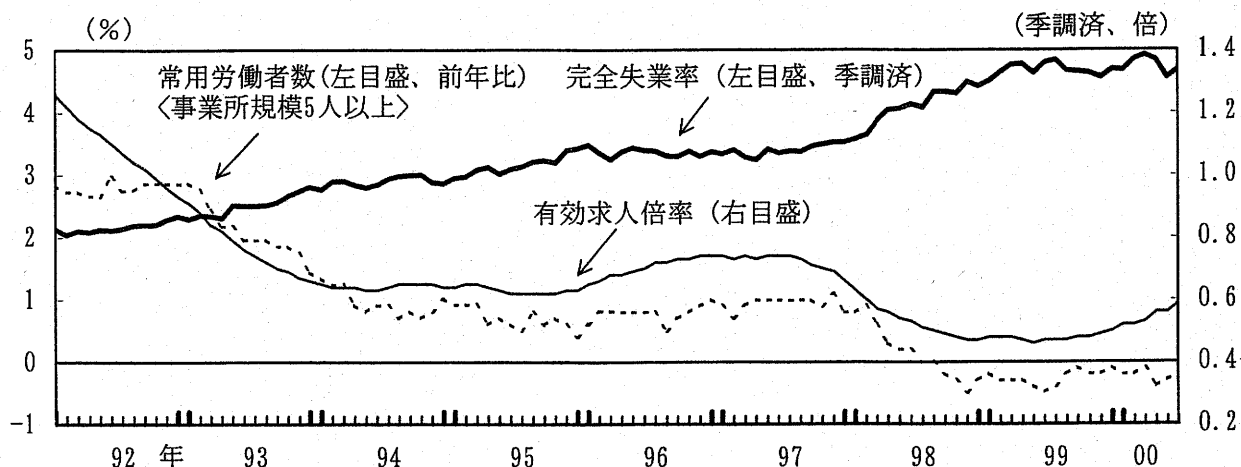


- (注) 1. 第1四半期: 3~5月、第2: 6~8月、第3: 9~11月、第4: 12~2月。
2. 2000/2Qは2000/6月の値。

(資料) 労働省「毎月勤労統計」

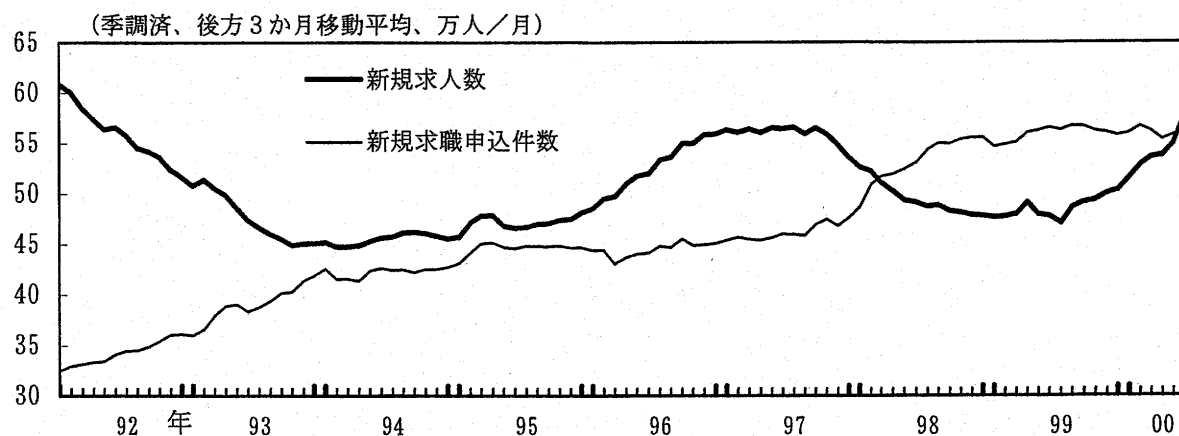
労働需給

(1) 雇用関連指標



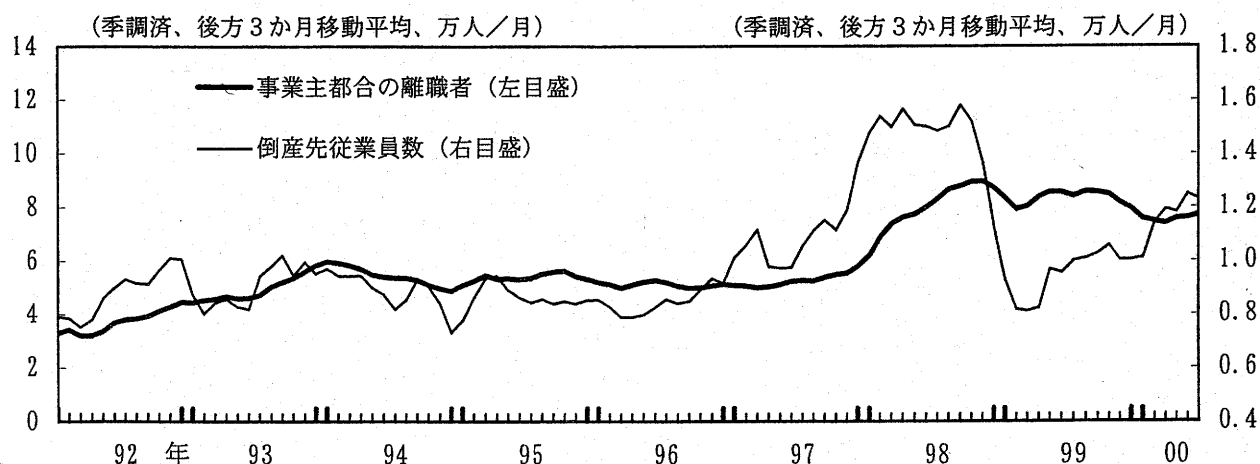
(注) 常用労働者数の2000/6月の値は速報値。

(2) 新規求人数・求職者数の動向



(注) 新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む。

(3) 事業主都合による離職者・倒産企業の従業員数の動向



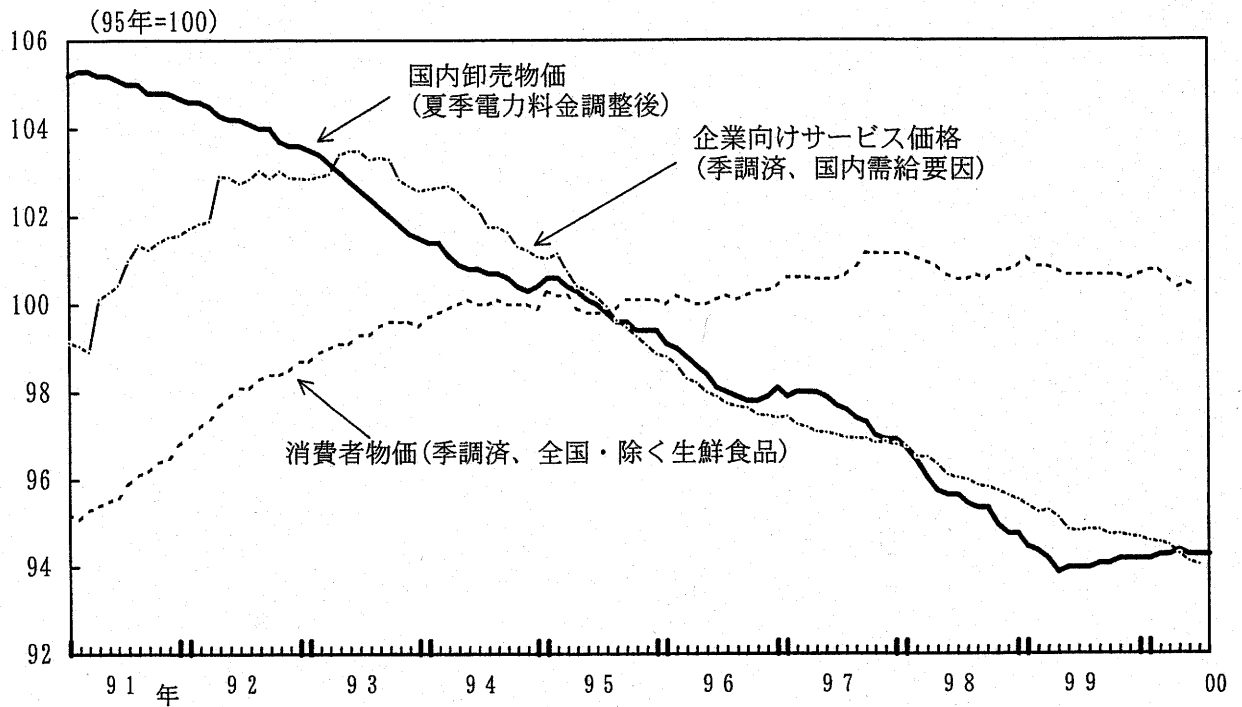
(注) 1. とともにX-11による季節調整値。

2. 倒産先従業員数は帝国データバンク調べ(集計対象は負債総額1千万円以上の倒産先)。

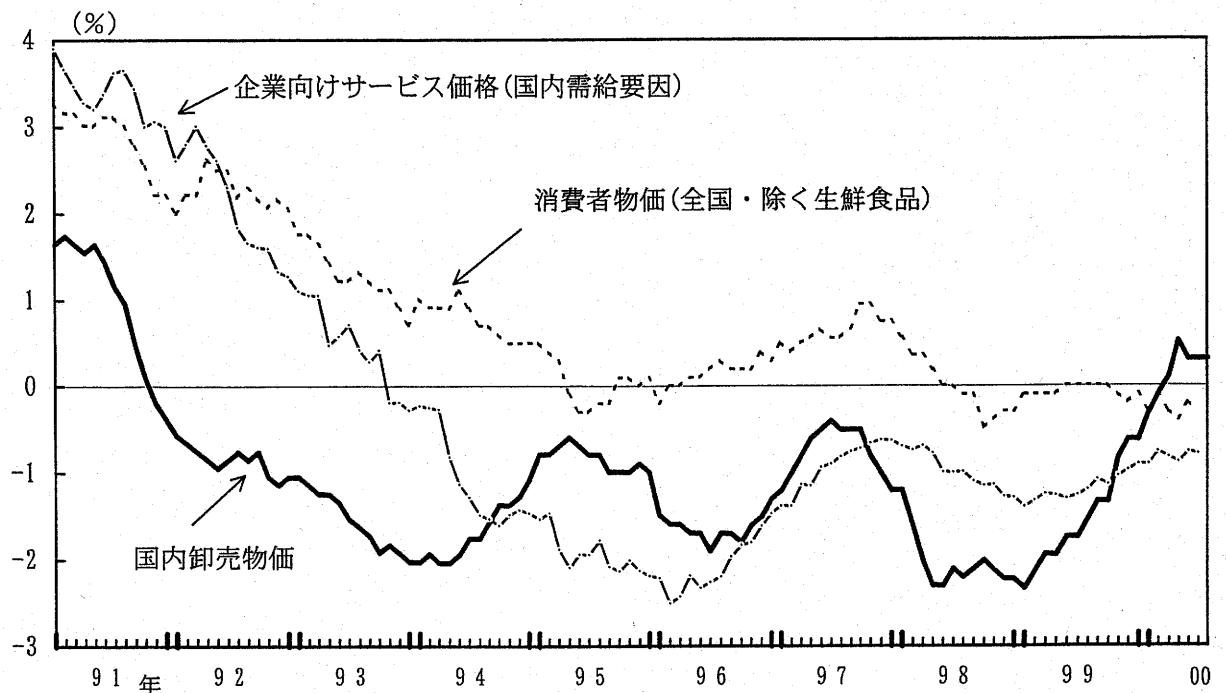
(資料) 労働省「職業安定業務統計」「毎月勤労統計」「雇用保険事業月報」、
総務庁「労働力調査」、帝国データバンク「全国企業倒産集計」

物 価

(1) 水準



(2) 前年比

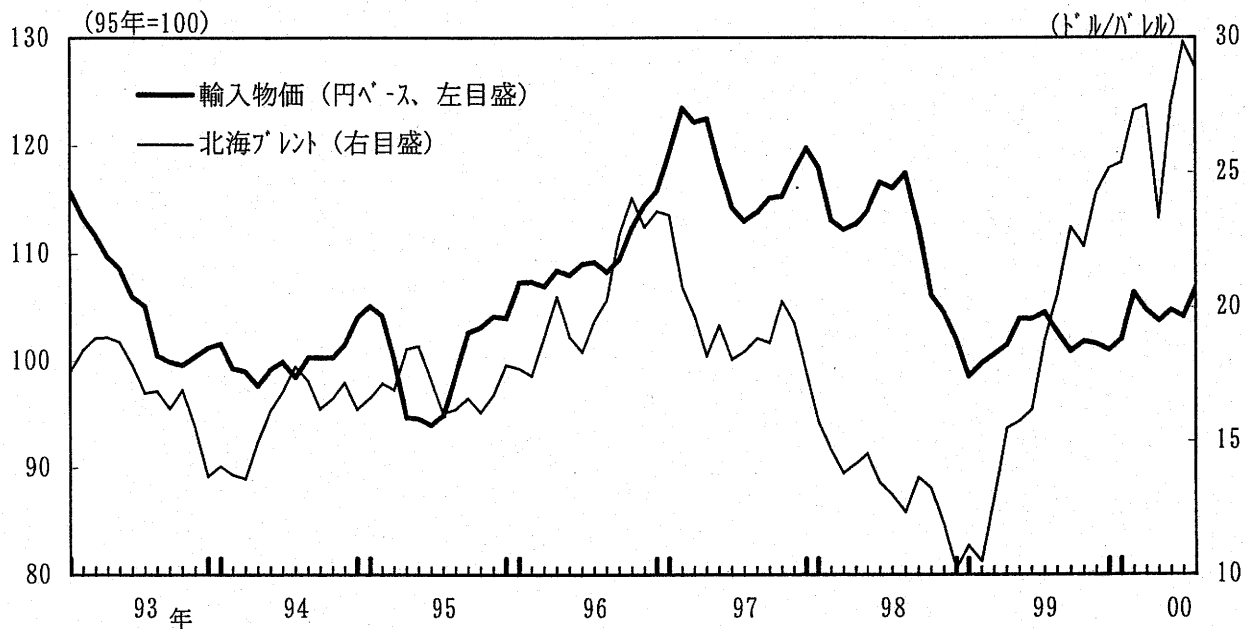


- (注) 1. (1)の消費者物価は、95年基準の季調済系列と90年基準の季調済系列とを、95年1月でリンクさせたもの。季節調整値はいずれも総務庁公表ベース。
2. 97/4月以降は、消費税率引き上げを調整したベース(課税品目のすべてについてフル転嫁されたと仮定して試算)。
3. 企業向けサービス価格(国内需給要因)については、後掲図表の注を参照。

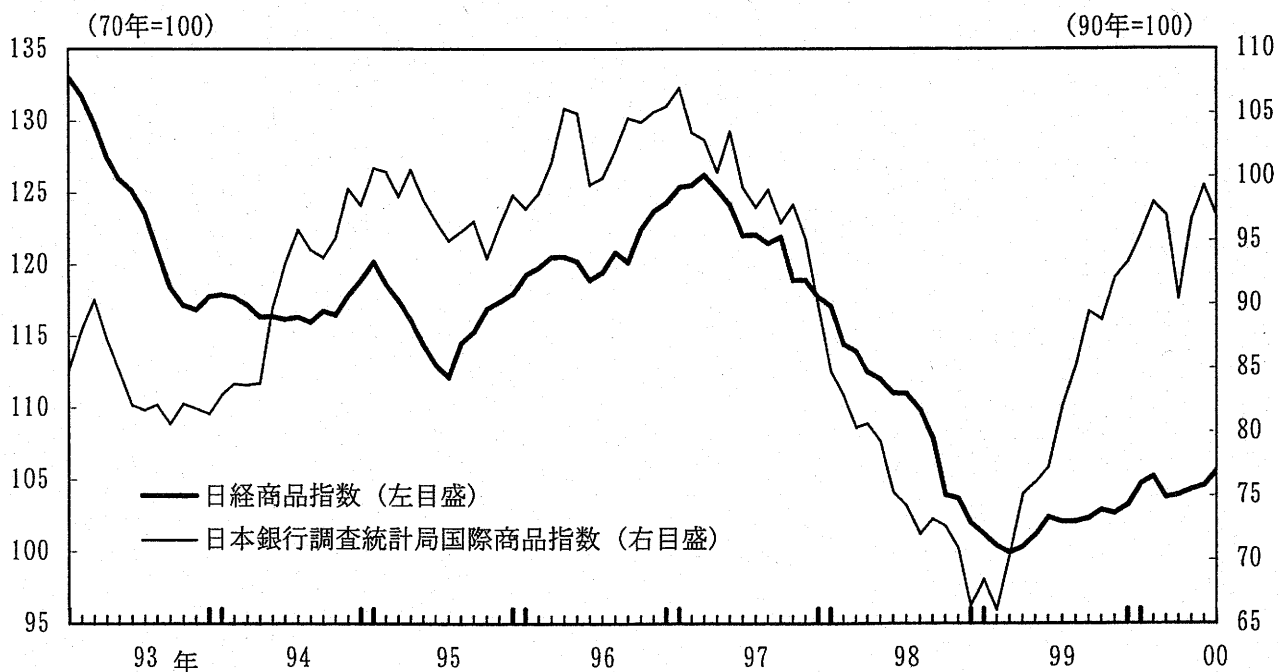
(資料) 総務庁「消費者物価指数」、日本銀行「卸売物価指数」「企業向けサービス価格指数」

輸入物価と商品市況

(1) 輸入物価 (円ベース)、原油市況



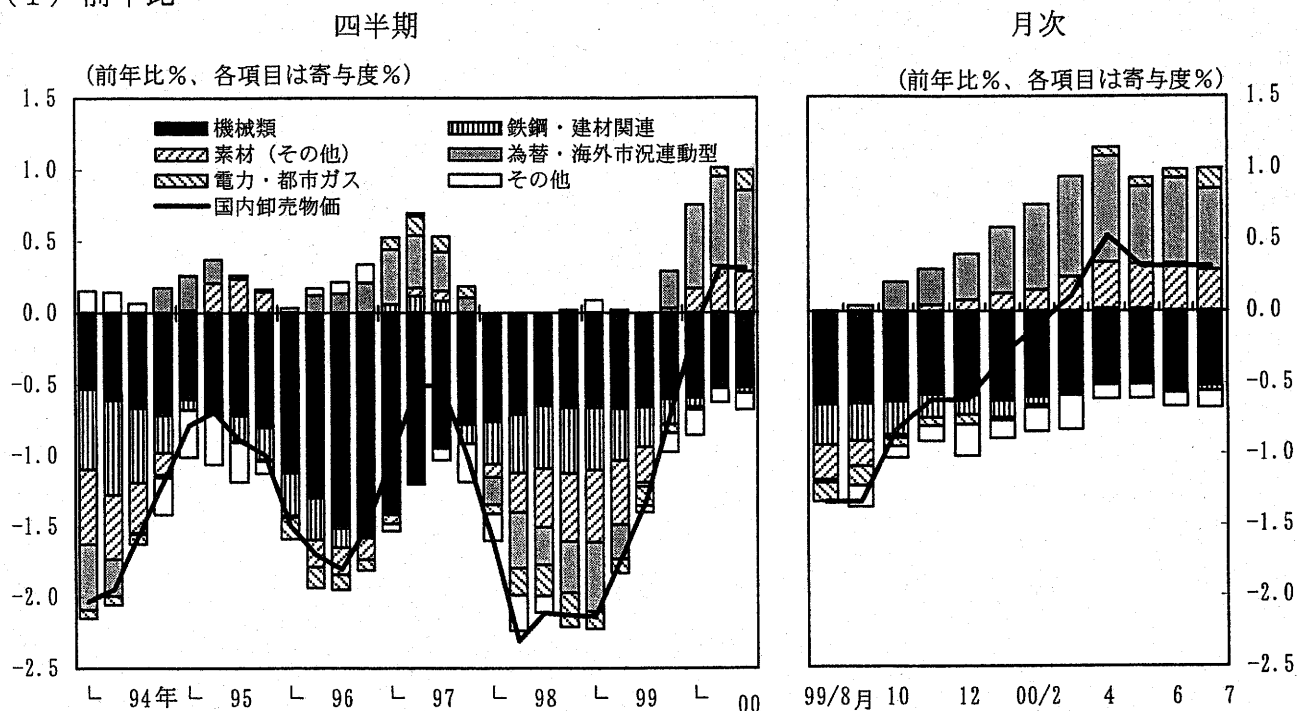
(2) 商品市況



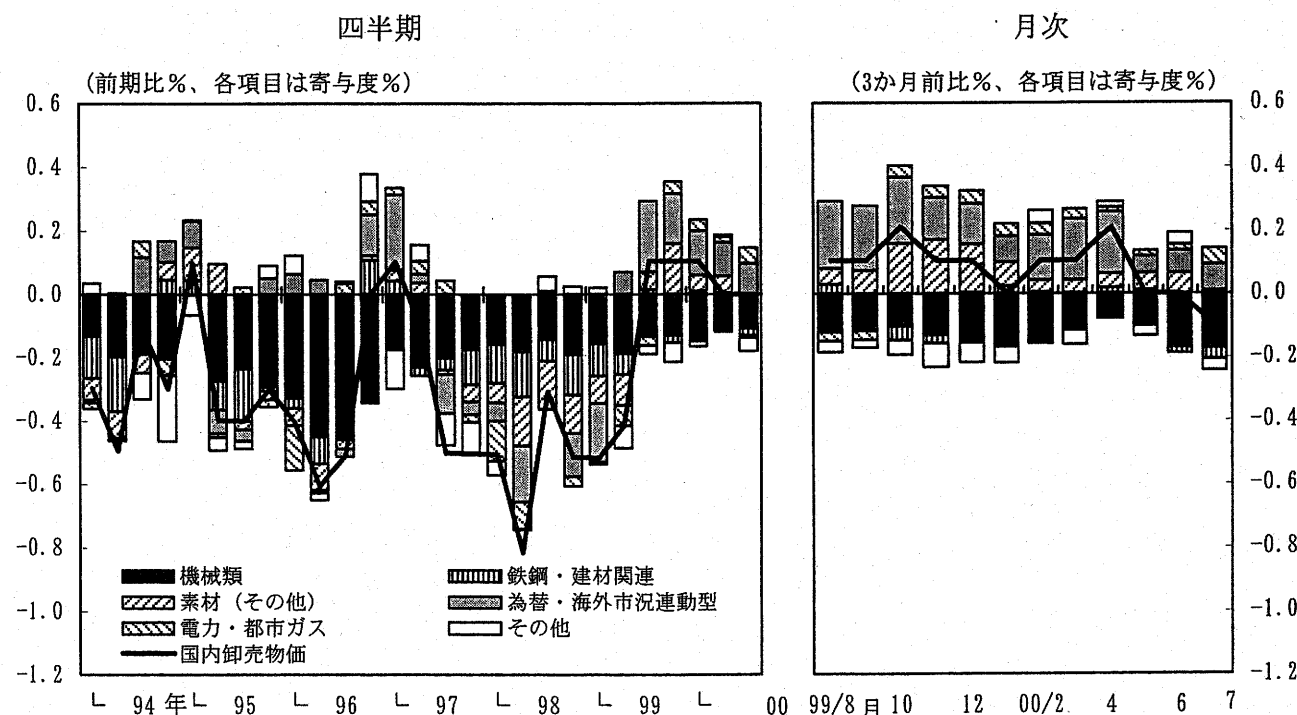
(資料) 日本銀行「卸売物価指数」「金融経済統計月報」「日本銀行調査月報」、
日本経済新聞社「日経主要商品価格指数」

国内卸売物価

(1) 前年比



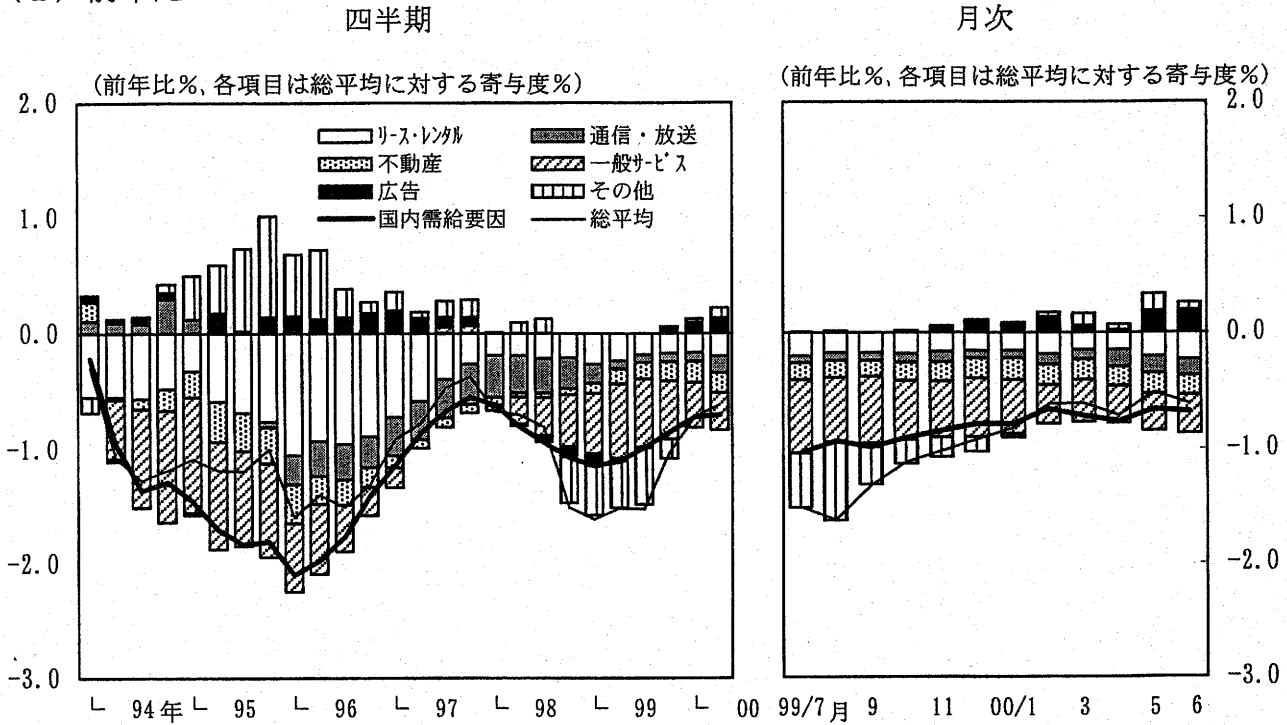
(2) 前期比、3か月前比 (夏季電力料金調整後)



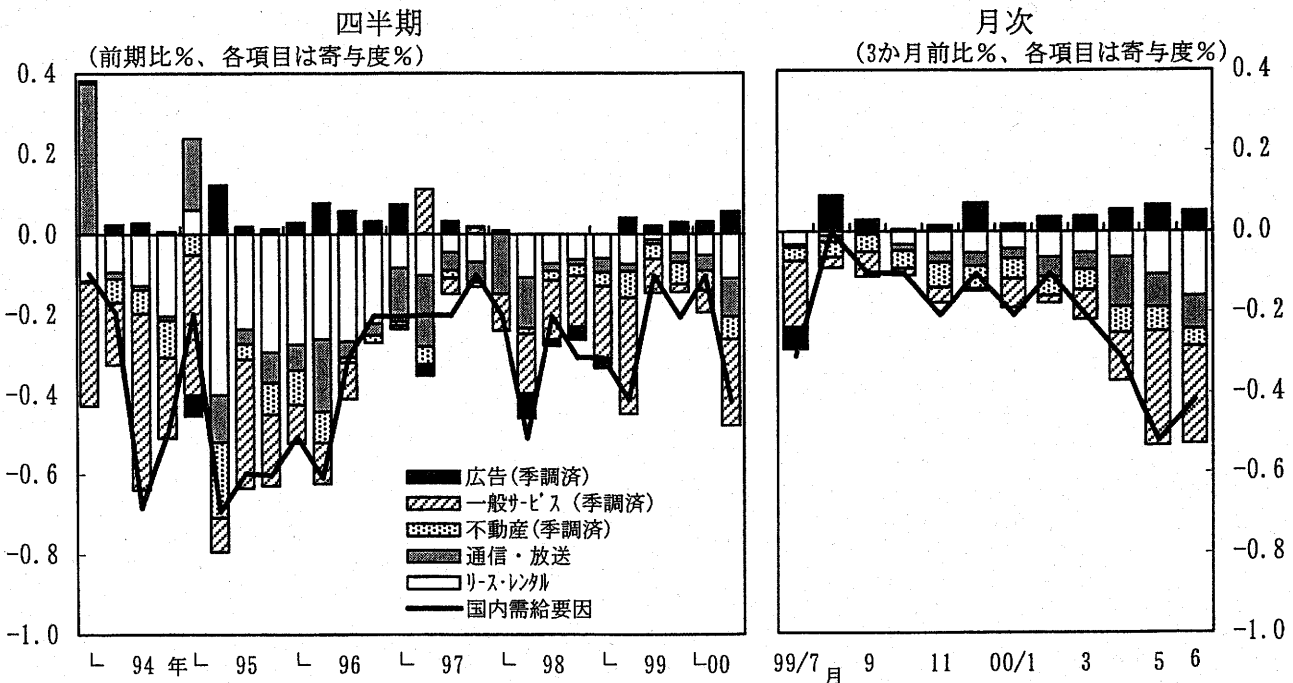
- (注) 1. 機械類: 電気機器、一般機器、輸送用機器、精密機器
 2. 鉄鋼・建材関連: 鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
 3. 素材(その他): 化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
 4. 為替・海外市況連動型: 石油・石炭製品、非鉄金属
 5. その他: 加工食品、その他工業製品、食料用農畜水産物、非食料農林産物、鉱産物、水道
 6. (2)の電力は、毎年7～9月にかけて適用されている夏季割り増しの影響(国内卸売物価に対する寄与度は0.2%程度)を除くベース。
 7. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除くベース(課税品目のすべてについてフル転嫁されたと仮定して試算)。
 8. 2000年3Qのデータは、2000/7月の値を利用して算出。

企業向けサービス価格

(1) 前年比



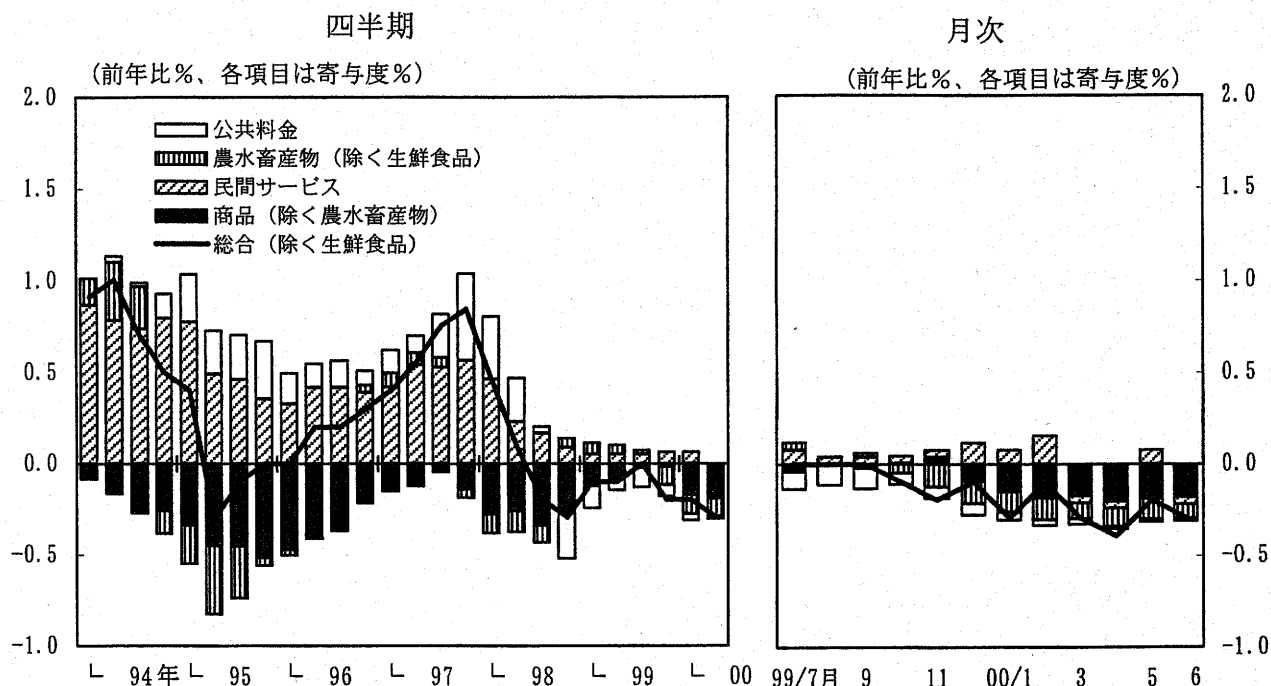
(2) 前期比、3か月前比 (国内需給要因)



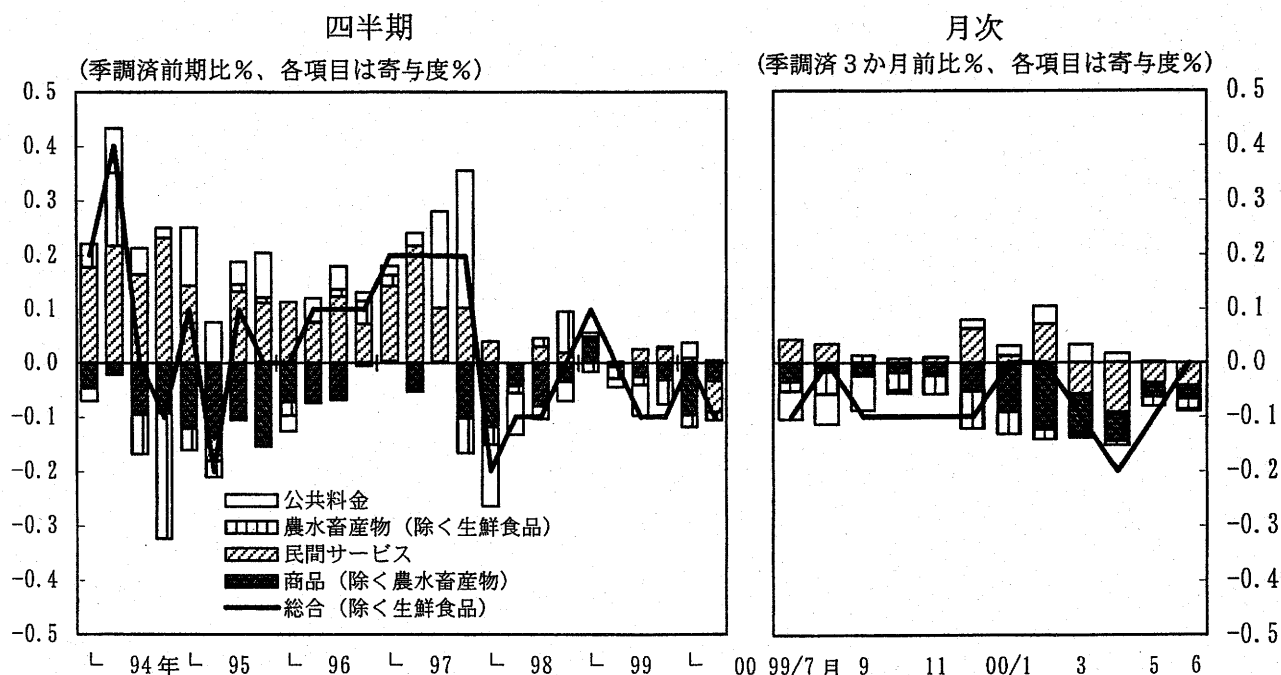
- (注) 1. 国内需給要因とは、月々の価格の動向が主に国内民間需要の動向を反映しているとみられる品目の価格。具体的には、CSP I 総平均から、①規制料金 (自動車保険<自賠責>、鉄道旅客、バス、タクシー、国内航空旅客、有料道路、郵便、下水道)、②海外要因 (外洋貨物、国際航空貨物、国際航空旅客)、③単月の振れが大きく、短期的な需給動向を反映しているとは必ずしも言い難い証券関連手数料 (企業が社債発行に伴い銀行に支払う事務代理手数料等<証券引受事務手数料等は含まない>)を除いたもの。
2. 一般サービスは、国内需給要因から、広告、不動産、リース・レンタル、通信・放送を差し引いたもの。具体的には、金融・保険、運輸、情報サービス、建物サービス、労働者派遣、機械修理等。
3. 3か月前比は、広告中のTVCM、一般サービス中の普通倉庫、不動産中の店舗について、X-12-ARIMA (βバージョン) による季節調整を施した上で計算。同計数は毎月季節調整替えを行う関係から、過去に溯って毎月改訂される。
4. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除くベース (課税品目のすべてについてフル転嫁されたと仮定して試算)。

消費者物価

(1) 前年比



(2) 前期比、3か月前比

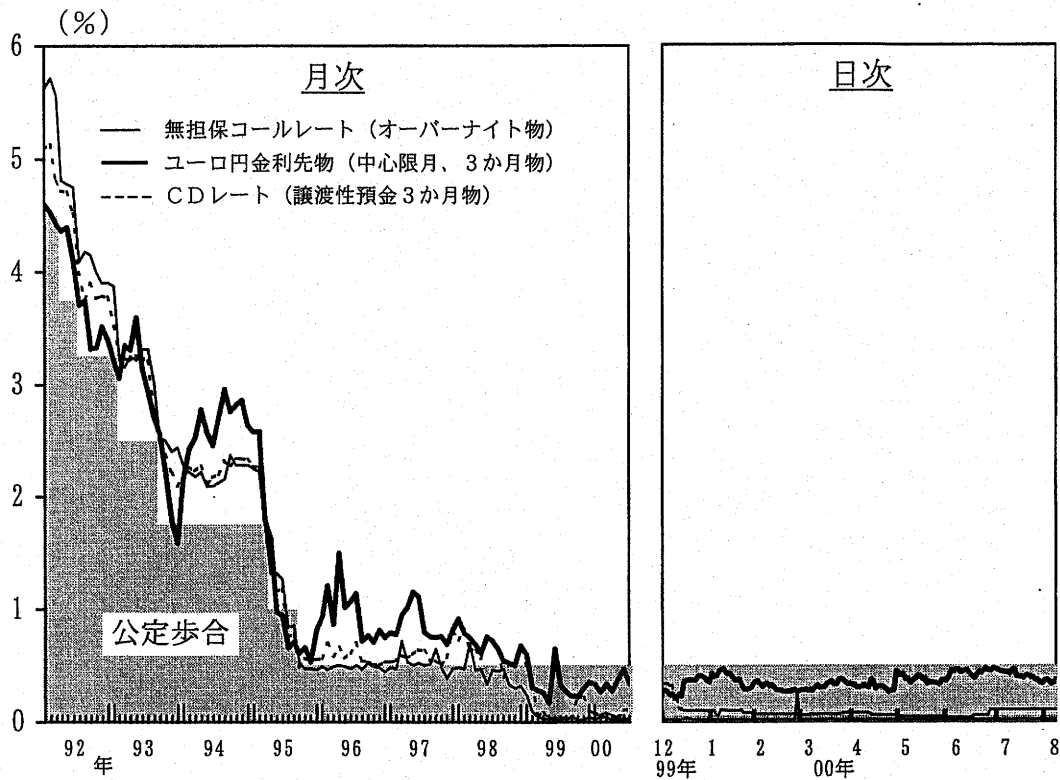


- (注) 1. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除くベース (課税品目のすべてについてフル転嫁されたと仮定して試算)。
2. 3か月前比は、X-12-ARIMA (βバージョン) による季節調整値。同計数は毎月季節調整替えを行う関係から、過去に溯って毎月改訂される。なお、合計と項目別の積み上げが完全に一致しないのは、季節調整の誤差による。

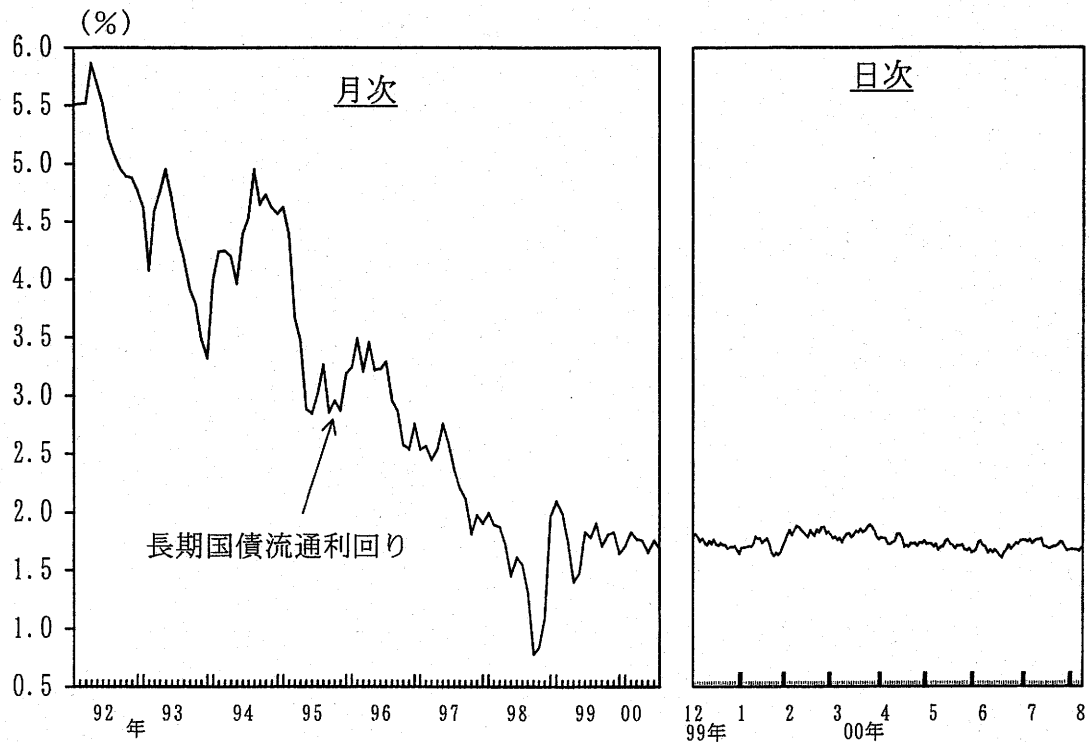
(資料) 総務庁「消費者物価指数」

市場金利等

(1) 短期



(2) 長期

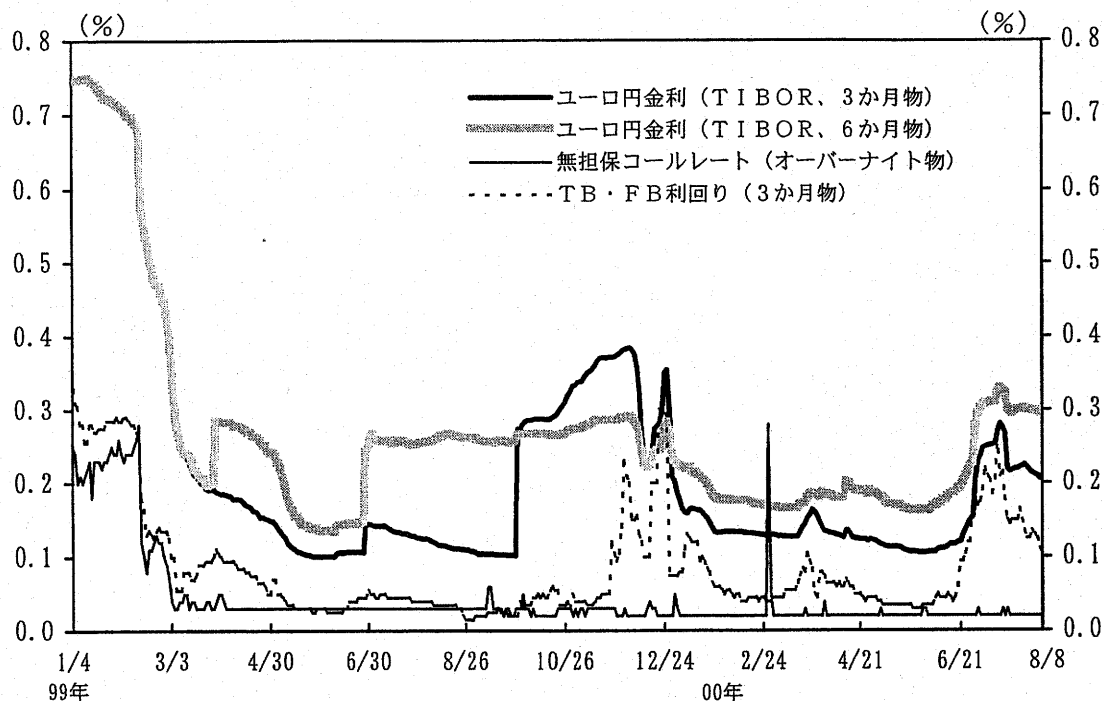


(注) 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。

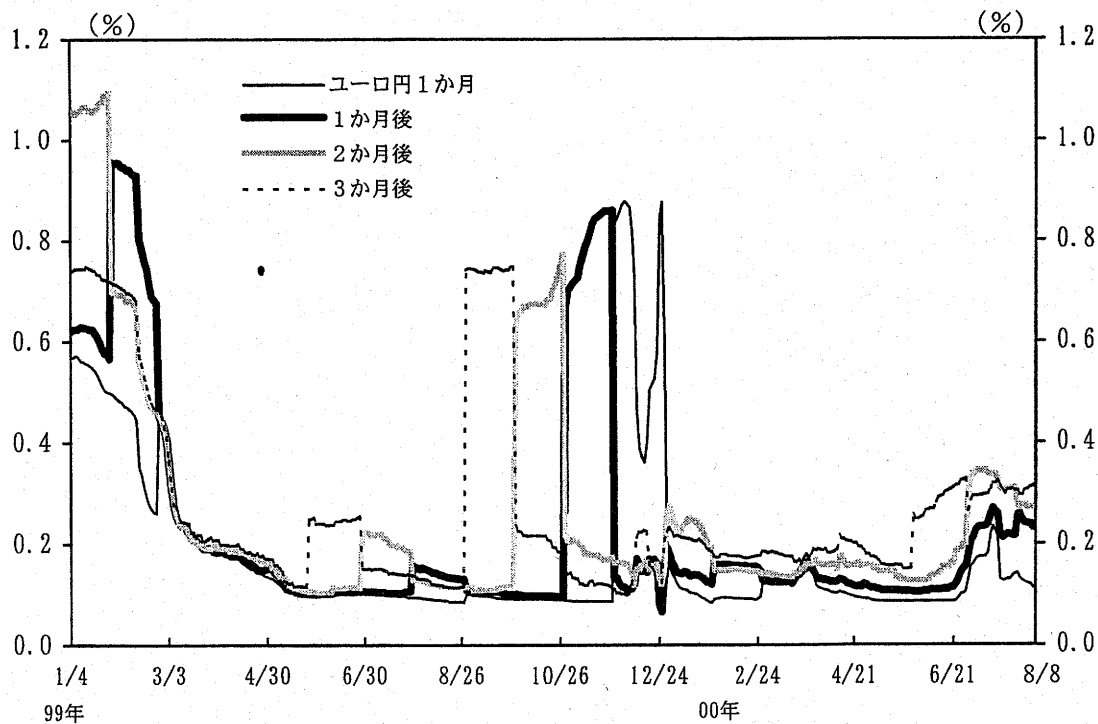
(資料) 日本銀行、東京金融先物取引所、日本相互証券

短期金融市場

(1) ターム物金利



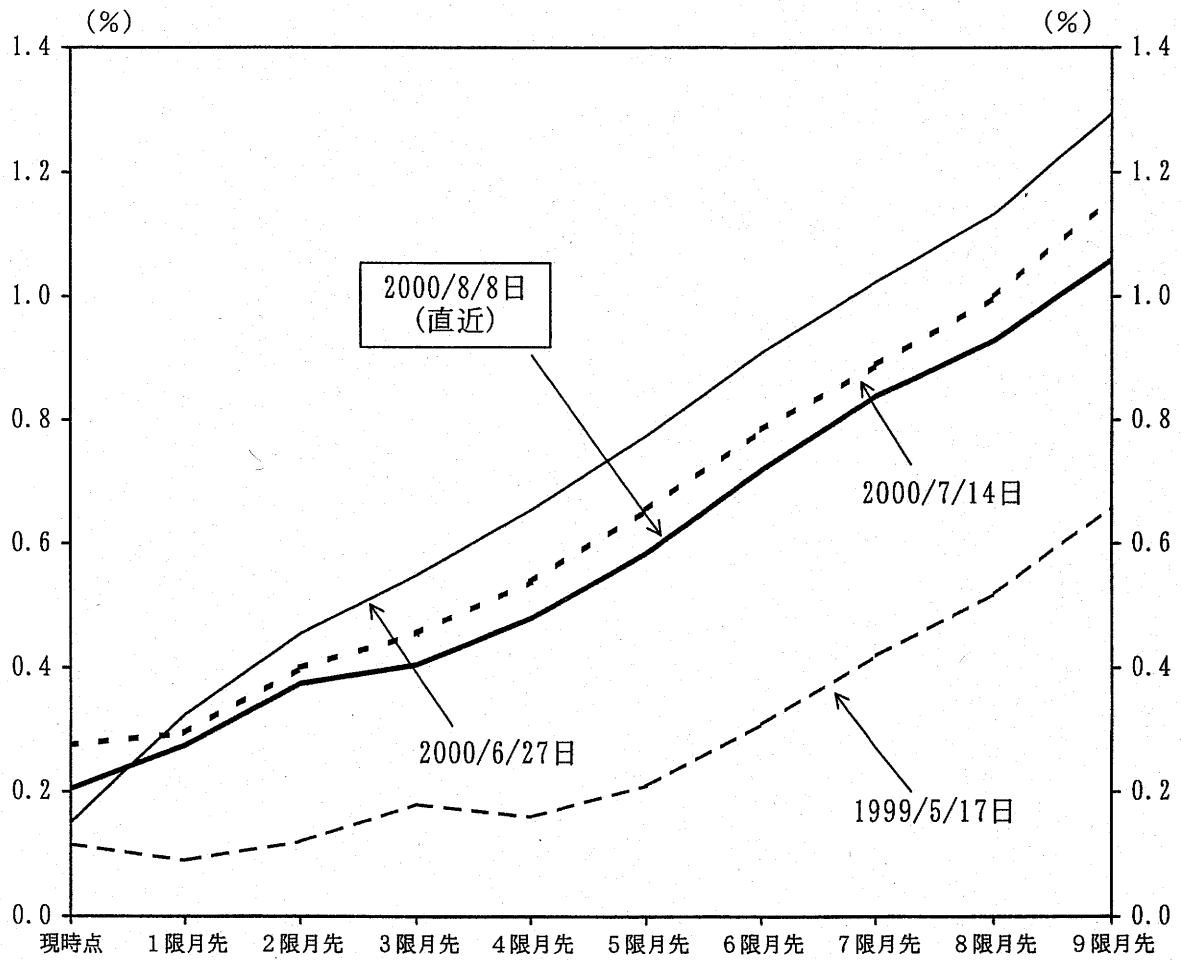
(2) 1か月物インプライド・フォワード・レート



(注) ユーロ円金利 (TIBOR) から算出。

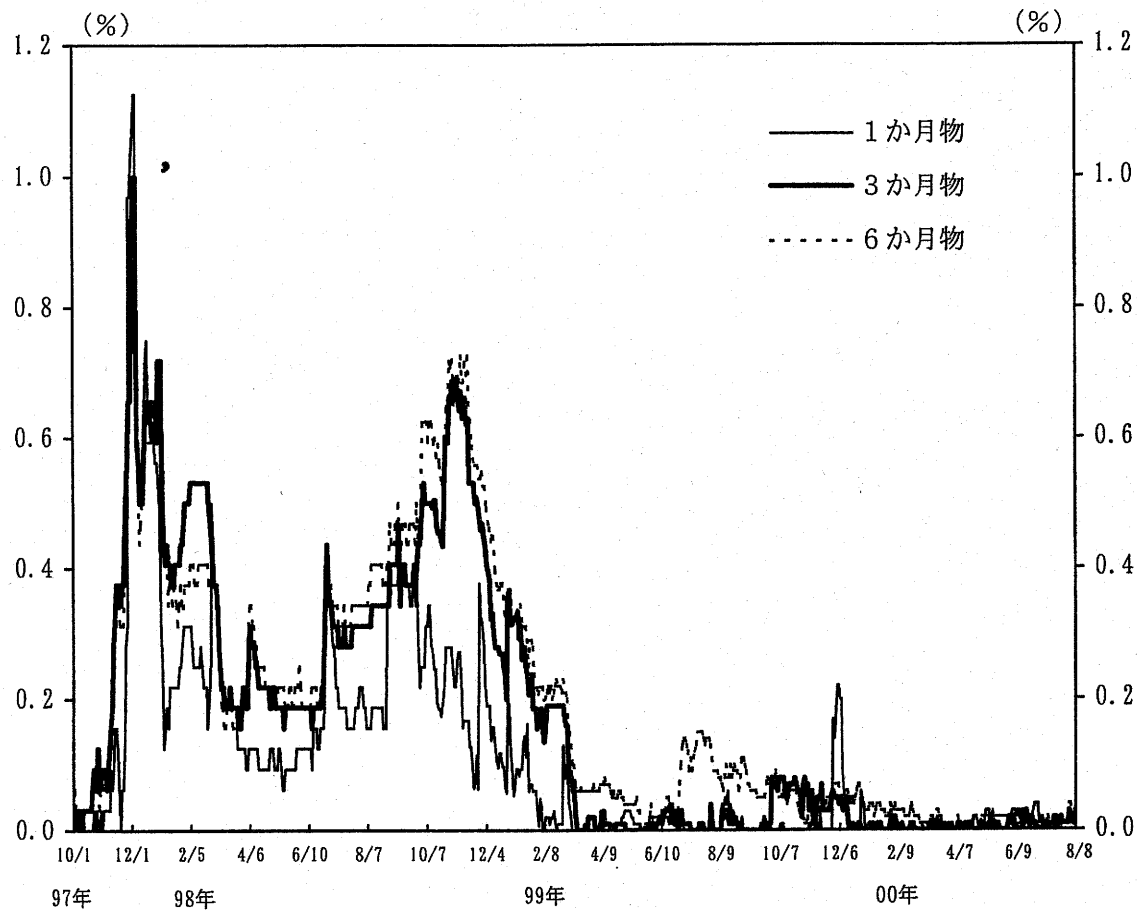
(資料) 日本銀行、全国銀行協会、日本相互証券

ユーロ円金利先物 (3か月)



(資料) 東京金融先物取引所

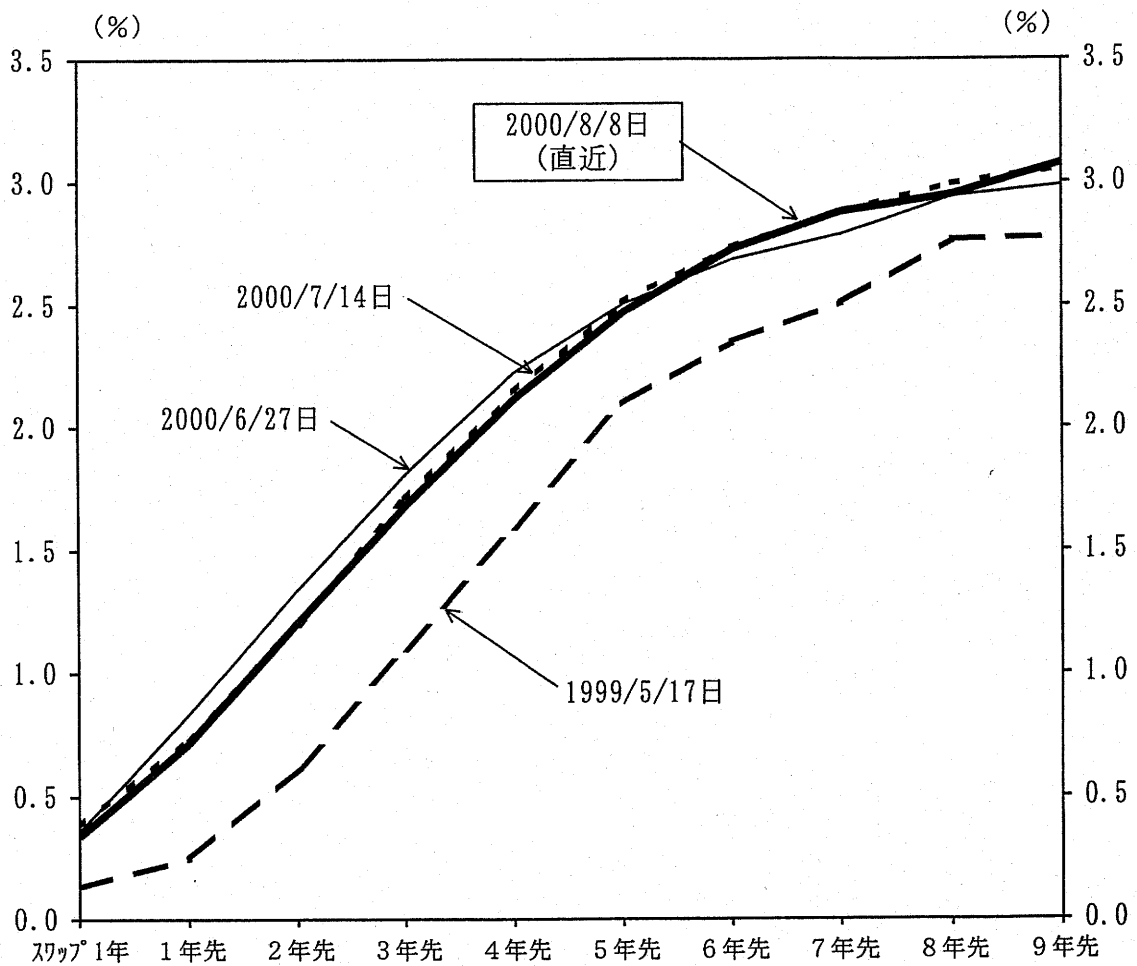
ジャパン・プレミアム



(注) ジャパン・プレミアム=東京三菱銀行オファーレート-バークレイズ銀行オファーレート

(資料) British Bankers' Association

長期金利の期間別分解



(注) 1年物インプライド・フォワード・レート。円-円スワップ・レートから算出。

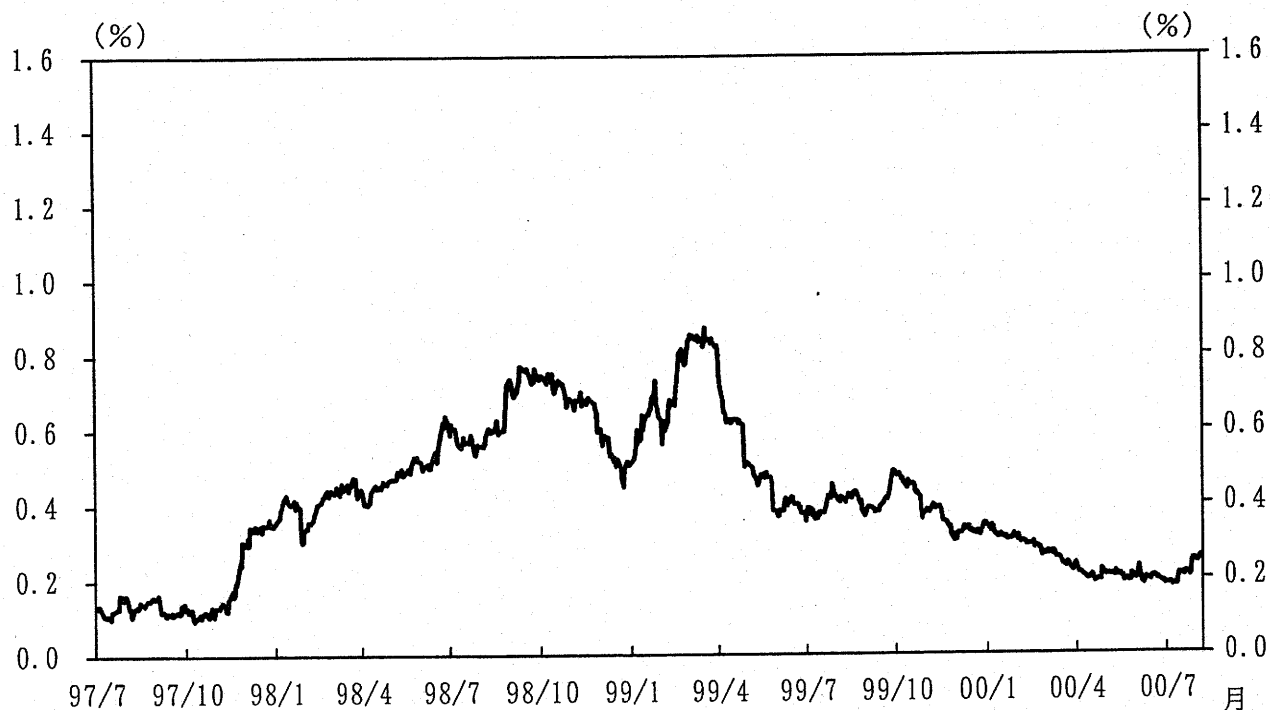
(資料) 共同通信社

金融債流通利回り

(1) 流通利回り



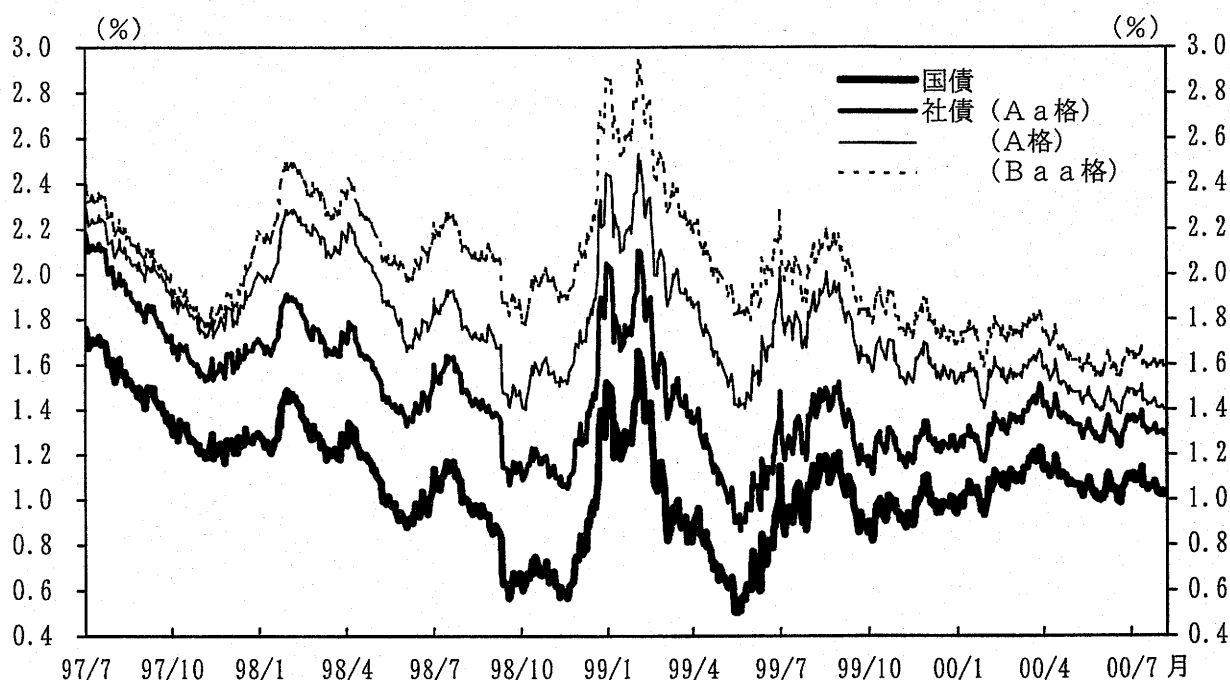
(2) 利回り格差 (新発興銀債流通利回り - 国債流通利回り)



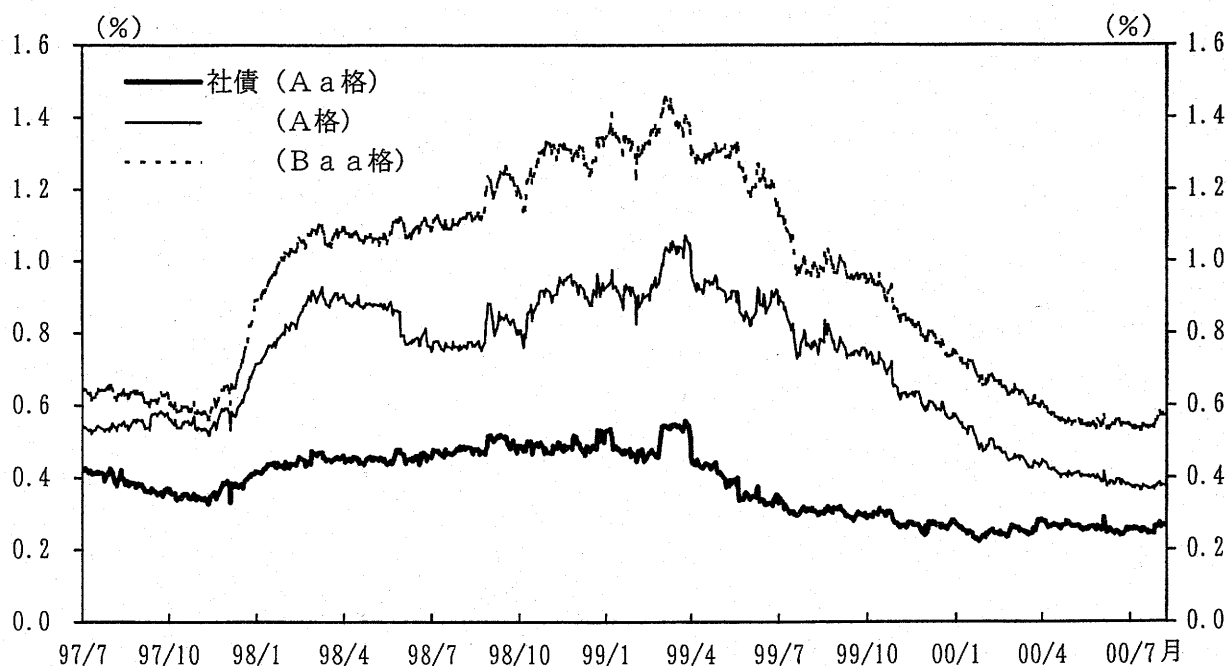
(資料) 日本証券業協会「公社債店頭(基準)気配表」

社債流通利回り

(1) 流通利回り



(2) 利回り格差 (社債流通利回り - 国債流通利回り)



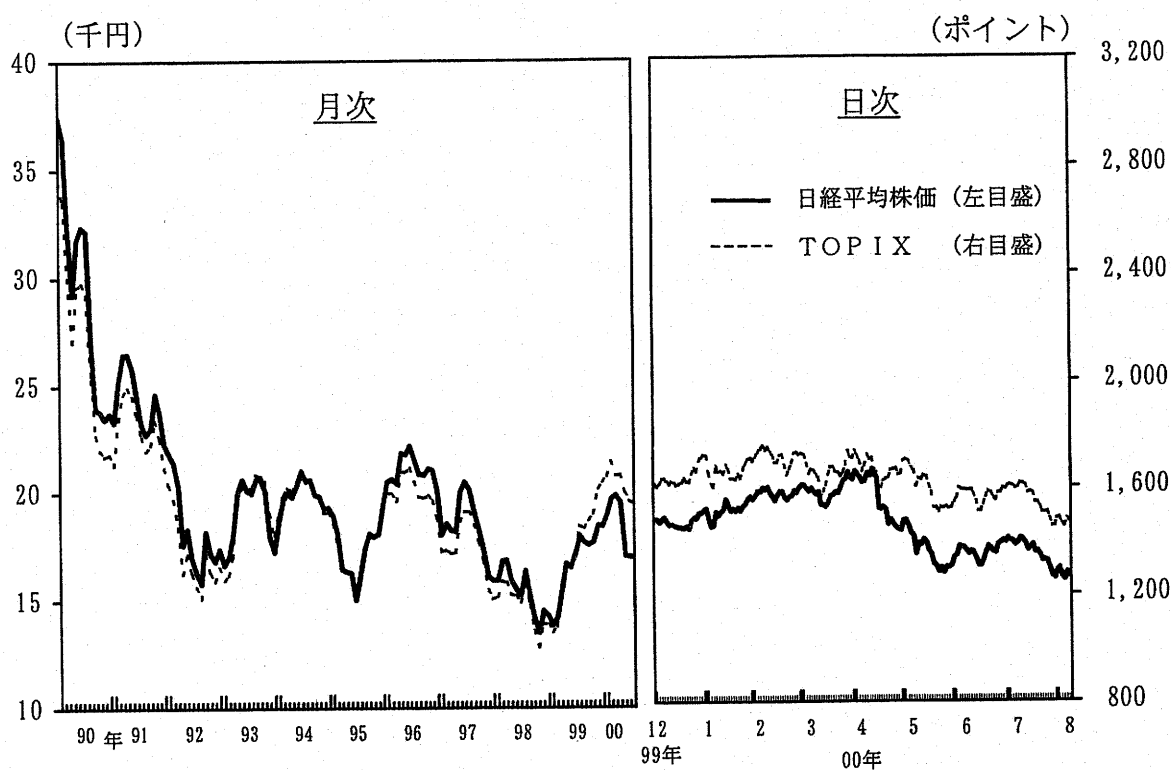
(注) 1. 国債、社債とも残存年数5年。

2. 社債利回りは日本証券業協会公表の気配値、格付けはムーディーズによる。

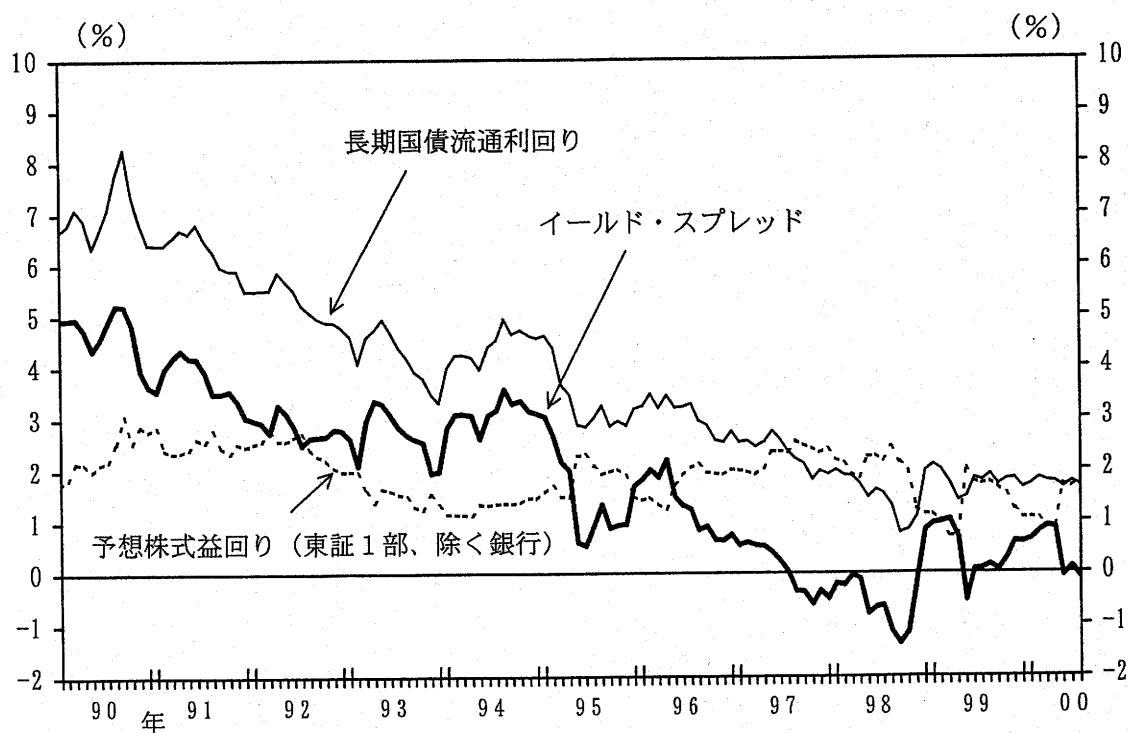
(資料) 日本証券業協会「公社債店頭(基準)気配表」

株 価

(1) 株式市況



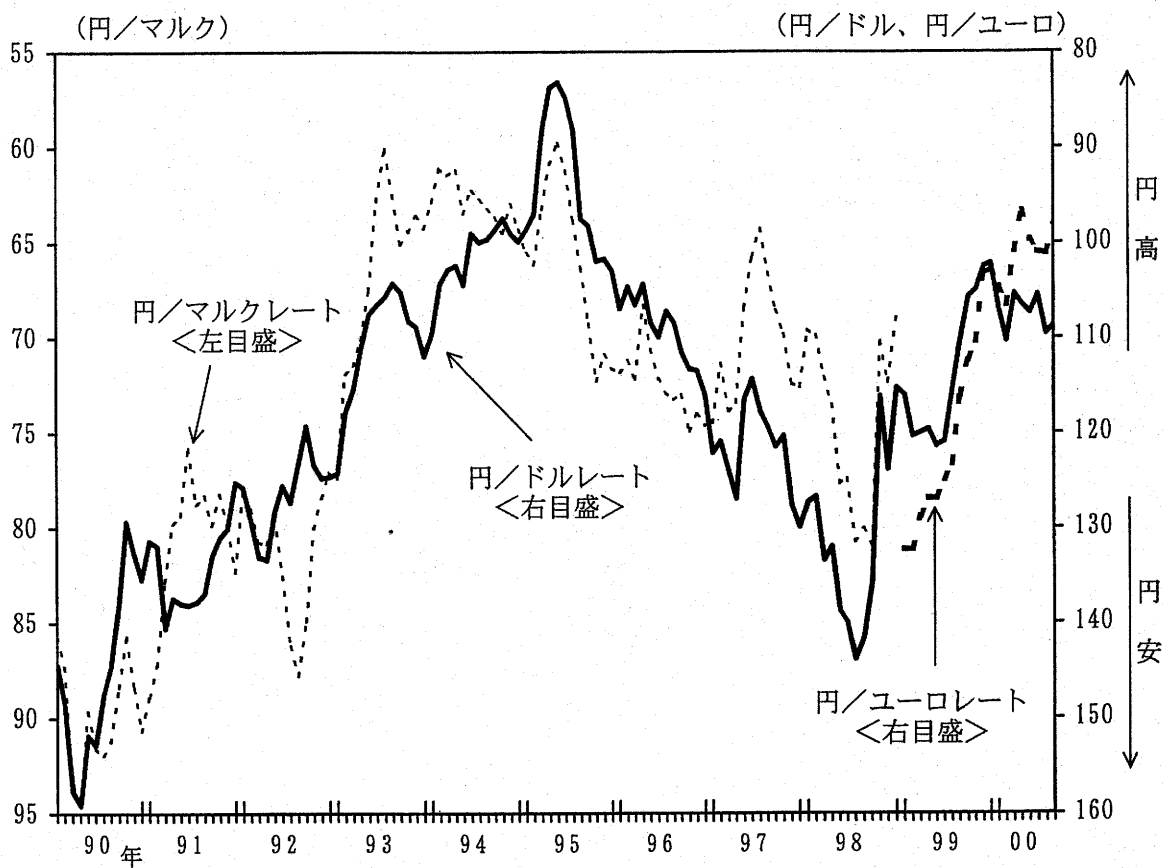
(2) イールド・スプレッド



- (注) 1. イールド・スプレッド = 長期国債流通利回り - 予想株式益回り
予想株式益回り = $1 / \text{予想PER}$
2. 予想株式益回りは大和総研調べ。
3. 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。

(資料) 日本経済新聞社「日本経済新聞」、大和総研「大和投資資料」

為替レート

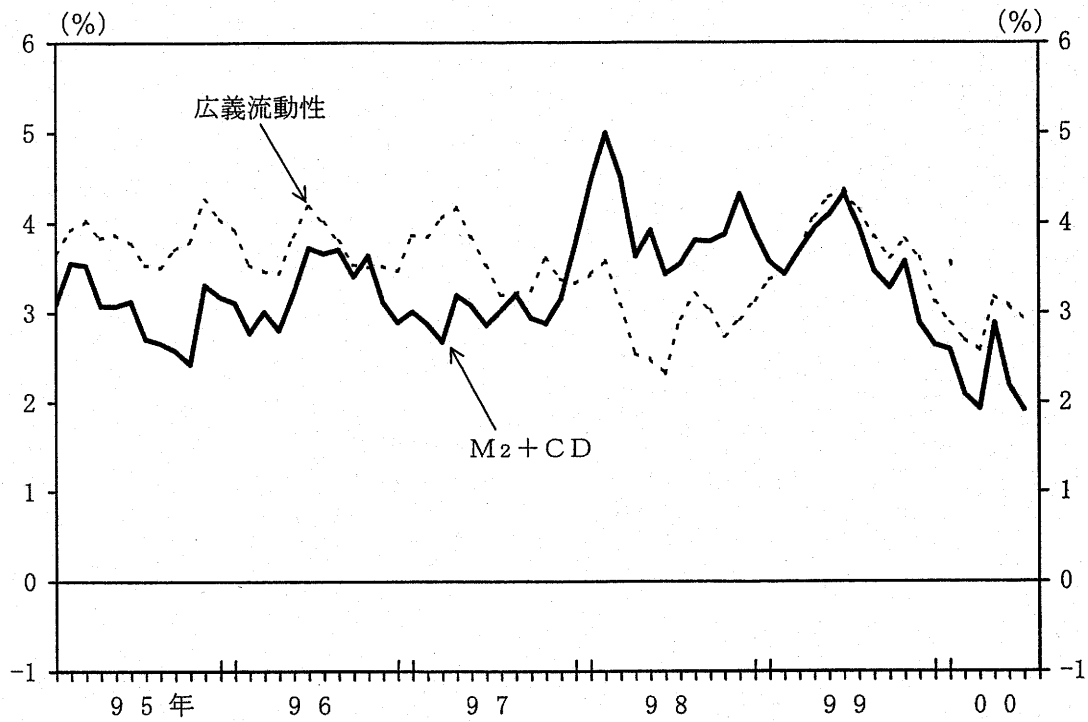


(注) 月末値。ただし、2000年8月は8月8日計数。

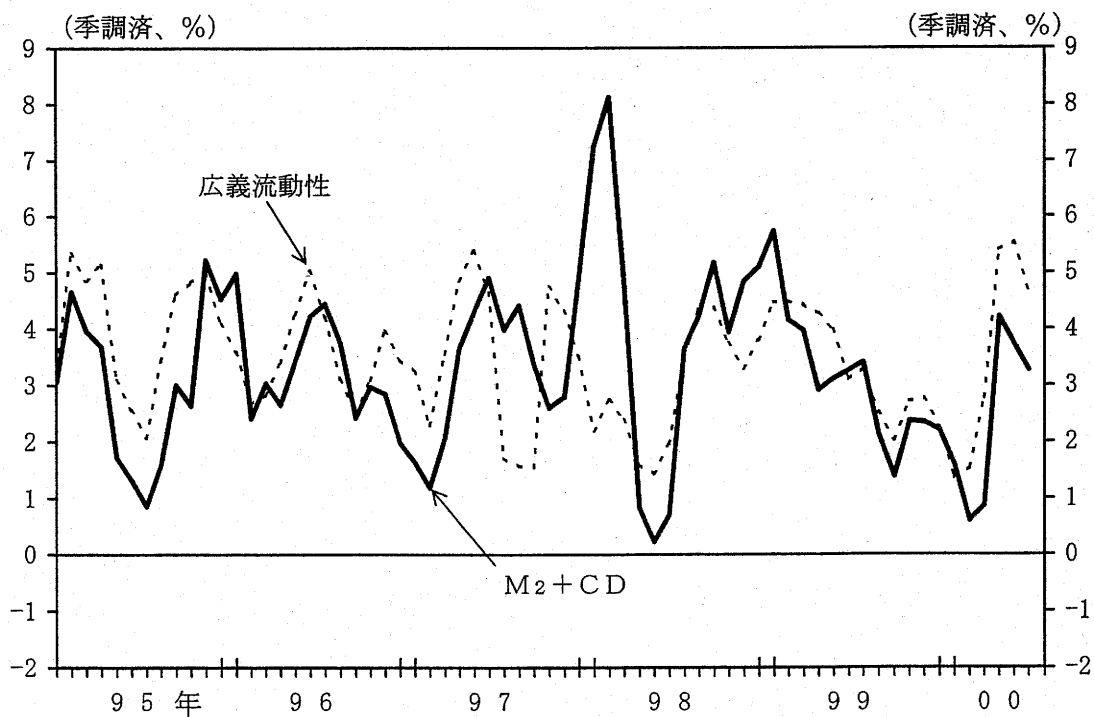
(資料) 日本銀行

マネーサプライ (M₂ + CD、広義流動性)

(1) 前年比



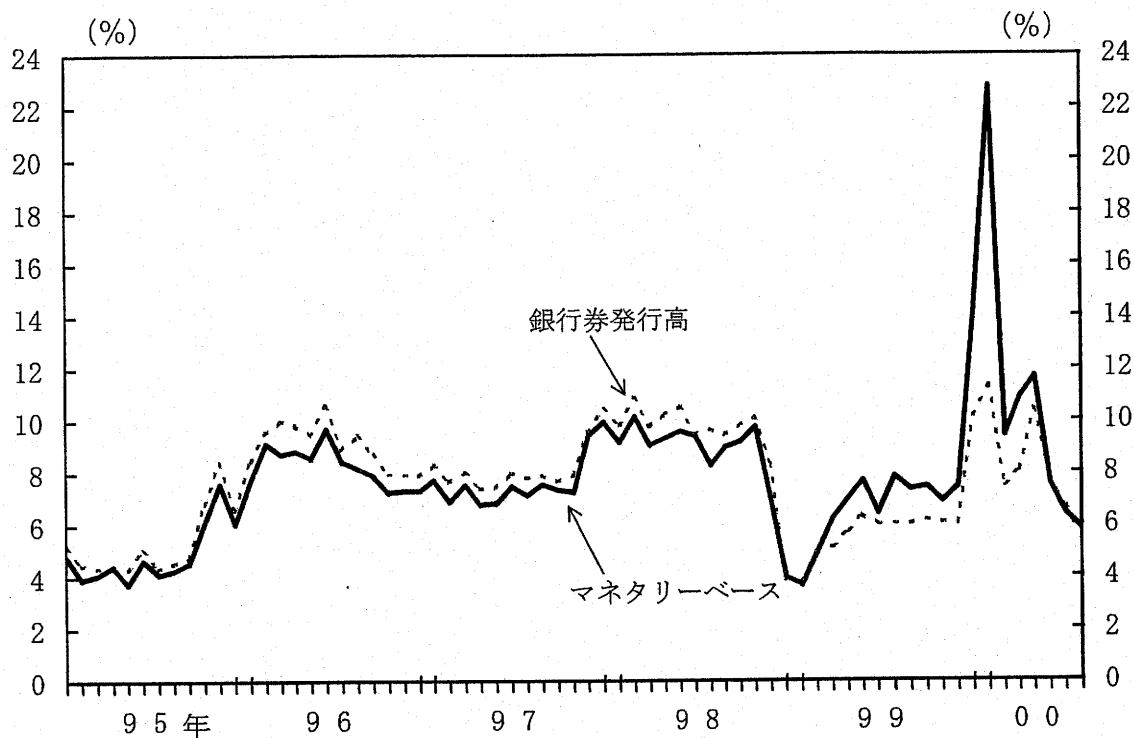
(2) 3か月前比年率



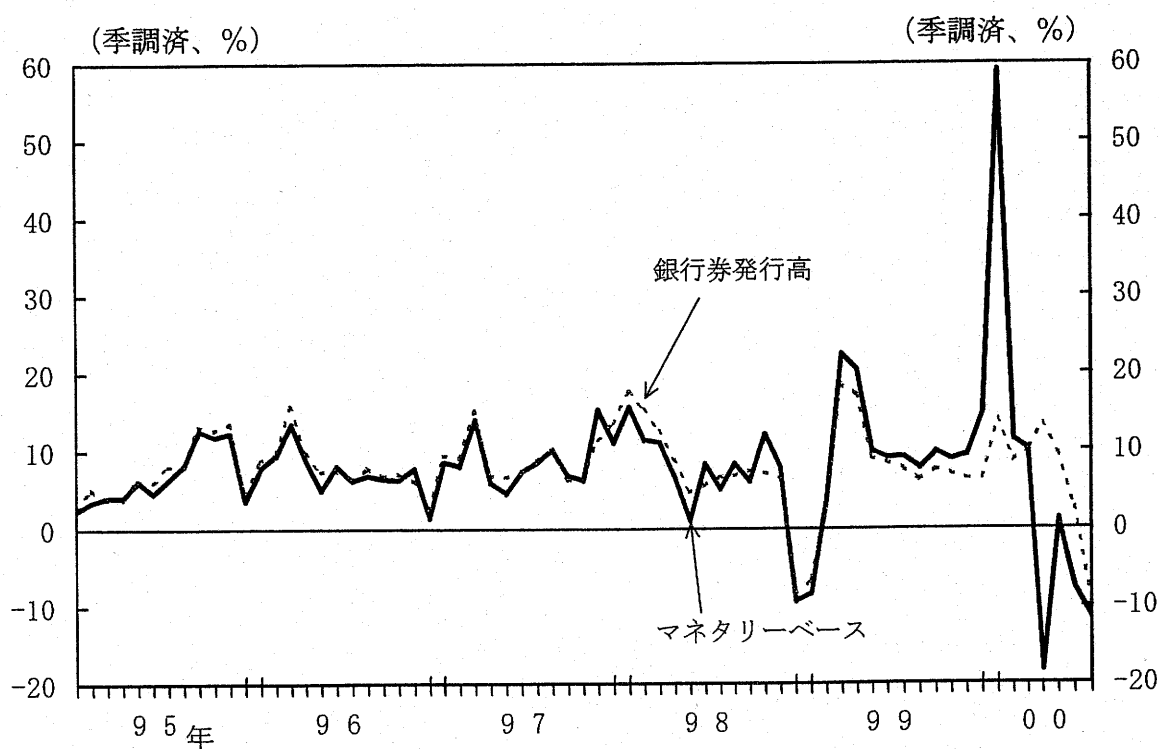
(資料) 日本銀行

マネタリーベース

(1) 前年比



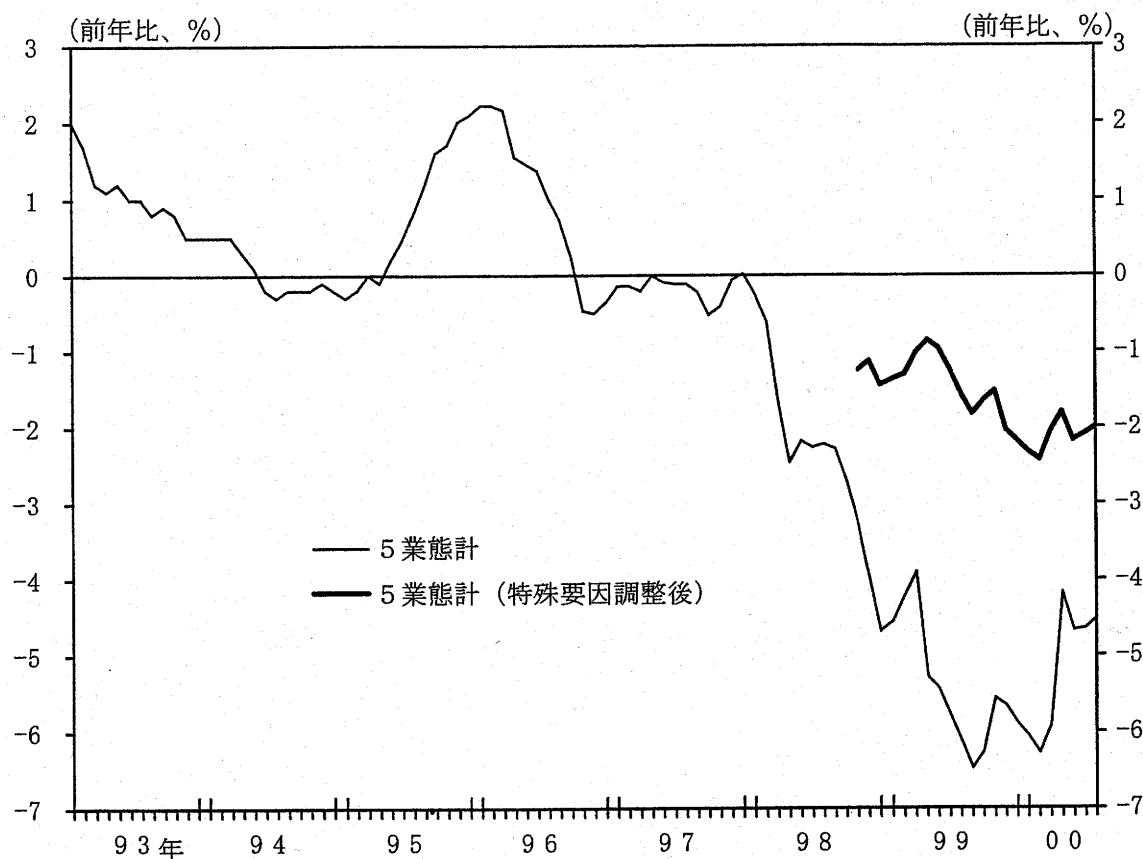
(2) 3か月前比年率



(注) マネタリーベース=流通現金(銀行券および貨幣<ともに金融機関保有分を含む>)+日銀当座預金
なお、97年3月以前は、流通現金(銀行券および貨幣<ともに金融機関保有分を含む>)+準備預金

(資料) 日本銀行

民間銀行貸出

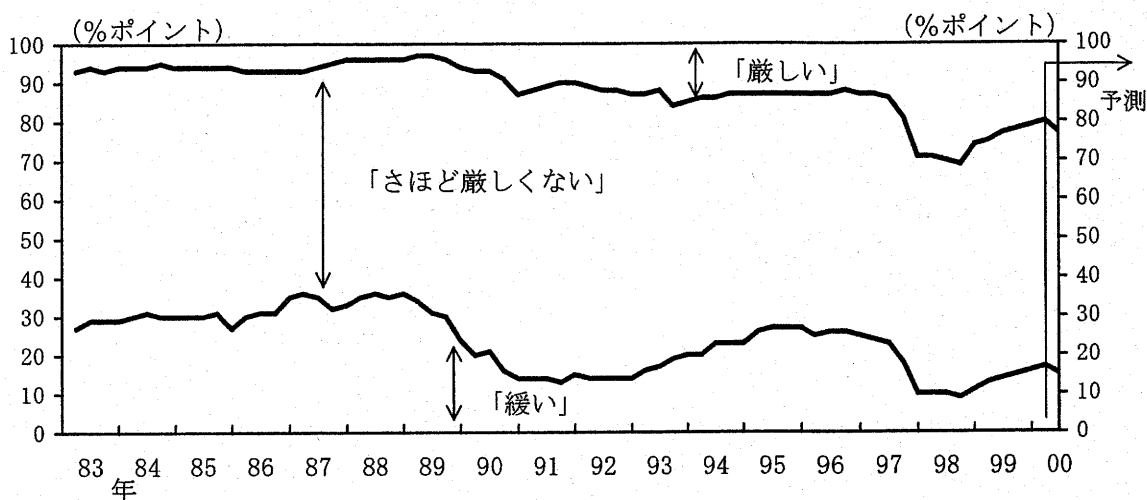


- (注) 1. 総貸出平残ベース。
 2. 5業態は、都市銀行、長期信用銀行、信託銀行、地方銀行、地方銀行Ⅱ。
 3. 特殊要因調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構向け貸出への振り替わり分を調整したもの。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持つてみる必要がある。

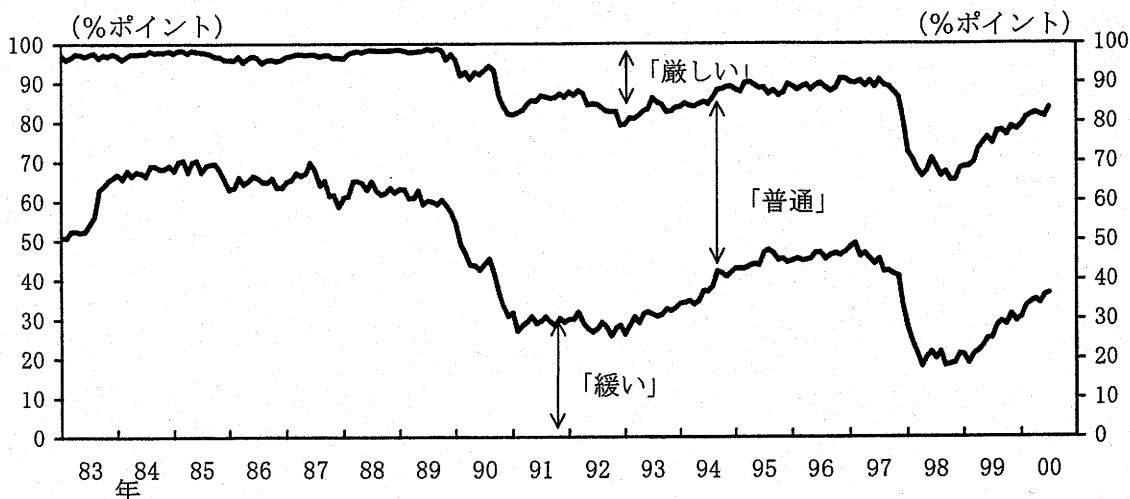
(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」

中小企業からみた金融機関の貸出態度

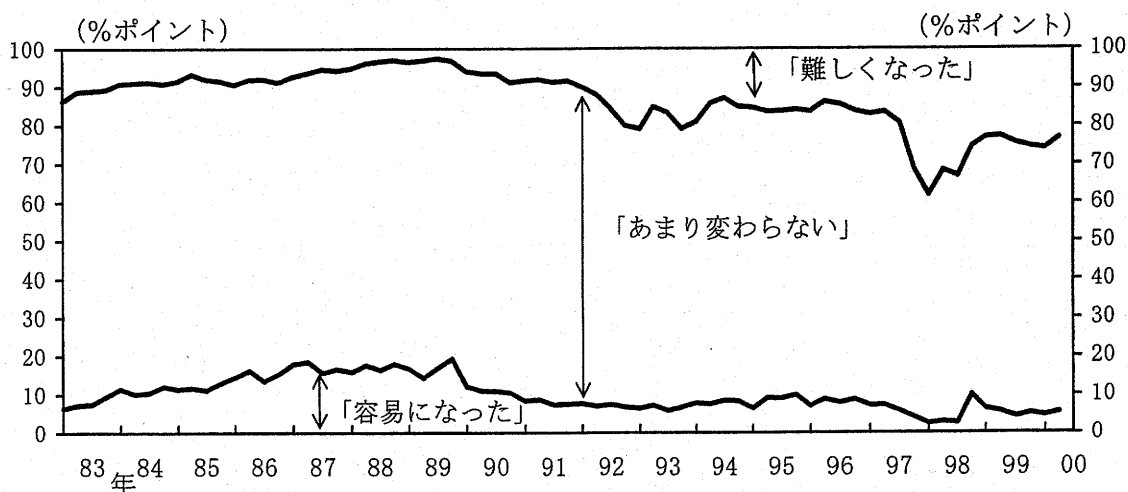
(1) 日本銀行・企業短期経済観測調査 (直近調査時点 6 月)



(2) 中小企業金融公庫・中小企業景況調査 (直近調査時点 7 月中旬)



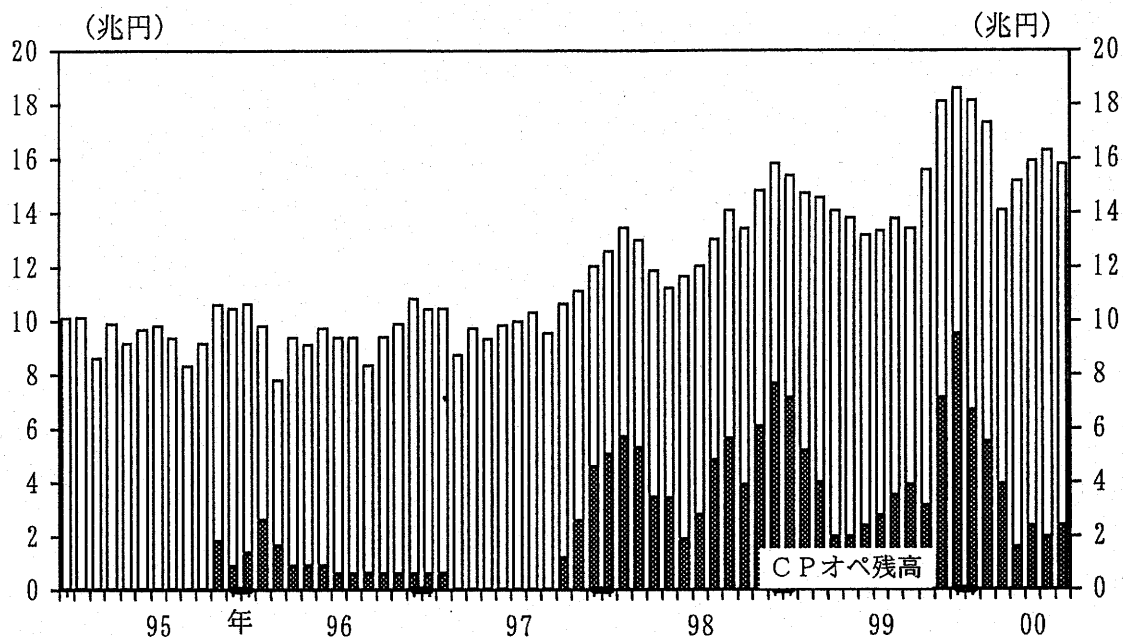
(3) 国民生活金融公庫・全国小企業動向調査 (直近調査時点 6 月中旬)



(資料) 日本銀行「企業短期経済観測調査」、中小企業金融公庫「中小企業景況調査」、国民生活金融公庫「全国小企業動向調査」

資本市場調達

(1) CP発行残高(未残)

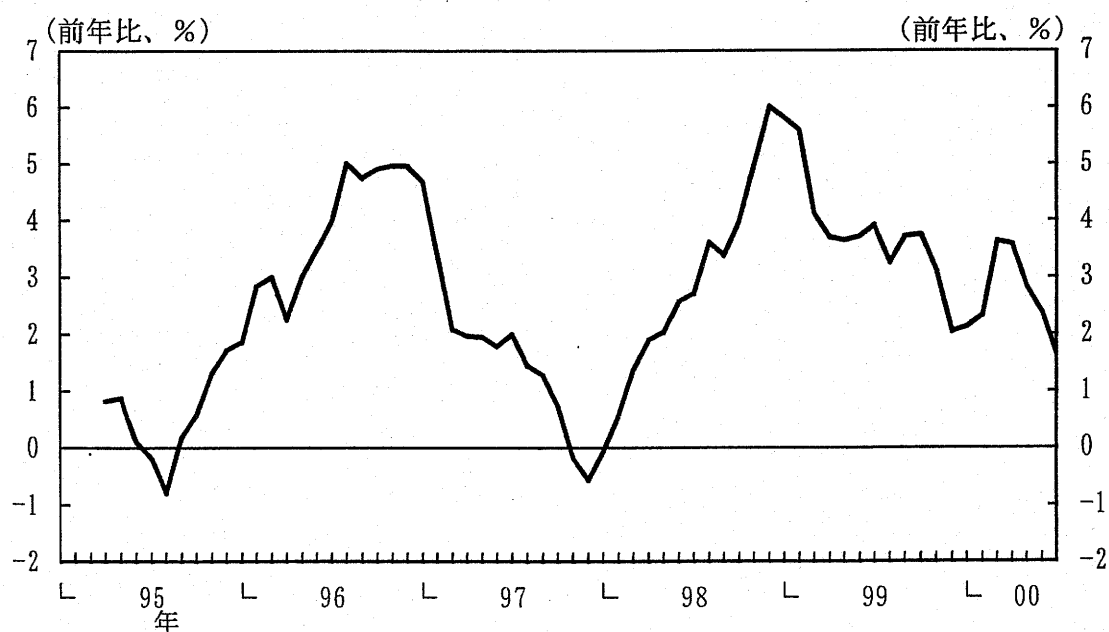


(注) 1. 日本銀行と当座取引のある銀行・証券会社の引受けによるもの。
2. 銀行CPを含まない。

(2) 社債発行額

	(億円)					
	2000/2月	3月	4月	5月	6月	7月
発行額	12,285	8,290	6,324	5,290	9,245	3,594
(前年)	(10,706)	(11,556)	(8,807)	(10,688)	(14,923)	(10,358)

(3) 社債発行残高(未残前年比)

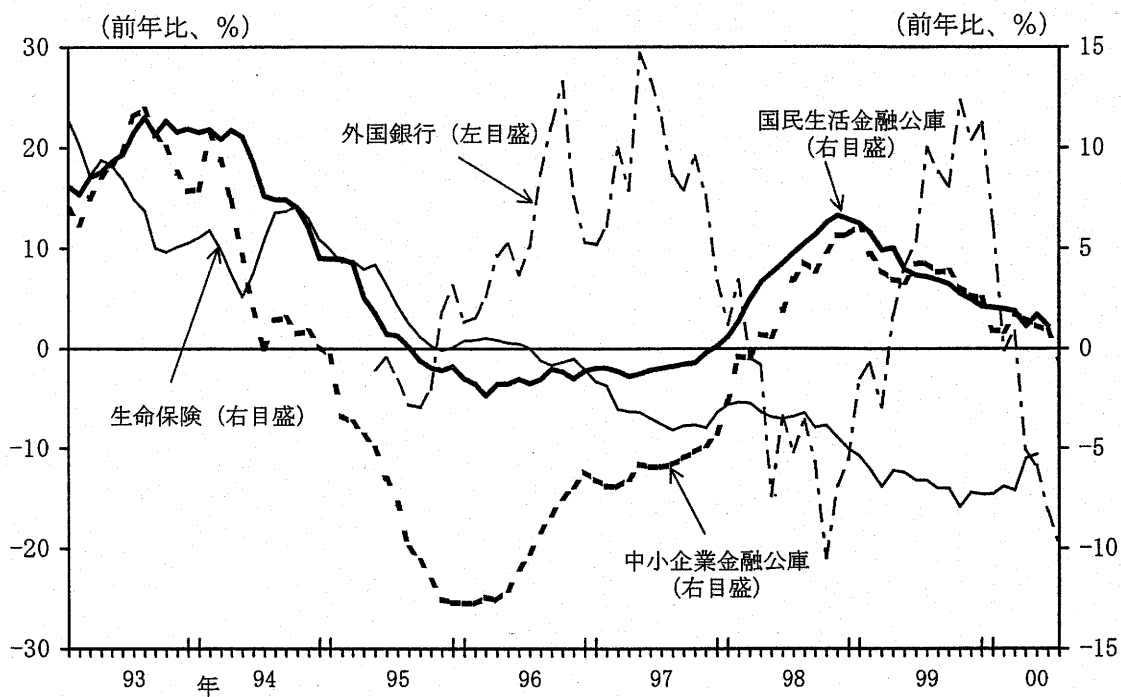


(注) 1. 普通社債、転換社債、ワラント債の合計。
2. 銀行普通社債を含まない。
3. アイ・エヌ情報センターのデータに基づき推計。

(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」、日本証券業協会「証券業報」、
アイ・エヌ情報センター「Funding Eye」

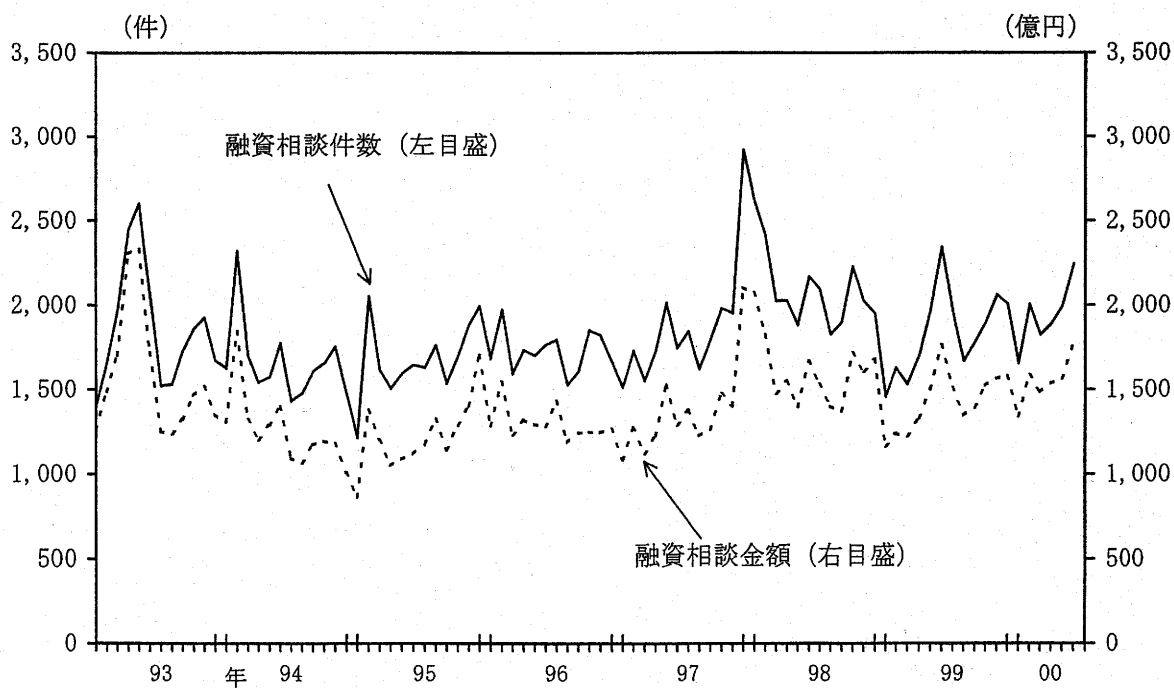
その他金融機関貸出

(1) その他金融機関貸出



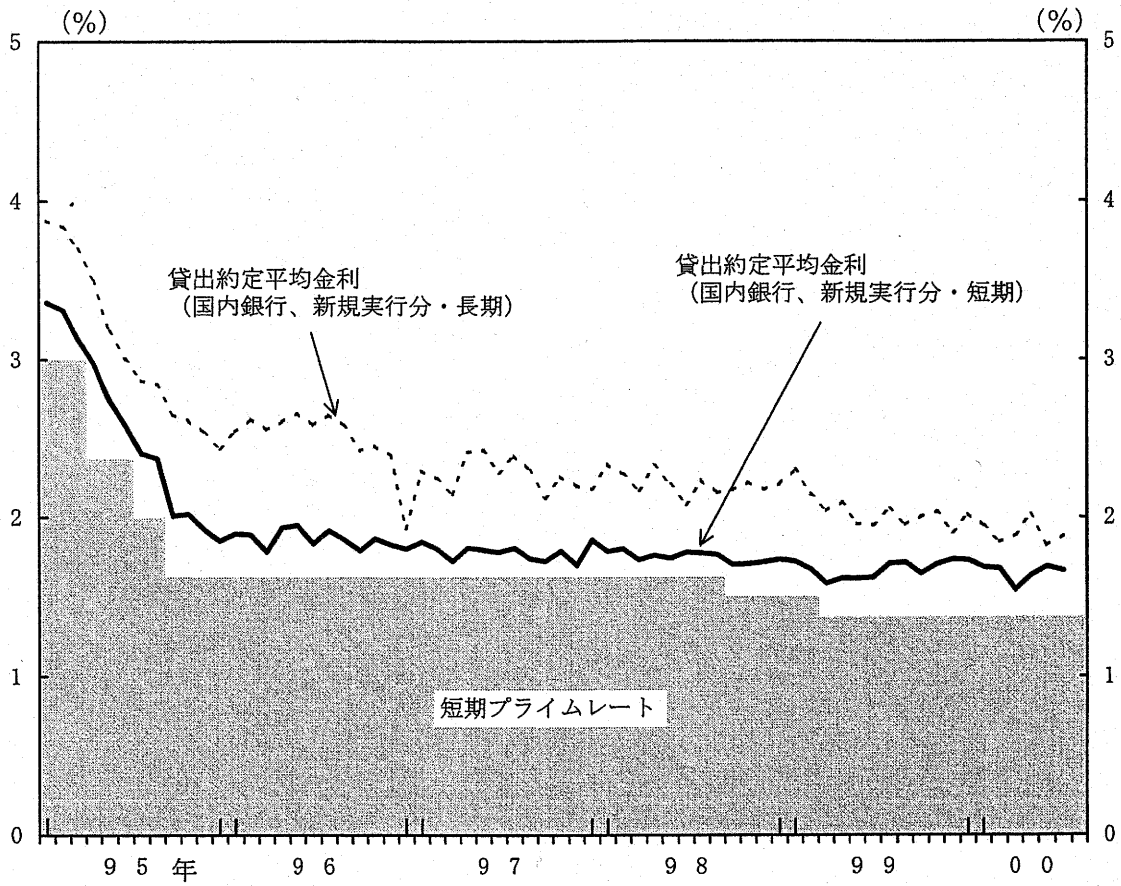
(注) 外銀は平残ベース。その他は末残ベース。

(2) 中小企業金融公庫の融資相談件数・金額 (直貸分)



(資料) 日本銀行「金融経済統計月報」、中小企業金融公庫「業務概況」

貸出金利

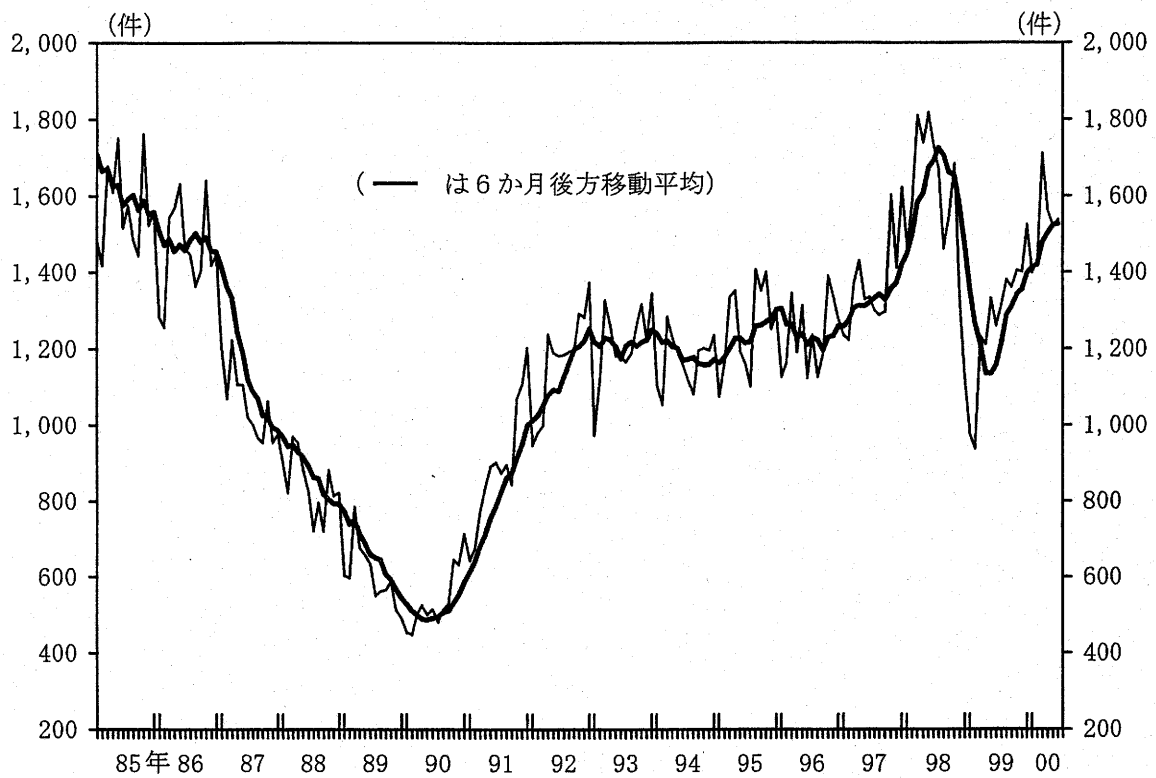


(注) 短期プライムレートは月末時点。

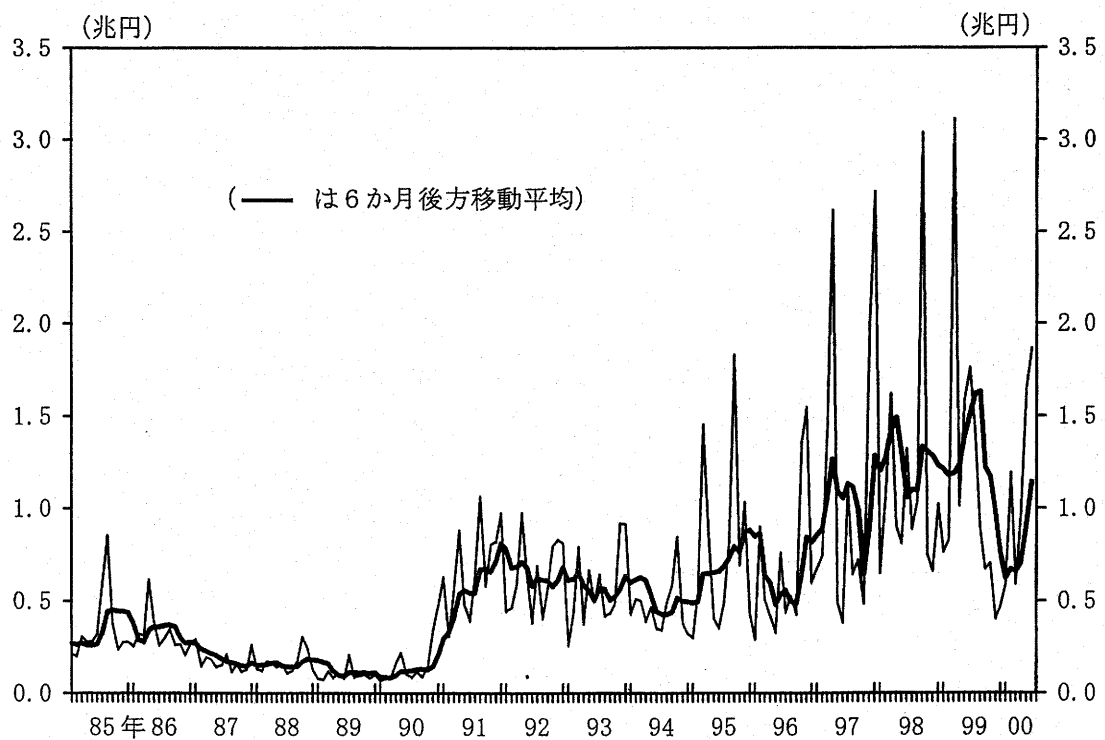
(資料) 日本銀行

企業倒産

(1) 倒産件数



(2) 倒産企業負債金額



(資料) 東京商工リサーチ「倒産月報」

要 注 意

一 覧 後 廃 棄

<特定情報：有（種類：マーケット関連情報）>
<配付先：金融政策決定会合関係者限り>

2000年8月
調 査 統 計 局

8月金融経済月報「基本的見解」の前月からの相違点（実体経済部分）

2000年8月

2000年7月

（総論） わが国の景気は、企業収益が改善する中で、設備投資の増加が続くなど、緩やかに回復している。

（各論） ・純輸出 … 堅調な海外景気を背景に緩やかな増加傾向を辿っている。
・公共投資 … 補正予算の執行に伴い高水準で推移している。
・住宅投資 … 概ね横這いで推移している。

・個人消費 … 一部指標にやや明らかな回復感に乏しい状態が続いている。
・設備投資 … 増加を続けている。

・鉱工業生産 … 増加している。
・企業の業況感 … 企業の収益や業況感も改善を続けて（いる。）

・企業行動 … 成長性の高い分野を中心に、設備投資増額など積極的な行動に転じる企業が増えている。

・所得形成 … 家計の所得環境は引き続き厳しい状況にあるが、企業活動の回復に伴って所定内・所定外給与や新規求人が増加するなどの動きが続き、雇者所得の減少傾向には歯止めが掛かっている。

（先行き） 今後の経済情勢については、公共投資は遠からず減少に転じるとみられるものの、純輸出は海外景気の拡大を背景に緩やかな増加が続くと予想される。企業部門では、既存設備の過剰感がおおしく、借入金返済等による財務体質改善が引き続き意識されているが、企業収益の改善が続く中で、情報関連等の成長分野への設備投資は今後も増加する可能性が高い。また、企業収益の改善は家計所得の増加を通じて、個人消費にも好影響を及ぼしていくものと考えられる。もつとも、企業の雇用過剰感がなお強く人件費抑制スタンスに大きな変化がみられないだけに、家計所得の改善テンポは当面緩慢なものとなろう。以上を全体としてみれば、景気は、海外経済等の外部環境に大きな変化がなければ、今後も設備投資を中心に緩やかな回復が続く可能性が高いとみられる。なお、日本銀行による金融緩和措置などによる良好な金融環境も、引き続き下支え効果を発揮していくものと期待される。

（物価） 物価面をみると、輸入物価は、4月以降の原油等国際商品市況の上昇等を反映して、上昇している。国内卸売物価は、原油価格上昇を受け石油製品は上昇したものの、電気機器等の下落が続いていることから、ほぼ横這いの動きとなっている。消費者物価は、民間サービス価格がやや弱含んでいるほか、これまでの円高から輸入製品価格が低下しているため、幾分弱含みで推移している。企業向けサービス価格は、小幅の下落が続いている。

物価の先行きについては、緩やかな景気回復の持続が展望されるも、需要の弱さ由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退している。また、原油価格上昇分の転嫁が、物価に対し一時的に上昇方向に作用するとみられる。他方、技術進歩を背景とする機械類の趨勢的な下落に加え、これまでの円高や流通合理化に伴う消費財価格の低下が下落方向に作用することから、総じてみれば物価は横這いしないしやや弱含みで推移するものと考えられる。

わが国の景気は、企業収益が改善する中で、設備投資の増加が続くなど、緩やかに回復している。

・純輸出 … 堅調な海外景気を背景に緩やかな増加傾向を辿っている。
・公共投資 … 補正予算の執行に伴い増加している。
・住宅投資 … 概ね横這いで推移している。

・個人消費 … 一部指標にやや明らかな回復感に乏しい状態が続いている。
・設備投資 … 増加を続けている。

・鉱工業生産 … 増加している。
・企業の業況感 … 企業の収益や業況感も改善を続けて（いる。）

・企業行動 … 成長性の高い分野を中心に、設備投資増額など積極的な行動に転じる企業が増えている。

・所得形成 … 家計の所得環境は引き続き厳しい状況にあるが、企業活動の回復に伴って所定内・所定外給与や新規求人が増加するなどの動きもみられ、賃金・雇者数の減少傾向には歯止めが掛かりつつある。

今後の経済情勢については、公共投資は遠からず減少に転じるとみられるものの、純輸出は海外景気の拡大を背景に緩やかな増加が続くと予想される。企業部門では、既存設備の過剰感がおおしく、借入金返済等による財務体質改善が引き続き意識されているが、企業収益の改善が続く中で、情報関連等の成長分野への設備投資は今後も増加する可能性が高い。また、企業収益の改善は家計所得の増加を通じて、個人消費にも好影響を及ぼしていくものと考えられる。もつとも、企業の雇用過剰感がなお強く人件費抑制スタンスに大きな変化がみられないだけに、家計所得の改善テンポは当面緩慢なものとなろう。以上を全体としてみれば、景気は、海外経済等の外部環境に大きな変化がなければ、今後も設備投資を中心に緩やかな回復が続く可能性が高いとみられる。なお、日本銀行による金融緩和措置などによる良好な金融環境も、引き続き下支え効果を発揮していくものと期待される。

物価面をみると、輸入物価は、原油等国際商品市況が一旦下落したことを反映して、幾分下落している。国内卸売物価は、電気機器等の下落が続いているものの、これまでの原油価格上昇を受けた石油・化学製品の上昇等から、横這いの動きとなっている。消費者物価は、民間サービス価格がやや弱含んでいるほか、これまでの円高から輸入製品価格が低下しているため、幾分弱含みで推移している。企業向けサービス価格は、小幅の下落が続いている。

物価の先行きについては、緩やかな景気回復の持続が展望されるも、需要の弱さ由来する潜在的な物価低下圧力は大きく後退している。また、原油価格上昇分の転嫁が、物価に対し一時的に上昇方向に作用するとみられる。他方、技術進歩を背景とする機械類の趨勢的な下落に加え、これまでの円高や流通合理化に伴う消費財価格の低下が下落方向に作用することから、総じてみれば物価は横這いしないしやや弱含みで推移するものと考えられる。

<特定情報：有（種類：マーケット関連情報）>
<配付先：金融政策決定会合関係者限り>

8月金融経済月報「基本的見解」の前月との比較（金融部分）

2000年8月

金融面をみると、短期金融市場では、オーバーナイト物金利は、ゼロ%に近い水準で推移しており、オーバーナイト資金の確保に対する懸念は払拭された状況が続いている。この間、コール市場残高は、若干減少している。

ターム物金利は、7月中旬以降、ゼロ金利政策の解除観測が後退したことを受けて低下している。ジャパン・プレミアムは、ほぼ解消された状態が続いている。

長期国債流通利回りは、7月末にかけて若干低下し、最近では1.6%台後半で推移している。この間、国債と民間債（金融債、社債）の流通利回りスプレッドは、総じてみれば、ほぼ横ばい圏内で推移している。

株価は、7月中旬以降、大手小売業者の民事再生法適用申請や米国株価の軟調等を受けて下落している。

円の対米ドル相場は、7月末にかけて緩やかな円安傾向となり、最近では概ね108～109円台で推移している。

金融の量的側面をみると、民間銀行は、基本的に慎重な融資姿勢を維持している。ただ、民間銀行自身を巡る資金繰り面や自己資本面からの制約は緩和されており、大手行などでは、融資先の信用力などを見きわめつつ、融資を回復させようとする姿勢を続けている。

しかし、資金需要面では、収益回復に伴うキャッシュ・フローの増加などを背景に企業の外部資金調達ニーズは乏しく、実体経済活動の改善が資金需要に結びつきにくい状況が続いている。また、企業はバランスシート調整の一環として、借入金を圧縮していくスタンスを維持している。これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

こうした中で、民間銀行貸出は、基調としては弱めの動きが続いている。社債やCPの発行も、落ち着いた動きとなっている。

6月のマネーサプライ（ $M_2 + CD$ ）の伸び率は、前月に比べ^{上昇}低下した。

以上のような環境のもとで、企業からみた金融機関の貸出姿勢は厳しさが後退しており、企業金融には緩和感が広がっている。

2000年7月

金融面をみると、短期金融市場では、オーバーナイト物金利は、ゼロ%に近い水準で推移しており、オーバーナイト資金の確保に対する懸念は払拭された状況が続いている。この間、コール市場残高は、若干増加している。

ターム物金利は、6月中旬以降、ゼロ金利政策の解除の可能性を織り込むことで上昇している。ジャパン・プレミアムは、ほぼ解消された状態が続いている。

長期国債流通利回りは、6月中旬以降若干上昇し、最近では1.7%前後で推移している。この間、国債と民間債（金融債、社債）の流通利回りスプレッドは、概ね横ばい圏内で推移している。

株価は、6月中旬にかけて一時下落したが、その後は、米国株価の上昇等を受けて持ち直している。

円の対米ドル相場は、6月下旬には一時103円台まで上昇したが、その後は下落に転じ、最近では概ね107～108円台での推移となっている。

金融の量的側面をみると、民間銀行は、基本的に慎重な融資姿勢を維持している。ただ、民間銀行自身を巡る資金繰り面や自己資本面からの制約は緩和されており、大手行などでは、融資先の信用力などを見きわめつつ、融資を回復させようとする姿勢を強めている。

しかし、資金需要面では、収益回復に伴うキャッシュ・フローの増加などを背景に企業の外部資金調達ニーズは乏しく、実体経済活動の改善が資金需要に結びつきにくい状況が続いている。また、企業はバランスシート調整の一環として、借入金を圧縮していくスタンスを維持している。これらの結果、民間の資金需要は引き続き低迷している。

こうした中で、民間銀行貸出は、基調としては弱めの動きが続いている。社債やCPの発行も、落ち着いた動きとなっている。

6月のマネーサプライ（ $M_2 + CD$ ）の伸び率は、前月に比べ低下した。

以上のような環境のもとで、企業からみた金融機関の貸出姿勢は厳しさが後退しており、企業金融には緩和感が広がっている。